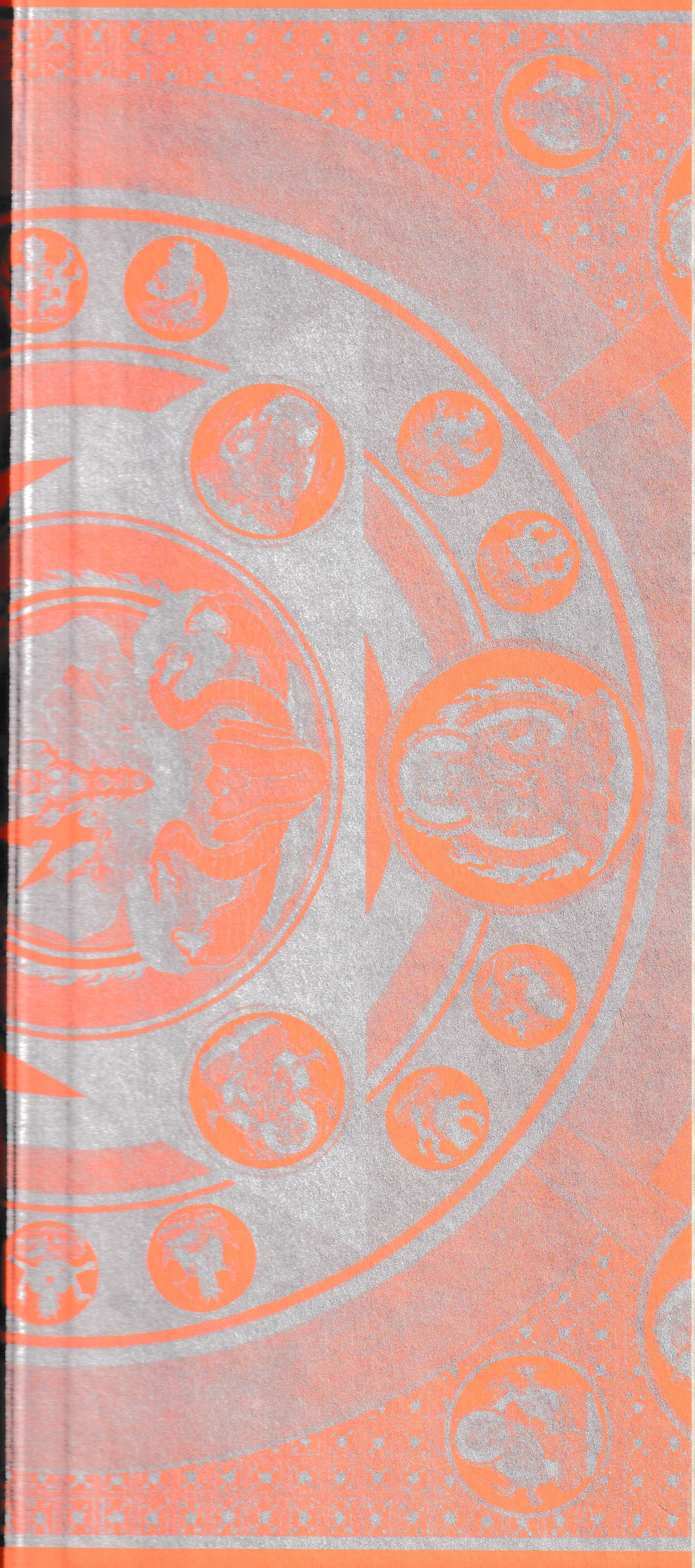
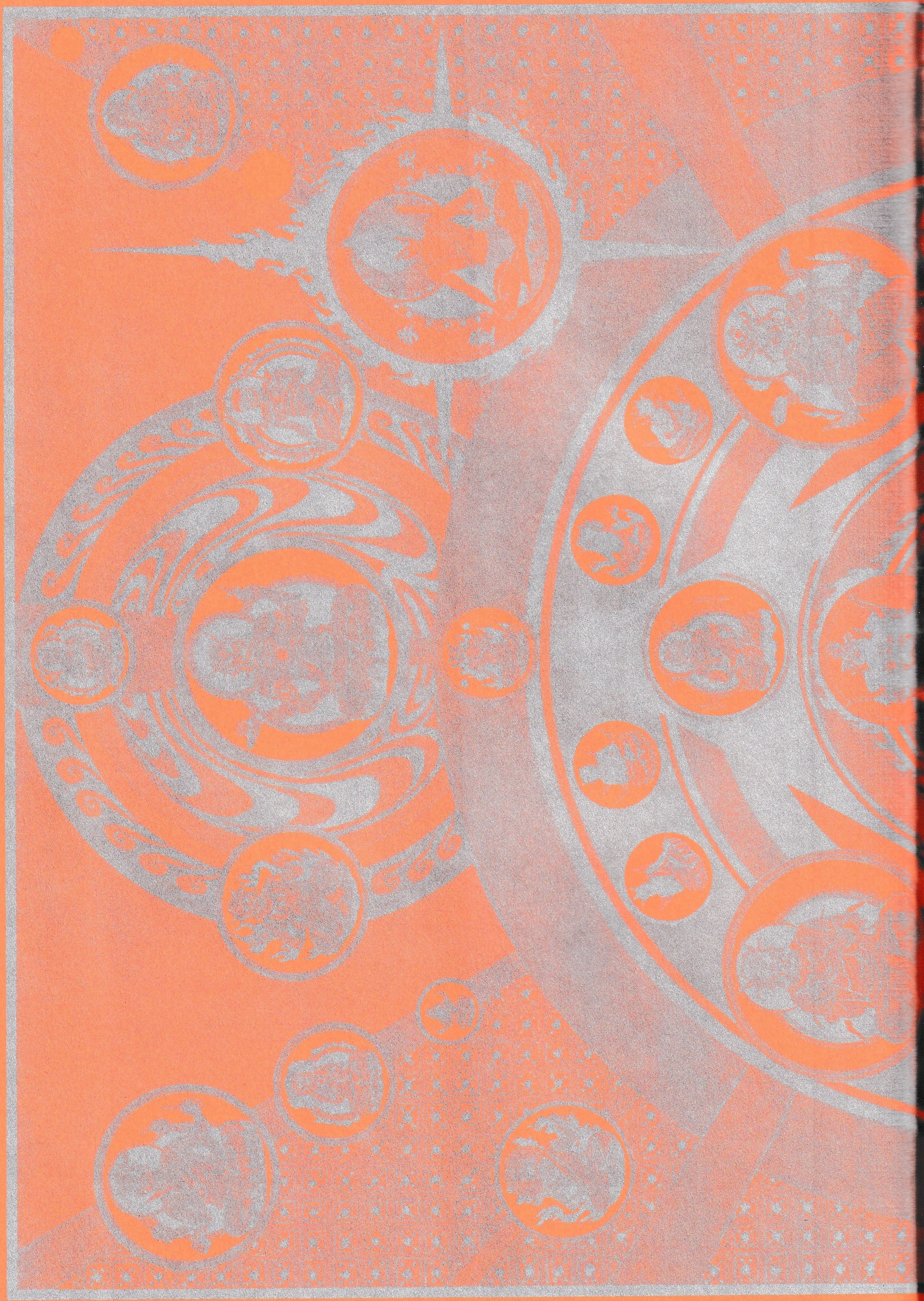
永井豪

鬼と悪魔のFANTASY

THE PSYCHIC WORLD OF GO NAGAI





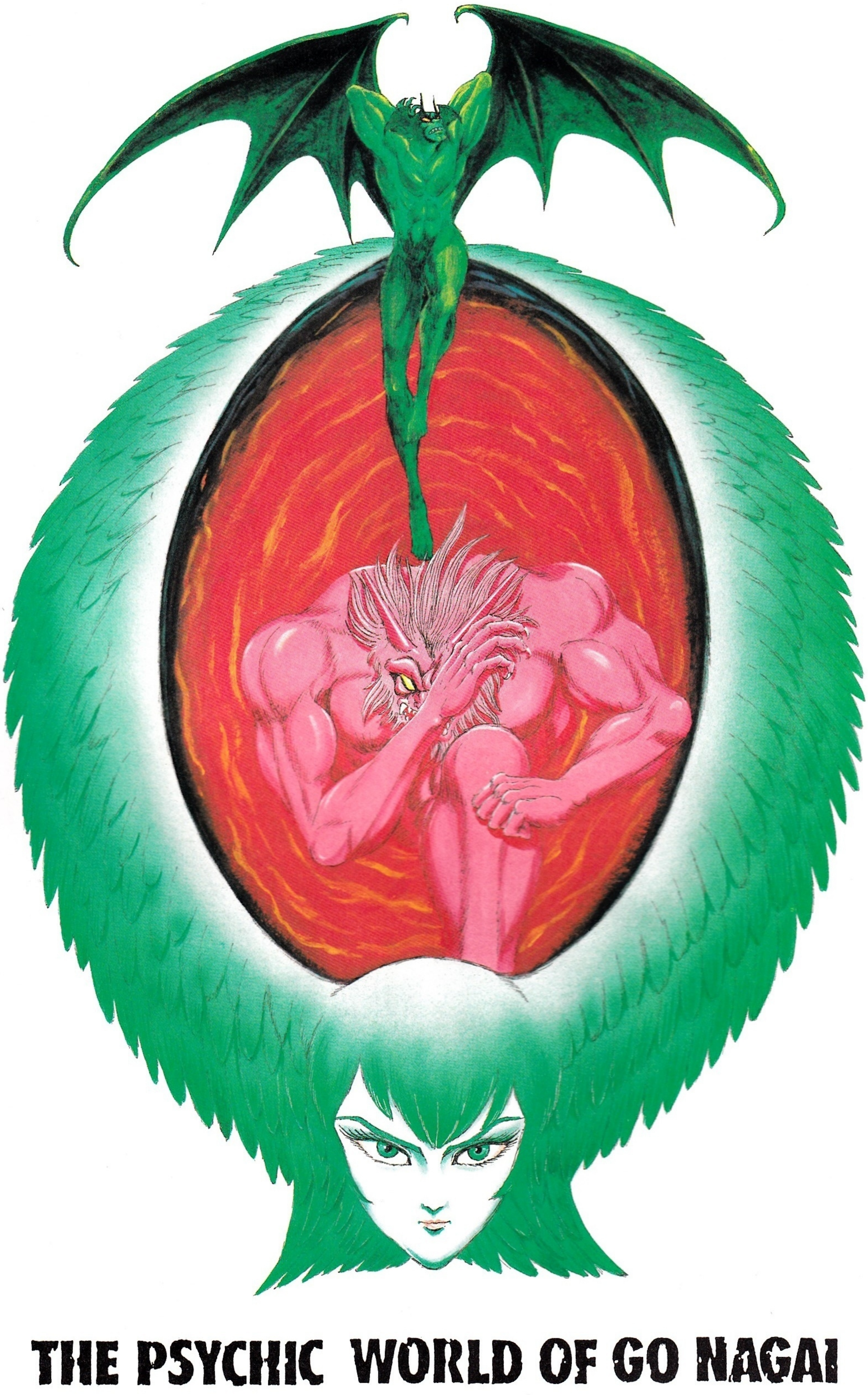




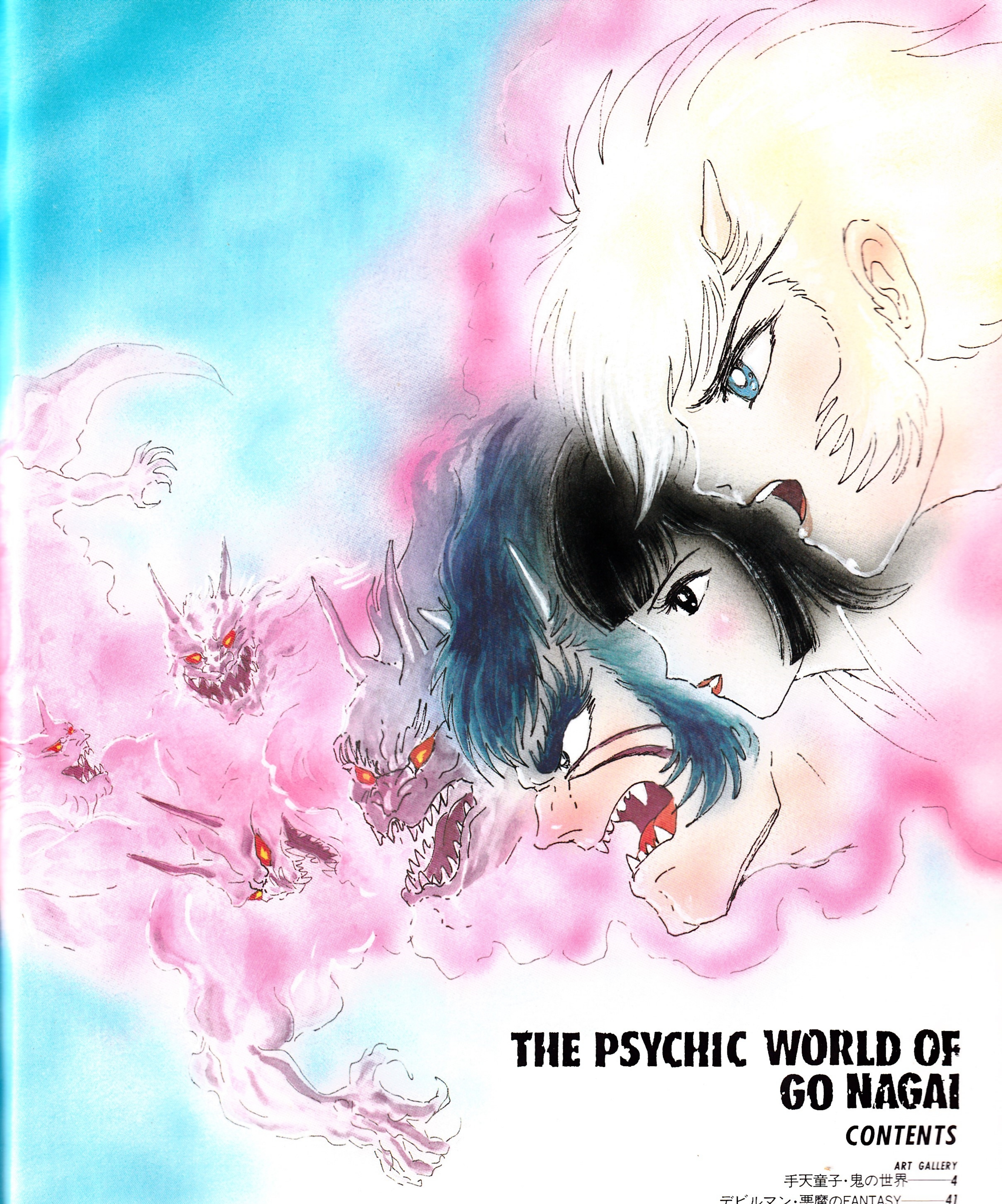
白鳥美雪〜手天童子より〜

永井 豪
鬼と悪魔のFANTASY

「手天童子」と「デビルマン」の世界



THE PSYCHIC WORLD OF GO NAGAI



THE PSYCHIC WORLD OF GO NAGAI

CONTENTS





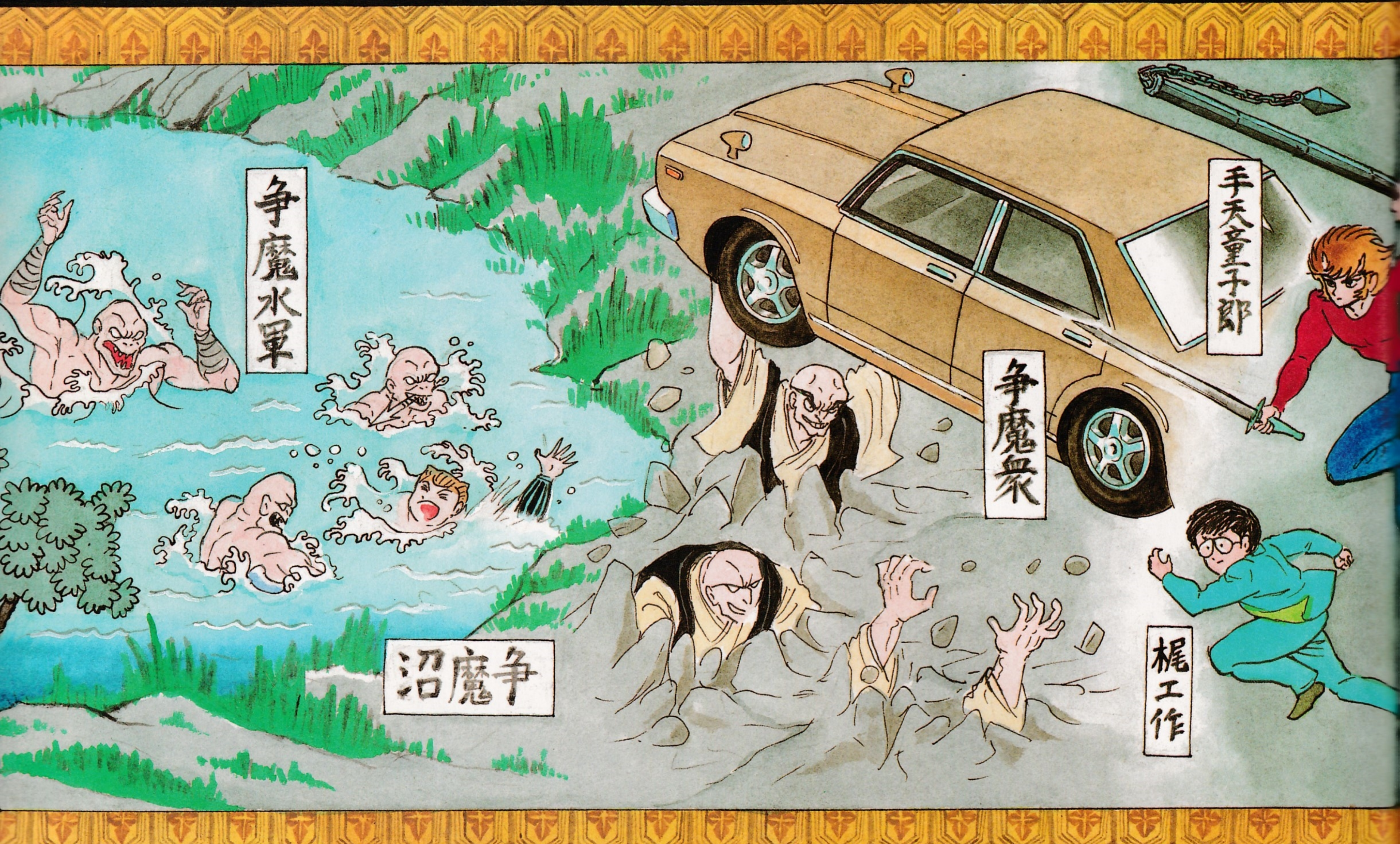
鬼獄曼荼羅

手天童子・鬼の世界




手天童子絵巻
暗黒寺の戦い
柴竜一郎
小谷椰子夫
白鳥勇介


幻魔の森
幻魔象


手天童子郎
争魔衆
梶工作
争魔水軍
争魔沼


牙の草原
邪腕坊
仙岩鬼



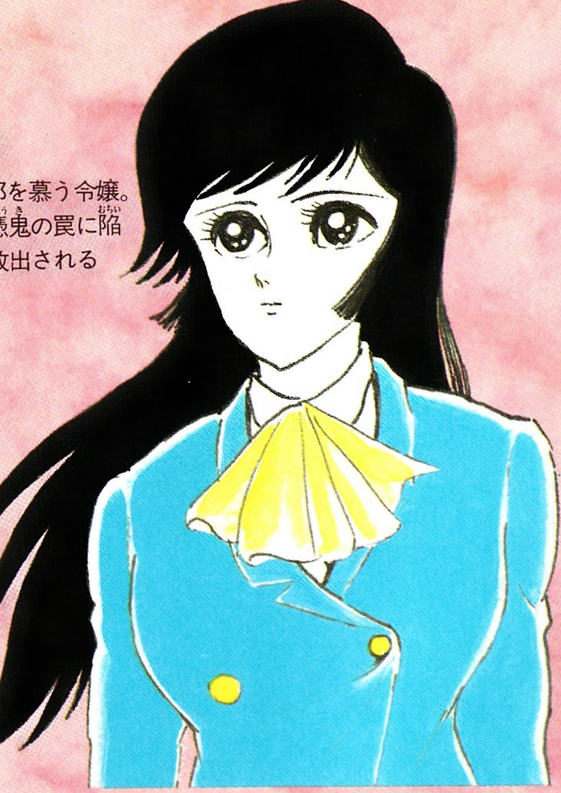


●手天童子郎とその仲間たち

光―破とは!?

暗黒の宇宙鬼獄界の真理を説く鬼獄曼荼羅の右上にえがかれた手天童子の絵が、鬼獄界を消滅させる「破」であり暗黒の闇に放つ唯一の「光」である。全ての闘争の原点となる。

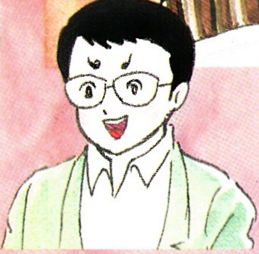




白鳥美雪
手天童子郎を慕う令嬢。そのため憑鬼の罠に陥るが無事救出される



白鳥勇介
美雪の兄。妹と共に手天童子の助人として活躍



大山直次郎
勇介の友人でボート部キャプテン。柔道三段

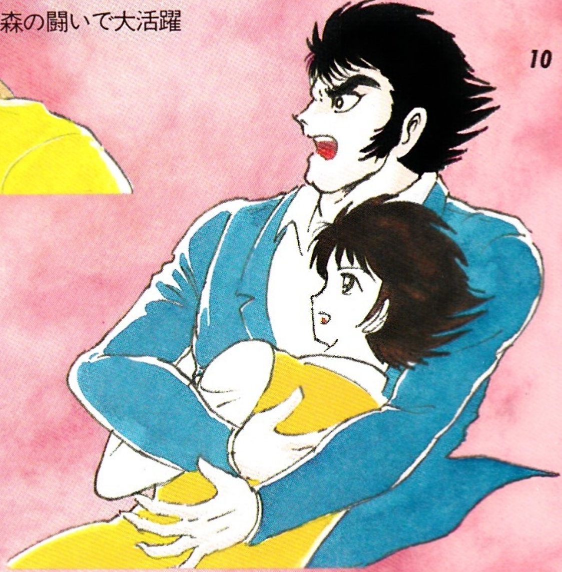


小谷椰子夫
相撲部キャプテン。助人五人衆のひとり

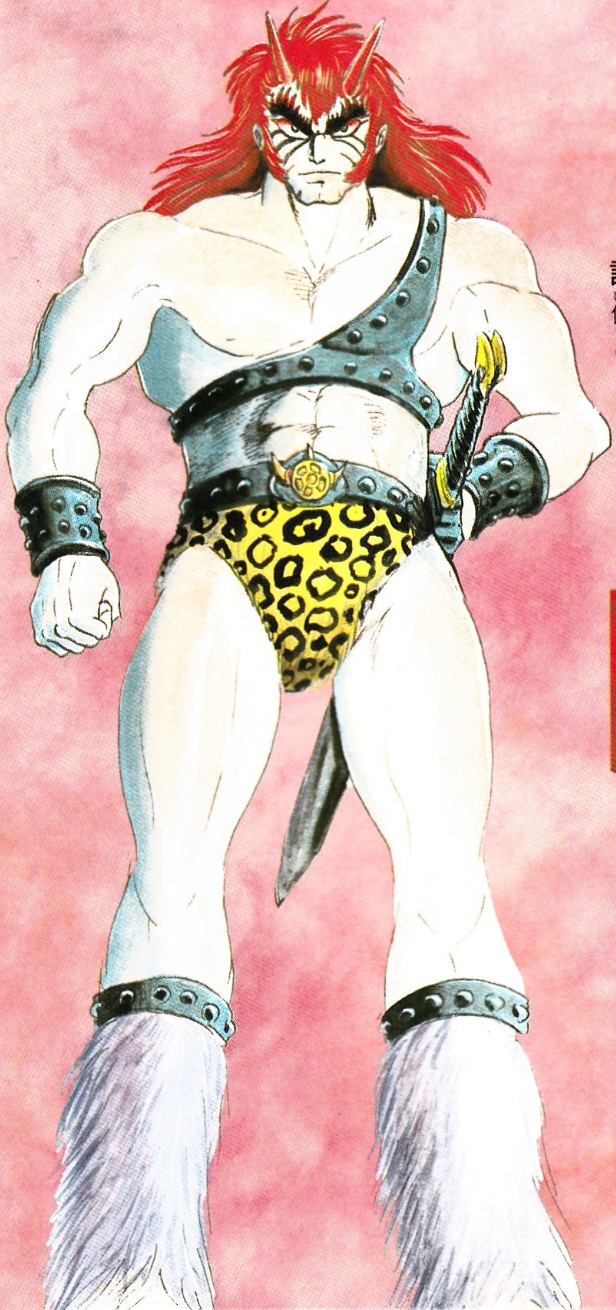
梶工作
五人衆のひとり。闇の森の闘いで大活躍



無双 力
元女子プロレスラー。暗黒寺の闘いで大活躍する



柴竜一郎・京子
手天童子の育ての親だが、京子は息子をとられて精神が錯乱



護鬼
修験者・役小角を守ったといわれる後鬼がモデル



戦鬼
同じく前鬼がモデル。護鬼と違って鬼獄界に住む本物の鬼

光—破の章



手天童子郎（しゅてんどうジロー）

子宝に恵まれない柴夫妻に鬼からさずかった子供。15年間のタイム・リミットが迫ると共に、柴夫妻の苦悩は深まり、子郎に対する闇からの圧迫も次第に激しさを増していく



光から　降魔の剣・童子めざめる



闇へ……——本尊・大暗黒死夜邪来の謎

闇―鬼獄の章

暗黒邪神教

闇の仏法。闇をとうとび、悪こそ人間の真理とする。信者は全国に数万人といわれ、邪鬼や魔鬼の鬼の仏像をまつっていることから鬼仏衆と呼ばれる。全国にかくれ寺を持つが暗黒寺が総本山である



本尊・大暗黒死夜邪来

すべての邪、すべての罪、ありとあらゆる悪逆がはびこる暗黒世界へ全宇宙をまきこみ人々を悪徳の世界へ導く暗黒邪神教の大邪神

鬼国天死神



鬼目天大魔

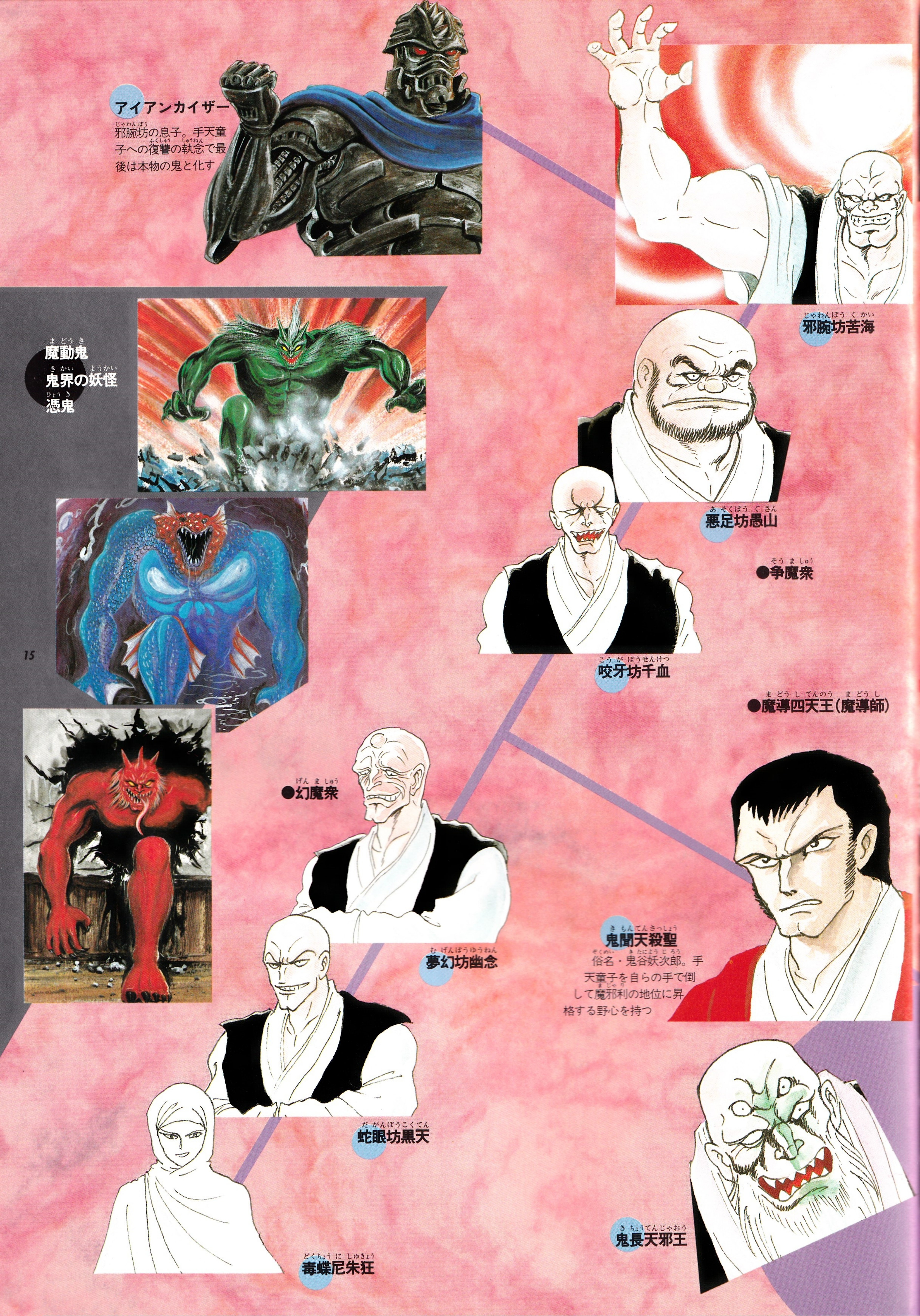
魔邪利妖念

邪神教の最高位の僧。魔邪利の下に魔導士が位置するが、本尊を別にすれば魔邪利妖念が暗黒邪神教の最高指導者である



鬼獄界

大暗黒死夜邪来によって作られた鬼たちの住む世界。そもそもは人間のねたみ・そねみなど怨念エネルギーによって創られた世界をいう



アイアンカイザー
邪腕坊の息子。手天童子への復讐の執念で最後は本物の鬼と化す
邪腕坊苦海
魔動鬼
鬼界の妖怪
憑鬼
悪足坊愚山
●争魔衆
咬牙坊千血
●魔導四天王(魔導師)
●幻魔衆
夢幻坊幽念
鬼聞天殺聖
俗名・鬼谷妖次郎。手天童子を自らの手で倒して魔邪利の地位に昇格する野心を持つ
蛇眼坊黒天
毒蝶尼朱狂
鬼長天邪王


手
天
童
子

オカルト＆サイキック・ワールドにようこそ！

永井豪 オカルト夢三夜

連続三夜に亘る対談は、鬼や悪魔のオカルト的世界を学問、映画、日常など多角的に語りつくした、いわば世紀末版デカメロンだ！



オカルト夢三夜 其ノ壱
鬼と伝奇ロマンの世界

とにかく描き始めて つじつまはあとから

中島 豪ちゃんはなぜか、鬼と悪魔を二つに分けてるでしょ。別々の話に書いて。

永井 いやだって、デザインが違って描けるじゃない(笑)。

小松 鬼や悪魔を描くときに、映像的に悪魔っていうのはやっぱり、鬼とは違うイメージなんですか？

永井 基本的には違いますね。

小松 悪魔はヨーロッパ的なの？

永井 そうですね。

中島 洋モノと和モノで分けてあるとか。

永井 悪魔の図版なんかかなりありますからね。

中島 豪ちゃんの場合、名前のつけ方からしてカタカナだけの作品と漢字だけの作品に意識的に分けている。例えば『手天童子』なんかには一切カタカナ名前のバケモノって出てこない。でも『デビルマン』は全部カタカナですし…、私は『魔界水滸伝』で両方混ぜちゃったけどね。

小松 もったいない。

中島 いや、両方を戦わせてみたかった。

永井 あの水木しげるさんの『ゲゲゲの鬼太郎』にだって、西洋のオバケと日本の妖怪と戦うのがありますから。

中島 豪ちゃんはそういう歴史的なことよりもむしろ現象としての鬼の表われ方の方に興味があるんでしょう。

永井 ぼくの場合は描くときはイメージが先にパッと出ちゃって。『手天童子』を描いたときも、いきなり映像が見えちゃうんですね。鬼が赤ん坊くわえてるような場面がパッと見えてね。

中島 でも一応下調べとかはするわけでしょ。

永井 しないです。

中島 全然しないで全部想像で…。

永井 そのシーンが面白いからとにかくそこが描きたくてパッと描いちゃって。

中島 前後のつじつまは、どうしてます？

永井 あとから、どうやって設定していこうかな、と考える。それで、描いてるうちに結論らしいものが出てくるんです。

中島 描いてるうちには下調べとか、資料調べはするんですか？

永井 ええ。途中で調べたり、必要なとこは取材しますけども、ほとんど想像で。

中島 それでよくつじつまが合うなと思って。

永井 だから途中、つじつまを合わせるときがすごく苦しいんですよね。一体この作品は何なんだろう、まとまるんだろうかってのたうちまわるんですよね。

中島 それで私は以前に抗議したんですけど『手天童子』というのはまとまりすぎちゃったと…。あれだと全部お母さんの宇宙の中になっちゃうから、もうちょっと鬼というものを現実に存在させてほしかった。

永井 そうなんですけどね。結局、ぼくがあそこで感じた鬼っていうのは、怨霊の「怨の鬼」。要するに精神体としての鬼っていうのは、怨みを持った者の霊体に角がはえてくるんじゃないか。そういうものを、感覚の鋭い人が姿として見ちゃうんじゃないかなと。

中島 ところで、豪ちゃんと違って小松さんの場合はひたすら調査の面から入っていかれるわけでしょう。

小松 なにしろ私は学者ですからね。調査記録とか、書き残されたものがないと話にならないですよね。自分で作ってんじゃないかって言われたらだめですから…。

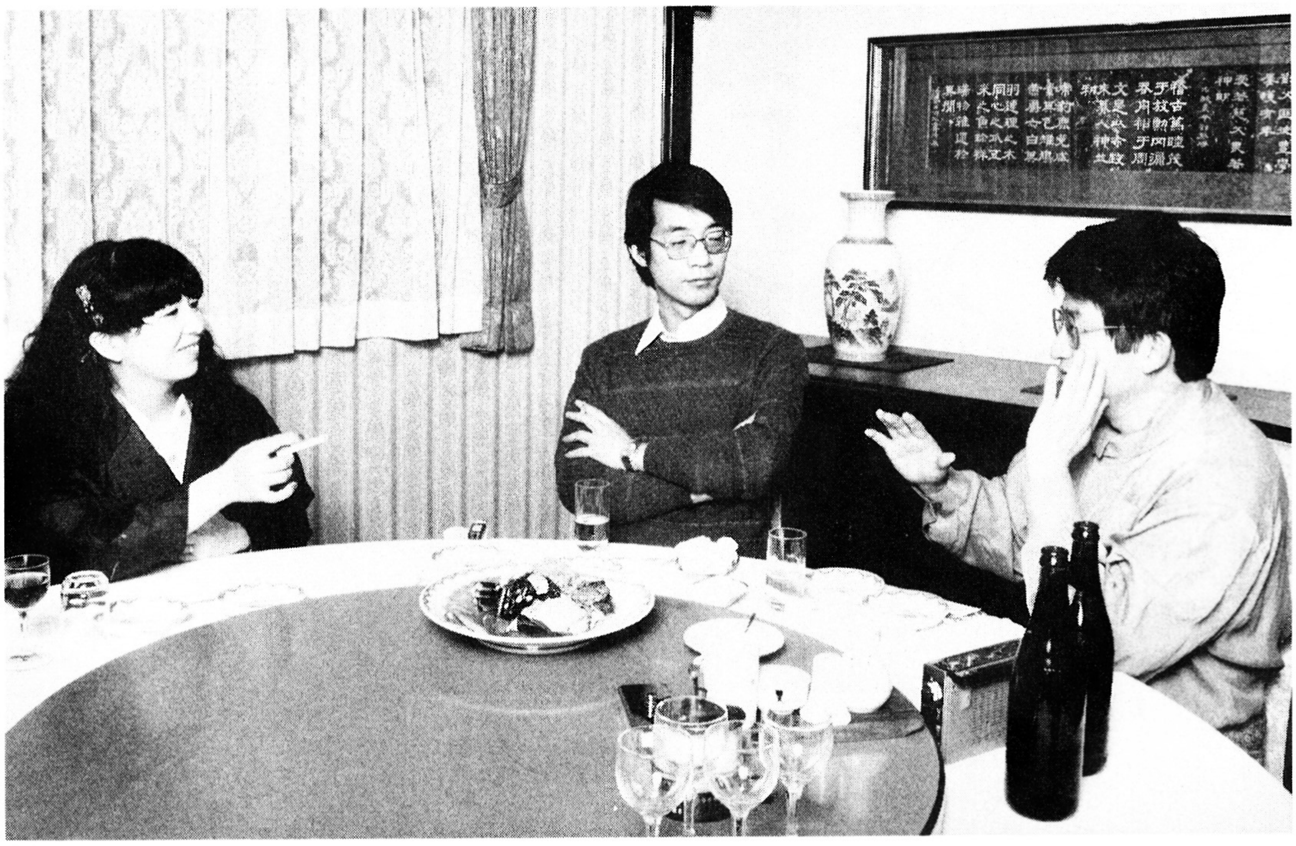
中島 それで私思ったんですけど、フォークロア[*1]っていうのは長い年月かかって原型ができてくるわけでしょ。もとの話が何かあってそれが原型になって。その作用っていうのを、豪ちゃんなり私なりは、それを個人の代で、わりと一瞬のうちにやるじゃないかなと。何か原型になるものをパッとつかむわけ、どこかから。どこかってよくわからないけど(笑)。

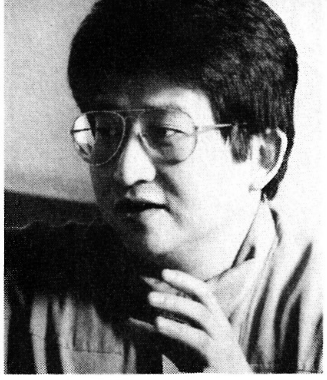
鼎談 小松和彦・中島梓・永井豪

第一夜では、論文、小説、マンガとそれぞれ形式は異なってはいても、共に闇の世界を照射し表現する三人による鼎談です。第六感がピンピン反応し合う刺激的な一夜でした

［こまつかずひこ］大阪大学文学部助教授、日本文化学講座担当。1947年東京生まれ。埼玉大学教養学部卒、東京都立大学社会科学研究科博士課程修了。日本文化の「闇」の部分に着目し、「鬼」や「妖怪」の研究を通じて権力をもたない無名の人々の文化と歴史を探る気鋭の文化人類学・民俗学者。主著に『神々の精神史』北斗出版、『憑霊信仰論』ありな書房、『異人論』青土社、『鬼がつくった国・日本』(内藤正敏氏との共著) 光文社などがある

［なかじまあずさ］評論家。もう一つのペンネーム、栗本薫で作家としても活躍。1953年東京生まれ。早稲田大学文学部文芸科卒。'77年「文学の輪郭」(中島梓)で第20回群像新人賞 (評論部門)、'78年「ぼくらの時代」(栗本薫)で第24回江戸川乱歩賞、'81年「絃の聖域」(栗本薫) で第2回吉川英治文学新人賞を受賞。その他代表作に大長篇ヒロイック・ファンタジーの「グイン・サーガ」シリーズ、永井豪とコンビを組んだ「魔界水滸伝」シリーズなどがある





いきなり、鬼が赤ん坊をくわえている映像がパッと見えて

永井　そうだね。わかんないんだけど、とにかくイメージが浮かんじゃうから描くっていう感じで。

中島　そうそう、その感じはすごく私にはよくわかる。

永井　だから、どこから浮かぶか自分にはわからないし、むしろどうしてこんなイメージばかり浮かんでくるのか、困っちゃうこともあるんですけどね。

中島　豪ちゃんの場合は画で見えてるわけなんだけど、私の場合も実は絵で見えるんです。私は絵が描けないから字で書くし、豪ちゃんは画で描くという。

小松　どうなんだろうね、昔の人は一つの村で共同生活をしてたわけですね。昔から同じような生活を繰り返していた。小さいときから「あの池に行っちゃいけないよ」とか、「あそこにはオバケが住んでるよ」とか、「あの川は河童がいるよ」とか、そういう風に小さいときから教えられて育ってきて、知らないうちにそういう伝承を体に染み付けている。それで、あるときある状況で――本当に見えたかは別として――少なくとも共同の幻想として妖怪などを見てるわけですよね。そして、個人的体験として、「実は私はあそこでこういうのを見た」というと、周りの人たちが「あ見たか、それでどうだった」とかって形で語り出してまた一つのフォークロアが出てきて、ある意味では昔の伝承を確認するような形で、また個人化されていくわけですよね。それぞれに似たようで少し違う体験談を持って…。今の時代には、そういう教育はないわけでしょ。ところが、作家の方は、それを周りの人に語るというよりも、作品として語るわけですね。

中島　ええ。今はマスコミというものがあって、個人の声っていうのはマスコミを通した伝聞になっちゃうわけです。ところが小説なり、コミックスというものは、実際に私が書いたとおり、豪ちゃんが描いたとおりの形で発表されるんですよ。だから、それが受け取られるときには――十万部売れていようと百万部売れていようと――語り手と受け手の関係は一対一なんですね。だからそういう意味では、非常に原始的な形でのコミュニケーションが、そこでだけは保たれてるんじゃないか。今はみんなが集まって話すということはまったくないわけだから、昔は個人の言葉が届く範囲に共同幻想があったけれども、今はその共同幻想を作っていくっていうのは、見たものをそういう形にできる人だけの特権になっちゃってるんじゃないか。それを「語り部」っていうとすごく話は簡単になっちゃうけれども…。

永井　やっぱりそれと、昔は具体的にそういうものを表わす人が少なかったから、逆にみんなで共同幻想を持ちたがって、そうなったのかもしれない。

中島　それと、昔の人の方が見るチャンスが多かったんじゃないかしら…。

闇を恐れない現代の子供たち

永井　そうだね。大体、今、闇がなくなってるから。ぼくらの小さい頃にはまだ闇があったけど、最近の子供たちって闇を全然恐れない。闇が怖いって全然知らなくなっちゃった。

小松　けれども、ひところに比べて伝奇ロマンが好まれるっていうのは、闇がなくなった反動でもあるんじゃないかな。

中島　というか、闇のない状態には本当は人間は耐えられないんじゃありませんか。ずっと昼だけっていうのは。

永井　結局のところ人間て未知なるものを求める心があって、全部見えちゃったらいやなんですよ。だから見えないところを捜したい、無理にでも見つけたい。昔は例えばアフリカは謎の大陸だったけど、もう謎がなくなっちゃった。宇宙もどんどん解明されてくる。となったら、心の奥底にある未知の部分を引っ







『手天童子』の衝撃的なイントロ。このヒトコマが傑作を生んだ



ぱり出さなきゃしようがない。そういうわけで、異次元の生物らしきものというかね、鬼であり妖怪であるものを求めてくるんじゃないかな、と思うんです。

中島　もうちょっと卑俗なところから話をうかがいますが、例えば、小松さんは現実に幽霊を見たことがありますか?

小松　いいえ、幽霊は見たことないですけどね…。まず、お二人からお話しいただかないと。

中島　え、幽霊ですか。私はないですよ。私は視覚がひらいてないですから、見たことはないですよ。聞いたり感じたりはすごくしますけど。

小松　ぼくは金縛りに時々あうんですよね。

中島　幽体離脱[*2]とかはしませんか?

小松　さあ、してるのかなあ。金縛りの一番ひどいのは明らかに何かが家の中に入ってきて、自分の体を強く押しつけて、また出ていくというんだけどね、それはよーく覚えてますが、霊の形を見たというのはありませんね。

永井　宮田登っていう人の『妖怪の民俗学』という本によると、昔は必ず開かずの間を作って、妖怪が棲めるような空間を置いてあったんだって。それがどんどんなくなってしまって…。

中島　ダイナミックプロなんてありそうですね(笑)。

永井　まさか開かずの間はないです(笑)。

中島　いや、妖怪が棲んでいる部屋が、現実に。

小松　よく話題になるんですけどね、ぼくなんかの仲間でも、団地とかではそういう妖怪が棲んでる場所的な空間がない。トイレにしてもみんな明るいわけですよね。そうすると、子供たちがおかしくなってくるんですよ。いじめみたいなことが、へんなところで噴出しちゃうんですね。

永井　あー、なるほどね。開かずの間を各学校に作ればいじめはなくなるかもしれない(笑)。

シンボルとしての妖怪とか異人

中島　豪ちゃんの場合はやっぱり現実にそういうものがいると信じてるわけでしょう。

永井　ええ、確信してるんです。実は(笑)。

中島　それを私は小松さんにうかがいたかったんだけど、小松さんは学者でいらっしゃるから、フォークロアってものを分析するでしょ。その際に、これはこういう表象であると、こういう意味がある、こういう意味付けの象徴である、という形で書かれるでしょ。その奥で本当にそういう…。つまりね、小松さんはその分析がすべてだと思ってらっしゃるのか、それとも本当に超常現象っていうか、そういう存在っていうのはあると思ってらっしゃるのか、それが知りたい。

小松　ぼく個人にも――それが超常現象かどうかは別として――そういう体験は何度かありますよ。

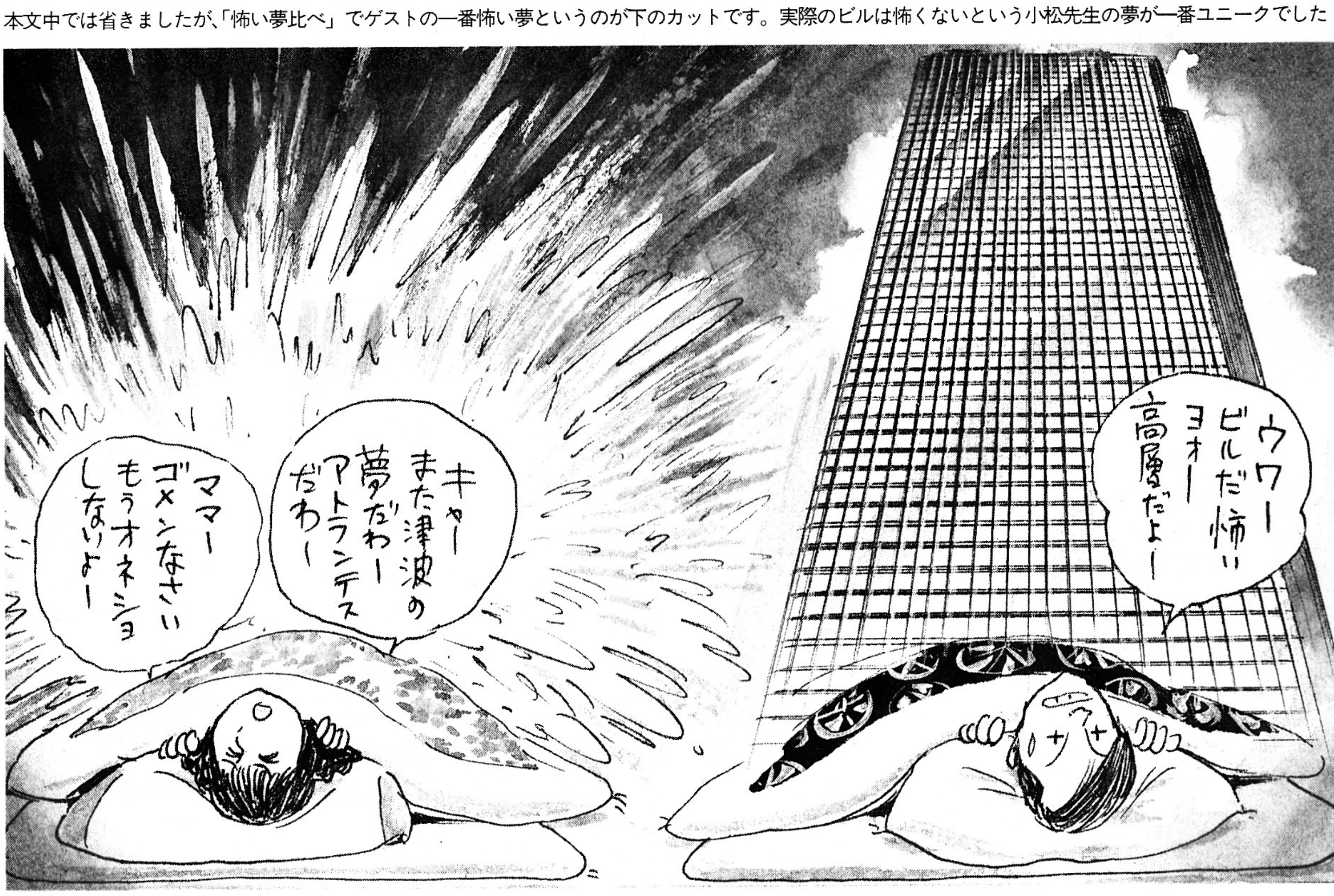
中島　超常現象っていっちゃうと変ですけど。例えば小松さんのご本だと、妖怪っていうのはイコール異人である、ということになっちゃうでしょ。そうすると実際には人間なわけですよね。

小松　いやぼくが言ってるのは、妖怪や異人というのは一つのシンボルなんですね。ただ、ぼくの言葉では、妖怪って何だって言われたら、「力」なんですよ、と答えざるをえないですね、そういうふうにしか表現できない。力が形を取るときに、異人とかそういうシンボルが大きな役割を働かせるわけです。だから、鬼だの何だのっていうのを全部抽象化していけば、何か得体の知れない力になってしまうと思うんです。

中島　その得体が知れない力に関しては要するに人間のものではない…。

小松　人間のものではないというか、科学が分析しうるようなものなのか、それがよくわからないんです。ただ、人間が肌で感じた段

本文中では省きましたが、「怖い夢比べ」でゲストの一番怖い夢というのが下のカットです。実際のビルは怖くないという小松先生の夢が一番ユニークでした





津波の夢をよく見るんです。それで私はアトランティスの生き残りだとか思って。

階では力なんですね。それを何とか表現しようとすると、そのときの人間が持っている、いろんなイメージをつぎはぎしていかなきゃいけない。

永井　それはよくわかりますね。大衆心理というか、そういう総合的なイメージっていうのは、社会的な抑圧とかそういう異形のものを形に表わそうとしたらそういう感じになるんじゃないですか。それは、要するに人間の情念みたいなエネルギーがそういう風に形作っちゃうのかもしれないし…。

小松　その通りですね。それで、例えば、永井さんの作品でも、ある一つの形ってのができるでしょ。するとその部分は、独創的な部分と、過去の歴史的な鬼の絵の部分と、非常に重なると思うんですよ。例えば、角みたいなものは映像的にどんな形してるかって聞いたときに、全世界どこでも、必ず角がはえてるとは限らないわけです。ただ、何か知らないうちに、非常に文化的な映像というかイメージに規定されていると思うんです。

酒呑童子とは八岐大蛇の子孫

中島　角川春樹さんがね、私の『魔界水滸伝』を「俺はドキュメンタリーとして読んでるからなあ。」(笑)。「俺はスサノオの生まれ変わりだから、これは俺のことだよ。」でもスサノオは悪の化身だっていう説もあるし。豪ちゃんの『凄ノ王』でも、初めのうちはすごい悪神なのね。悪いことばかりしている。

永井　最終的には「根の国」の王になっちゃうんですね。

中島　あれで私悩んだのは、八本の足出してやってくるでしょ、宇宙の向こうから。あれじゃ八岐大蛇※3と同一人物になってしまう。

小松　でも八岐大蛇の分身でしょ。スサノオって。

中島　そうかー、そうなの？

小松　そういう学説もちゃんとありますよ。

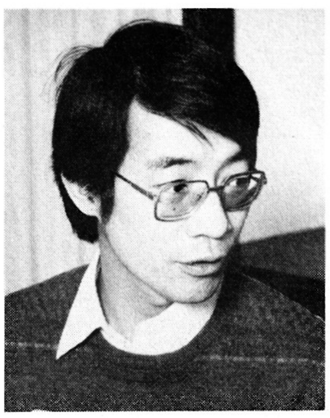
中島　とにかく、『バイオレンスジャック』に出てきたときに本当に悪い奴になってたから(笑)。

永井　いやあれは、ジャックによそからかかってくる敵にするしかないから。ただそれだけ(笑)。

小松　あのね、酒呑童子っていうのは八岐大蛇の子孫なんです。はっきりと文献の中に出てきます。中世に作られた説明の中に、「伊吹童子」というのがあるんですよね。伊吹山に*4住む酒呑童子の話。伊吹山の神ってのがおりまして、それが里の女と結婚するんです。伊吹の山の神というのは実は蛇なんです。それで生まれた子供が鬼子で、捨てられるんです。その子がやがて大江山に行って、酒呑童子になるんですけども、その伊吹山の明神が次のように語るわけですよ。「かつて、私は出雲の国で八岐大蛇と名乗っていたけれどもスサノオに追っぱらわれて、ほうほうのていで逃げてきて、その土地の伊吹の山の神さまになった」と。当時の人々の意識の中でもそういう連関性をもっていたんです。それは別として、『鬼がつくった国・日本』を作ったときも本当に怖い経験をしましたね。

中島　出ましたか？

小松　ええ、超常現象らしきことを内藤正敏さんと体験してしまった。滋賀県の多賀大社に取材に行ったときのことです。この神社に「多賀参詣曼荼羅」という絵図があって、その絵図の下方に、ろうそくを頭に立てた女が小さな祠に呪いに行く絵が描かれているんです。それがどのあたりだったのかを調べてみようとしたわけ。あちこち聞いて回って、ようやく日暮れ近くになって森の中にひっそり建っている天神社を発見したんですが、高性能を誇る内藤さんのストロボがこの時に限ってまったく効かなくなったんです。この時は本当にゾーッとしましたね。暗い森の外に出たら、パシャパシャとまた作動しだすんです





右ページ上のカットと共に、アメコミ誌〝EPIC〟に発表された作品『鬼(Oni)』のヒトコマ



よ。

中島　豪ちゃんが前に鬼のお寺に行ったときにも、鬼のお寺に入ってから出るまでの写真が全部感光してたという…。

永井　そうそう。うん。

小松　そういうこと、起きるんですよね。
　だけど今この時代にそういうものが表に噴き出てくるというのはどういうことなんでしょう。

中島　それはもう終末が近いからじゃないですか(笑)。

小松　本当に終末が近いのかなあ。何か気持ち悪くてね。伝奇ロマンぽいものがはやって、かなり売れているというのが…。

永井　それは衆意的なもんでしょうね。求めたくなるんですよ。

中島　あの野田昌宏さんがよくいう、一九五〇年代のパルプ雑誌のキャプテン・フューチャーに代表される完全な勧善懲悪の、キャプテンもののブーム。あれは何故だったのかってアメリカに渡って調べてもわからない。
　だからそういう、時代が必要としているものは必ずある。そして、時代自身にもやっぱり生命があるんじゃないかな、という感じがします。それで、例えば、小さい子供にはミルクが必要だ。それから母親の愛が必要だ。そして、あるときになると、参考書、じゃないにしても、要するにそのときに必要なものってあるわけでしょう。そういうものが時代の要請としてもあるんじゃないか。で、やっぱり、今、もし闇が必要であるとしたら、要するに闇が必要とされているから…。

永井　でも、求めてくれないとぼくらも描けないわけで、求めだしたらやっぱり描けるという感じがあるから。結局、大衆心理に左右されてると思うんですよね。やっぱり社会的な、経済の動向とかも関係あって、社会不安とかそういうものを、別な不安でまぎらわせようと、別な恐れでごまかそうとする作用だと思ってるんですよね。

中島　わりとクールに見てるのね。

永井　うん、クールに見れば。求められるってこと自体はね…。

中島　でも、豪ちゃんの場合はデビューしたときと今と、ずいぶん描いてるものが違う(笑)。

永井　ぼくはすぐそういうの敏感に感じちゃうから。それでそれに影響されて違うもの描いちゃうんだと思うんですけども。今、景気が…。一般的には日本は豊かってことになってるんだけれども、先が見えない不安感がこういうオカルト[※5]・ブーム呼んじゃうんだと思うんですよね。

中島　結局それと、オカルト・ブームっていうのは、ある意味では人間以上の存在があるっていうことでしょ。だから、人間の限界っていうのがもの凄くわかってきちゃったんだと思うんですよ。例えばアフリカで飢餓がある、核戦争がある、それに対して人間はどうすることもできない。それを例えば、化け物がいる。それが核爆弾をひっつかんで投げ返したら、という幻想はあると思うな。そのどうしようもない状況に対する、デウス・エクス・マキナ（困った時の神頼み）的な期待みたいなものが。

永井　なんかそれはやっぱり状況を変えたい、とかね、日常をなんとか変えられないかという期待感もあると思うんですよね。

中島　私はそれはずーっと思ってたんだけどね。〝永遠に続く日常〟といういい方ってあるでしょ。ところがあれは実はほんとにごく最近やっと確立された日常なんであって、ほんの五、六十年前には誰もそんな日常やってないんですよ。

永井　それはそうなんだけど、ぼくらの記憶ってそんなに昔までいかないんだよね。結局ぼくらの子供のころの東京と今の東京と全然違うんだし、十年前の東京だってずいぶん違うように思うんだけど、日常というふうに考えると、もうずっと同じみたいに思っちゃう。

中島　何か日常というものが確かにあるよう



上は〝EPIC〟の『鬼』。右は『手天童子』扉絵(1976年)



酒呑童子を知らない学生たちにショックを受けました。

な、錯覚がある。

小松　そう。とにかくぼくは仕事としてそういうふうな問題を扱いたいんですね。

ぼくは大学で教えているでしょ。それで、すごくショックだったのは酒呑童子を知ってる人、って手を挙げさせたの。五百人ぐらいの広い教室で、パラパラっとしか手が挙がらない。じゃあ何で知りましたか？っていうと…。

中島　永井豪の…（笑）。

永井　マンガで（笑）。

小松　そう、そういう感じなんですよね（笑）。

中島　字も違ってるわけ（笑）。

永井　字も酒呑みじゃなくて（笑）。

小松　それに凄いショックを受けてね、どうなってるんだろう、と考え込んでしまったわけ。過去を必要としない世代がいるんじゃないか。それはぼくにとっては非常に恐ろしいことなんです。

中島　それはやっぱり戦争によって断層ができたんですよ。意識の断層が。

永井　戦争かな？

小松　ぼくはね、それはそれでいいと思うんです。入り口はそこから入りなさい。マンガでも何でもいい。問題は、そのマンガの題材には深い文化の根があって、その中で繰り返し出てきている事柄の問題なんだ、とこういうわけ。そうすると学者先生が難しいことを言って、居眠りされるよりは効果がある。日本の文化をずーっとつらぬいている、ぼくの場合は魔の伝統なんですけどね、魔の伝統があるんだ。光の伝統というか、正の、正義かなんか知らないけれども、権力を取った人の伝統と重ねながら、日本の文化を、そしてその中に今が構築されているというふうにみるわけなんです。で、今のぼくの伝奇ロマンについての不満を言えば、権力論が非常に希薄な作品が多いということですよ。

中島　権力論ね。……そんなに頭のいい人が書いてるわけじゃないから。

小松　そんなこと言わないでよ（笑）。そうじゃなくてね、ぼくの言ってるのはね、人間と人間の間の権力なんですよ。二人の人間の間にも一種の力関係…。

永井　結局、平等がいきすぎちゃってさ、自分より完全に上の存在っていうのが身近にないんだよね。だからそれを創造しようとする動きかもしれないね。いじめの問題っていうのも、根はそこかも…。昔、日本人ていうのは体質的に、徳川三百年の封建制の、上下関係の人間関係に、わりとすごくなれ親しんじゃう民族でさ、それが一つには大きいと思う。士農工商っていう階級が今なくなっちゃってるからそれを求めてるのかもわかんない。人間以上の妖怪とか、人間にない能力を持った怪物とか。

中島　それだと、ある程度能力を持った人間が、じゃあ私がそれ以上の存在になってやろうじゃないか、っていうのがすごく起こりやすい土壌だと思うのね。

小松　そう、ぼくは起こりやすい土壌だと思うよ。新興宗教がはびこるのもそういうようなことですよ。そういうふうな観点で見ていくと伝奇ロマンも、そういうのに利用される可能性がある。

永井　階級社会の復活の前段階なのか。

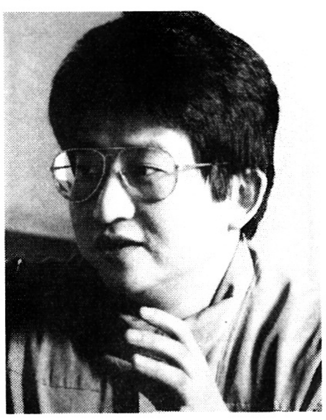
中島　そうね、能力のある者が生き残るって発想だからね、それは。

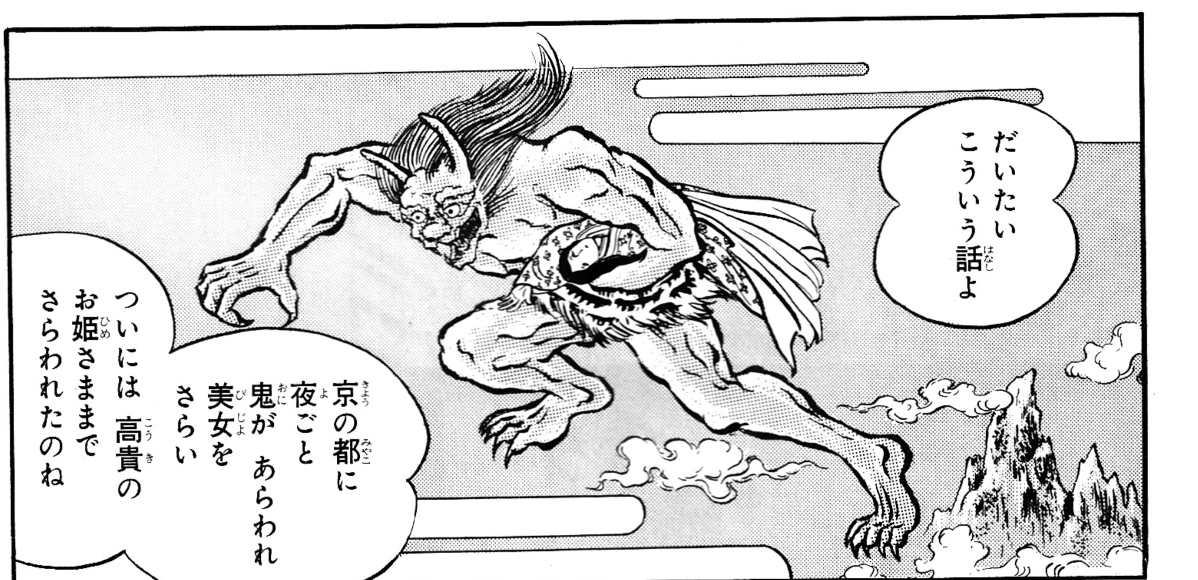
小松　能力のない奴は、それこそ本当に悲惨な目にあうわけでしょ。

中島　それでもいいんじゃないか、という非常に冷たい土壌ができつつある。

作家は作品によって狂気を解消する

中島　昔の村とかの話でも、例えば、「何かを見た」っていう人が精神病質だったって可能性はすごくあるわけですよ。その共同幻想にすごい思い入れしていて、で「あっ見た」って思う人がいるわけです。その種の共同幻想が伝承されていくってこともあるわけでしょ。







［脚注］
＊1 (folklore) 民族伝承、民俗学
＊2 (ゆうたいりだつ) 体から意識（魂・霊魂）が幽体となって脱けること
＊3 （やまたのおろち）出雲神話で、ひの川の上流にいたという大蛇。頭尾がそれぞれ8つに分かれ、スサノオがこれを退治したと伝えられている
＊4 （いぶきやま）滋賀・岐阜両県の境にある山
＊5 (occultism) オカルティズムを略したい方。通常の経験や思考では捉えることのできない、神秘的・超自然的現象を信じ尊重すること
＊6 （くろづか）能のひとつ。別名を「安達ケ原」といい、安達ケ原黒塚の鬼女の家に宿泊した山伏が、害されようとするが、遂には祈り伏せる
（「広辞苑」「現代用語の基礎知識」より）



手天童子がああいう作品になったのも、母親の抑圧みたいなのが深層心理にあったのかもしれない。

小松　もちろん。それが多いんじゃないですか。

永井　それがほとんどじゃない。

中島　少なくとも、その共同体の中の狂気によって伝承されてくる部分。

小松　だってその社会の中で狂気っていうのはそういう形で伝承されていけば、つまりそれが意味を持てば、もう狂気じゃなくなるんだから。精神科医なんかいなくてもそれを処理できるんだから。

中島　怖い。そうするとほとんど昔から…。

小松　ええ。そういうことだと思うんですよ。我々はある意味で、精神科のお医者さんていうのができたために、非常に重要なメッセージを閉じこめたかもしれない。

中島　つまり、ここから先は気のふれた人だという発想ができたために、実はもしかしたらその気のふれた人が見たのが真実かもしれない。本当にその人は鬼を見たのかもしれない。だけどあの人は鬼を見たと言ったから気が違った、という発想があって。

小松　そう。鬼はいない、という形で鬼をどんどん排除してしまう。

永井　数年前に、大学教授を息子が殺した事件があったでしょ。息子が黒魔術にこってて。孫かな。あの祖父は悪魔の化身だといって、殺人犯で精神異常とされたけど、逆に、本当に悪魔だったのかもしれないと考えることもできる。そいつにとってはもちろん。

中島　それが本当に悪魔だったら凄い話だな。本当に豪ちゃんのマンガよ(笑)。

永井　そう(笑)。正常な人がやっとのことで勝利を得たのかもしれない。

中島　あの『ススムちゃん大ショック』ってあるでしょ。あれが本多勝一の本に引用されてて、対談したでしょ。あれが今、自分が母親になると怖いんですよね。もしかしたら自分の中に狂気があるのかもしれない。

永井　あるにきまってるじゃないですか。なきゃあんなに書かない(笑)。

中島　それがあるからすごい優しいわけ。で、「うわ、怖いな」って思うのね。

永井　でも、ぼくらはそれを作品で発表できるからね。

小松　そうです。狂気が解消できるからね。

永井　そう解消できない人たちが……。

中島　でも、父親の狂気でしょ、みなさんの場合。私の場合母親の狂気だから。

永井　それはまだ、体験がないから何とも言えませんが(笑)。

『手天童子』がああいう作品になったのも、母親の抑圧みたいなのが、深層心理にあったのかもしれないと思ってるけど。

小松　母親ってものに対する恐ろしさっていうのは、口にはしないけど男にはある。女の人にはあんまりないでしょ。父親に対する…。

中島　ありますよ。いや、母親に対してありますよ。母親っていうのは結局自分を食いつぶす存在だという。

永井　ギリシャ神話なんかそういう感じだね。母親でも父親でも子を食って。

中島　そう、だからそれに対して闘わなきゃいけない。でも、倒してしまうとそれが原罪になる。倒さなかったら食いつぶされる、という悲常なアンビバレンツ。

小松　常に闘ってるんだ、どっちが勝つともいかない…。

中島　そうはいかない、向こうは年をとって、力が衰えてくるから。で、勝ってしまったらそのときから自分が親になる。ところが無垢な存在ではいたいわけですよ。

小松　すごォくずるいなあ。

中島　それはでもそうじゃないですか。

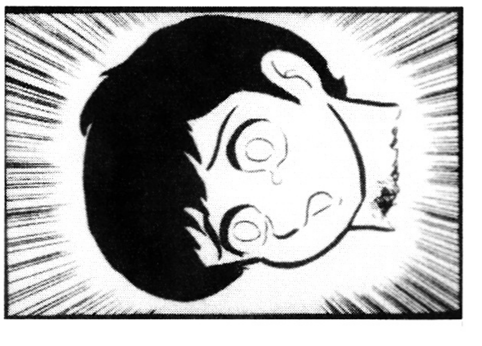
小松　でも子供産んだとたんにもうそうでしょ、どうしようもないでしょ。事実として。

中島　そうなんです。だから、産んだ段階でふき出るんですよ、大体。

小松　男には出産はないからね。

中島　男はいつまでたっても精神病なんだ。

永井　男の方がそういう意味ではずっと長い



『ススムちゃん大ショック』種族維持の本能がなくなった世界で子供はどうなる？







こと子供でいられるのかもわからない。

小松 だから、角がはえてくるのは男が多いんじゃないの。

女の鬼は怖い 怨みがこもってる

中島 女の鬼っているかな?

永井 鬼は、鬼女というより、男の方が多いですね。

中島 鬼女ってわざわざ言うぐらいだから。

小松 鬼女っていうのは人間が変わっていった姿だから。

中島 怨みでね。

小松 男の方は怨みはないんですよ。あるとしても国家に対するぐらいでしょ、酒呑童子みたいな。

中島 女の場合の怨みって年をとったことなんでしょよね。

小松 はあー、…怖いね。

中島 怖いでしょ。「黒塚」※6とかみんな若い女はいいんですよ、助けてあげたりするでしょ。年とった女は怖いんですよ、山姥とかね。

小松 かつて美しかっただけに可哀そうだよね。悲惨だよね。

中島 その怨みに燃えてる。怖い。

小松 とにかく女は年をとれば自然に鬼になるっていうのが日本の文化だから。

中島 だから歯をなくして、「楢山節考」じゃないけれども歯を全部叩き折って山に行って死んでしまおう、菩薩になっちゃおうという発想があるわけですよ。それはでも、男性中心文化だから。

小松 そう、男性中心文化。それをひっくり返して、男が歯を折って山にこもっていくっていう作品があってもいい。

中島 男はもう、もともと歯がないから。

小松 それほど長生きしない。

永井 もう男の方が弱いしね、執念もないし(笑)。

中島 本当かなぁ(笑)。

永井 そう思うよ。女の方が執念があると思う、いろんな、物に対しても何に対しても。

小松 男は融通性がきいてるっていうか。

永井 男ってわりとさすらっていけるでしょ。女はさすらえない。

中島 さすらっちゃう女ってのは悲劇ですよ。

永井 男はギター抱えてさすらっていけるんだけど。

中島 ギターを抱えた渡り鳥(笑)。

永井 女は巣を作っちゃってさ。

小松 母系制社会ってのは男がさすらうんですよ。これはもう明らかですよ。

永井 日本は母系制社会だから…。

小松 父系制、父系制です。……そうじゃなくて、夫方居住だから。夫の方に女が来るから。そして子供を作って巣を作ったら男はそこからはみ出されちゃうって形でしょ。

永井 基本的な男のもつセックス的なところからきてる部分もあるかもしれないし。

——昔はみんな母系制社会で…。

小松 …と言ってるけれども、必ずしもそうであるとは限らない。母系制社会っていうのは母権制社会とは違いますからね。大体、人類学のデータからいえば、母権、女が権力を持ってる社会ってないんです。

中島 卑弥呼とかは?

小松 卑弥呼でも権力は持っていませんね、男が持ってる。

中島 スサノオが持ってるのかな。

小松 そう、天照に対するね!

永井 今はでもだんだん逆転しつつあるね。女の方が強くなってるから。

中島 いや、それはウソですよ。でも権力は男が持ってる。

小松 でも、こういうことって、十年前はそんなにはっきり言えなかったですよね。やっぱり、みんな信じ始めたんじゃないですか。

中島 豪ちゃんも少しは原因かもよ(笑)。

永井 うーん、そうかもしれない(笑)。



母親の狂気を鬼に托して象徴的に描いた作品が『手天童子』なのだ

オカルト夢三夜 其ノ弐
怪物映画の世界

羽仁未央 vs. 永井豪

第二夜は哀しくも怖ろしいホラー映画をテーマに羽仁未央さんとの対談です。いずれ劣らぬ怪奇映画マニアですが、若さのパワーに豪ちゃんもたじたじ…！



〔はにみお〕エッセイスト、映像作家。1964年、東京生まれ。10歳にして義務教育を拒否。以後さまざまな分野で独自の表現活動を続け現在に至る多忙多才な21歳。「妖精の詩」「初恋地獄篇」（共に羽仁進監督）「ヘリウッド」（長嶺高文監督）やCFにも出演の他、自らも製作・演出を手がける。著書多数。趣味はアフリカと映画。現在、香港映画研究のために香港移住をめざし、中国語を勉強中。魚座、A型。ホラー映画大好きの正真正銘元気印女性です

強く、カッコイイ怪物が大好きです

永井 ぼくがモンスターが好きなのは、幼稚園に上がるか上がらない頃に、最初に観た映画がゴリラの映画なんですよね。その影響だと思うんですけど。ジャングルに不時着したセスナ機があって、子供が一人だけ助かるんですが、その子をゴリラ――ザンバという名前で――が育ててくれる。それで、ライオンなんかが迫ってくると、ゴリラがパッと出てきてライオンを絞め殺したりして、その印象がすごく強くあって、そういうモンスターに対しては「強い」、「カッコイイ」と…。

羽仁 それはアメリカ映画ですか？

永井 たぶんアメリカ映画だと思うんですけど、確かな記憶がないんです(笑)。ちょうどジョニー・ワイズミュラーの『ターザン』なんかもやってた頃なんですけれど、その少年は、数年間ジャングルで過ごしたあと、両親に救出されるわけなんですが、そのとき、ゴリラと涙の別れをして…、というかわいい映画だったんですけどね。

羽仁 あは、いいなぁ。そんなかわいい映画があるんだ。

永井 ですから、それ以来もう、怪物は大好きで、『ゴジラ』とか『フランケンシュタイン』とかいった系統から、『大アマゾンの半魚人』とかをずっと観ながら育ってきました。ま、ホラーといっても、一番好きなのは、やはりそういう意味では怪物映画で、その次に吸血鬼とかが好きなんです。最近のゾンビ物っていうのはちょっと苦手ですけど。『ゾンビ』は好きですけど。

羽仁 モノによるんですよね。私はやっぱり、吸血鬼映画が最初です。

永井 誰のドラキュラ？

羽仁 ピーター・カッシングじゃなかったかなと思うんですけど。

永井 ピーター・カッシングとクリストファー・リーでドラキュラをやってましたね。

羽仁 さすがにベラ・ルゴシは観てないですが、映画は祖母が好きだったから、その影響ですね。ただ、二つか三つの頃に観た――ディズニーかなんかの映画で――小人モノをよく憶えてるんです。それは、みんなでピクニックに行って、小人の村に入っちゃうんです。一行に男の子が一人いて、その子を小人の女の子たちがセッケン水をつけて取り合う――それが婿選びで、最後はその男の子と、摑まえた女の子が結ばれるっていう話なんですけど。

永井 フフフ。ムチャクチャだ(笑)。面白そうですねぇ。でもそれは全然知らないなぁ。

羽仁 子供向けの話なんですけど、私はそれで〝知ったかぶり〟っていう言葉を覚えたんですよ。そのへんから、すごくちっちゃな人間がワーッって出てくると嬉しくて。

永井 そうすると『バンデットQ』とか…。

羽仁 そうです。小人が大好きなんですよ。『バンデットQ』に出てきた本物も、さっきの映画は特撮でしたけれど。私の場合、そのへんがルーツだから、ホラーといっても…。

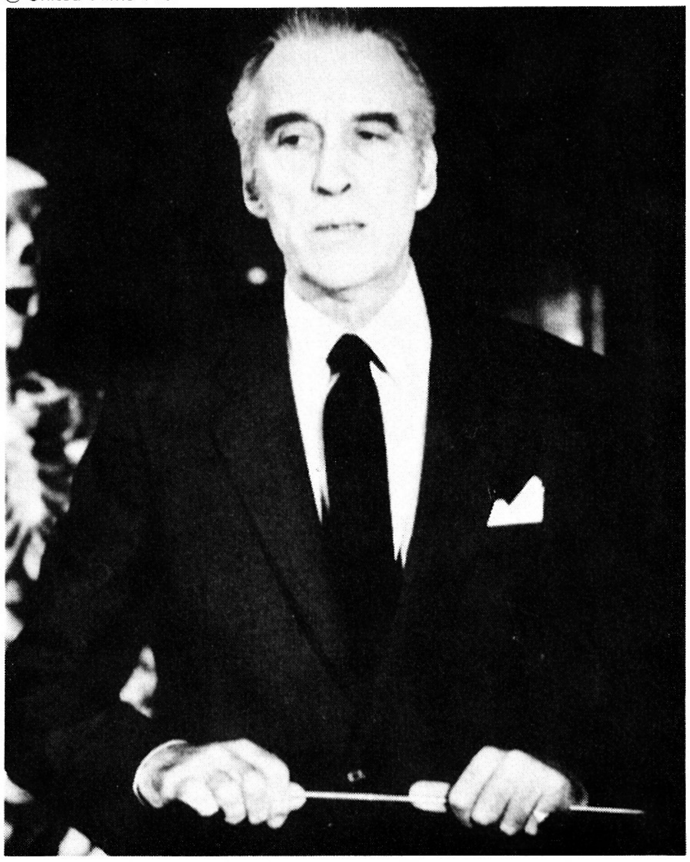
永井 若干ファンタジーの要素があった方がいいとか…？

羽仁 何んでもいいんですよね。系統だててハマー・プロがいいとか、そうじゃなくて。それと、あともう一作記憶に残っているのは、テレビで観たので、ホースのお化けみたいなのが海から上がってきて、人間の血を吸うという作品があるんです。アメリカの話なんですが、未亡人に娘がいて、村の警備隊みたいな変なおっさんが主人公で、最後にすべてを救って、その未亡人と結婚して、三人で大通りをルンルン歩いていくとこでおしまい。

永井 何だろうねそれ、よくわからない(笑)。

羽仁 そのホースのお化けがすごく怖いんです。掃除機の蛇腹みたいで、それが海からいきなり上がってきて、首に咬みつくんです。すると、血がどんどん吸われて、本当に人間がミイラになっちゃうんですよ。それはワン・

© United Films Pro.



ハマー・プロのドラキュラ役者としてあまりにも有名なクリストファー・リー。写真は最新作『ハウリング2』('85、未)に出演したリー

ジョン・ウィンダムの『呪われた村』を映画化した『光る眼』('60、ウルフ・リーラ監督)より。イギリスSF映画の古典の1本



© MGM

カットで撮ったのか、それともワン・カットに見えたのか、あまりに怖くて、しょっちゅう夢で見ました。だから、三つぐらいから小学校へ上がるぐらいまで、私の恐怖の象徴はその映画でした。

永井 何か吸われるんじゃないかとか(笑)。

羽仁 夜中にその夢を見て、泣きながら目覚める。

永井 しわくちゃになるのが怖いとか(笑)。じゃあ、ミイラは苦手ですね?

羽仁 あの繃帯を巻いた状態のミイラ自体は好きなんですけどね。

永井 でも、最後は崩れていくでしょう、ザラザラと(笑)。

羽仁 もう崩れちゃった人はいいんです(笑)、普通のツルツルした人があの状態になるのが悲惨で…。

『光る眼』にすごく影響を受けたんです

永井 心理的な怖さとか、そういうもの好きですか?

羽仁 はい好きです。

永井 ぼくが中学一年生のときに、すごく好きで、一週間ぐらい興奮しっぱなしになった映画が『光る眼』だったんですね。イギリス映画ですけど、実にきれーな男の子と女の子が、目が光ると人間の自由を奪ってしまうという超能力を持ってて。その子供たちが、ある村で六人一斉に生まれるんです。そのときの状態が異常で、一つの村の住民が全員眠ってしまうんですよね。そこの境界線を一歩入ると、バタッてみんな倒れちゃうという…、その異変は数時間で終るんだけれども、みんなが起き出してくると、女性が全員妊娠してて、あっという間に子供が生まれる。その子らが、どんどん異常な勢いで成長していって。いったいその子らは何者かという、そういう恐怖SFだったんですけど。その「何者か?」という恐ろしさと、それまでの恐怖モノでは見てくれの恐ろしさで迫っていたのが、『光る眼』では、見てくれは本当にかわいい、よりすぐりのかわいい金髪の少年少女たちでね、それが異常なくらい怖い。それで、設定で追い込んでいけばいくらでも怖い話を作れるなって、自分の創作上、すごく影響を受けた作品なんです。

羽仁 イギリスのそういうのって一番怖いですね。私は『ねじの回転』という、デボラ・カーの映画がすごく怖くて…。

永井 家庭教師が入っていくと…。

羽仁 女の人の暗いアップから始まって、子供たちがおかしいと思ったんだけど、みたいな話から始まって、双児の兄弟が…。

永井 じわり、じわりと…。

羽仁 結局、何も起きないんですが、何か起きるんじゃないか、何かあるんじゃないかという、ああいう映画って怖いですよね。

永井 怖さっていうのはかなりの部分、人間の想像力によっていると思うんですよね。逆にいうと、怖さって、人間が勝手に作り出している。

羽仁 怖いもの好きの人って、楽しみにしちゃいますよね。向こうの窓から突然手だけスッと出たりしたら怖いだろうな、とか、完全に期待してるんですよね(笑)。

永井 困ったもんだ(笑)。

羽仁 昔の恐怖ものって、そういう意味では心理ものが多かったですよね。最近観た中で一番怖かったのは『エルム街の悪夢』。

永井 あれはよかったね(笑)。

羽仁 五回も真剣に大声で叫んじゃったんです。でも、あれも昔風のひたひたくるっていうんじゃなくて、〝対決〟ですものね。

永井 そうですね。あれって『ジョーズ』の怖さとよく似てるんです。人間が不得意な分野に入って、向こうは完全に自由に動けるという状態におかれると人間て本当に恐怖感を持つんだと思うんですよ。『エルム街の悪夢』も、眠ってる間に夢の中で襲ってこられちゃ

Photo: TOHO-TOWA



小人たちが大活躍の『バンデットQ』('81)。監督はテリー・ギリアムで新作『ブラジル』も傑作

Photo: Nippon Herald Films



不眠症になるかもしれないので要注意の『エルム街の悪夢』('84、ウェス・クレイブン監督)



怖いという感覚が年々麻痺していく



たまらない(笑)。それで、夢の中で傷つけられたら、実際に体が傷ついちゃうというのはすごい恐怖ですね。

すごく下品な弥勒菩薩の夢が怖い

羽仁 怖い夢ってすごく映画っぽいですよね。

永井 怖い夢を見ます？

羽仁 すごくよく見ます。

永井 どんなのを見るんですか？

羽仁 弥勒菩薩さんが出てくる夢が、私の一番怖い夢(笑)。タクシーの運転手さんみたいな人ですごく下品な弥勒菩薩さんなんです。私と一緒に誰かを待っているんですが、「遅い」とか「来ない」とか、私を毎回つつくんです。「すいません、もうすぐ来ますから」とか私が言い訳して。それで捜しに行くと、変な小人みたいのが上から降りてくるので、走りながら逃げるんです。たいてい自分の家なんですよ。それが、異常に天井が高いとか、そういう状態で、死ぬほど怖い目に会うわけ。

永井 どんな色の弥勒菩薩？

羽仁 わりと光沢のあるグレーの方です。一番最初に見た時は、映画を撮ってるんです。私は助監督で、監督が内田吐夢なんです。それはミュージカルで、沖田浩之君のステージを撮っている。

永井 またすごい組合わせですね(笑)。

羽仁 しかも、エキストラが全部老人で、ステージのこっち側にいる。そこが火事になっちゃうんです。内田吐夢監督は映画を撮らないで油絵を描いている。「監督、お願いですから早く撮って下さい」って私がいってるうちに火事になっちゃうんですよ。「沖田さんは化繊の衣装を着てて火が燃え移ると危いから、先に逃がして下さい」ってマネージャーが頼むんです。「じゃいいですよ」とかいって、「次はエキストラの方が逃げて下さい」というと猫を持ってたり、飲みかけのジュースを持ったまま、老人が全然動いてくれなくて、もう危いから「お願いだから逃げて」って、「その猫あずかりますから」とかいって。ところが内田吐夢監督も老人なので「絵が汚れるから逃げたくない」とかいうんで、「その絵もあずかりますから」とかいって、全部の荷物をかかえてエレベータ・ホールに行くんです。そしたら弥勒菩薩さんがいて「あんたこっちだから」といわれて「はいはい」ついて行くと、プールの足洗い場みたいな所があって、そこを抜けるとテラスになってて、そこで突然筆記試験をみんなやってる。「あんたもすぐやって」といわれて、何か教習所の教官みたいな弥勒菩薩さんなんですけどね。すぐに答案用紙を渡されて、何を書いていいのかわからなくて、しばらく考えてると、「あんたまだ終んないの。みんなもう出てっちゃってるよ。冗談じゃないよ時間すぎてんだから」とか、さんざん下品な文句をいわれて、「困ったな困ったな」と思うのが弥勒菩薩さんの最初で、それ以来、下品な弥勒菩薩をしょっちゅう見る。

永井 何んだろうね、それは(笑)。

羽仁 いつかその謎を解明したいんですけど。あれはとても怖いんです。

永井 怖がりのわりにはホラーが好きなんだね。

羽仁 でも、怖いという感覚が、年々麻痺してくる感じはわかりますね。怖い映画を観ても、あとに夢にまで見ることがなくなって淋しいこともありますね。だんだん自分が〝ゴースト・バスターズ〟の感覚になって。

永井 それいいなぁ。

羽仁 踊りながらお化けが出てくるって世界にだんだんなってきてる。

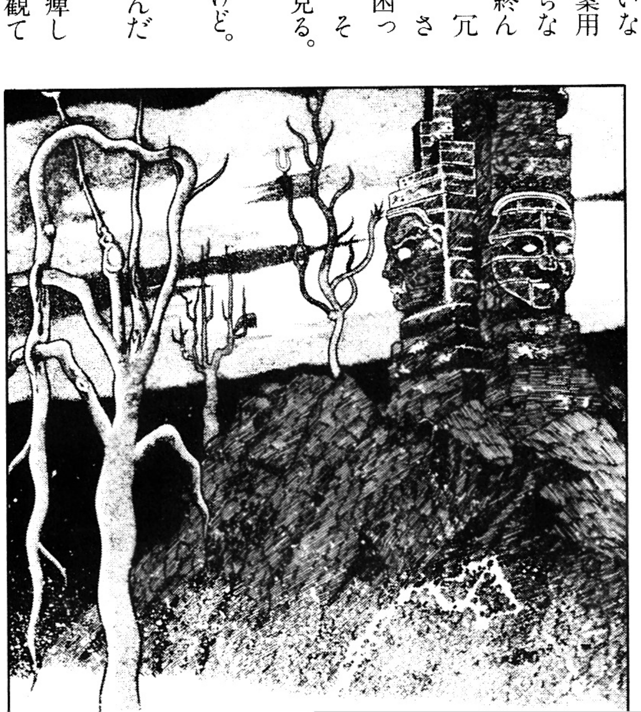
永井 ディズニーランドじゃないですか(笑)。

羽仁 そうなんですよ(笑)。でも、きっと人間て、廊下の向こうで動いた何かを忘れちゃう人と、追究する人の両方いるんですよね。

永井 やっぱり、追究しちゃうから見えちゃうんじゃないかなと思います。

羽仁 怖い映画を観ると、一番すごいシーン









昔の怪物は、いま思うとかわいい



で笑ってしまう。別に悪気はないんだけど。「ヤッター!!」と、大笑いしちゃうもんで、周りの人たちにすごく迷惑をかけてるなといつも思うんですが(笑)。

やっぱり、今の怪奇モノには笑ってしまうような要素が強くて、昔のって本当に最後まで、何が起こっていたんだろうって感じで。

永井 あずけられるっていうか、勝手に想像して下さいという感じでね。家に帰ってからずっと考えてて、やっぱり怖いな、とかね。何か、このへんの隅によどみが残るような映画があったりしますよね。

羽仁 盛り上げ方と死に方ってありますよね。昔は、じわーっと盛り上げるから、溶けるっていうのが多くなかったですか? 死に方でも、怖い死に方というと…。

永井 ドロドロ溶けるっていうのがね。

羽仁 最近は、爆発ですもんね。やっぱり、爆発するっていうとそんな嫌なものはないという印象があって…。

永井 手塚治虫先生が溶けるのは嫌いなんですよね。最初の「メトロポリス」の主人公も、太陽の黒点が少なくなっていくと同時に溶けていくとか、「白いパイロット」とか、主人公が溶ける死に方をする話が結構多いでしょ。あれは、ご本人が溶けるっていうことに対する恐怖心が強いみたいです。

羽仁 永井さんがお描きになった作品で、自分が信じてる間は保っていられるんだけど、最後に話がばれて、主人公が「やめてくれ!」というと全部溶けちゃうのがあるでしょ(『くずれる』)。私、あれがすごく怖くて。あと『あばしり一家』で、おキクちゃんの見る夢ってものすごく怖かった。

永井 ぼくも、この世のことすべて、案外何か想像の産物じゃないかって根強く思ってるんですよ。自分とはこういうものだって、しっかり認識してないと崩れていくんじゃないか。そういう恐怖心てないですか?

羽仁 わかります。

今見ると笑っちゃう昔のホラー映画

永井 昔の怪物って、今思うとすごくかわいらしいというか、どうしてこんなの怖がったのかなって…。最近特に、昔の無声映画のビデオ・ディスクが発売されたりしますよね。『巨人ゴーレム』とか。昔はあれが怖かったんだと思うんですよ。

羽仁 見ました。あれ子供の頃に観てるんですよ。見てて怖かったですもの。

永井 でも、今見ると笑っちゃうでしょう?

羽仁 そうなんですよね。

永井 せっかく、土から作って悪魔の魂みたいのを入れて動き出したのに、何をさせるかっていうと、水くみやらせたり(笑)。お買物やらせたりね、一体何なんだろう(笑)。

羽仁 今考えると冗談にしかならないんですが、昔はやはり「オーッ!」っていったんでしょうね、あれを見て。

永井 だから、ゴーレムあたりが今のゾンビのルーツみたいな気がします。何か人間じゃない魂のないものが動き出す恐怖。それがフランケンシュタインに継がれて、ゾンビにまでつながってると思うんですけど。

羽仁 それとやっぱり、ゾンビ物って自分を信じてないっていうことが一番大きいですよね。自分が死んであんなものになるかと思うと…。

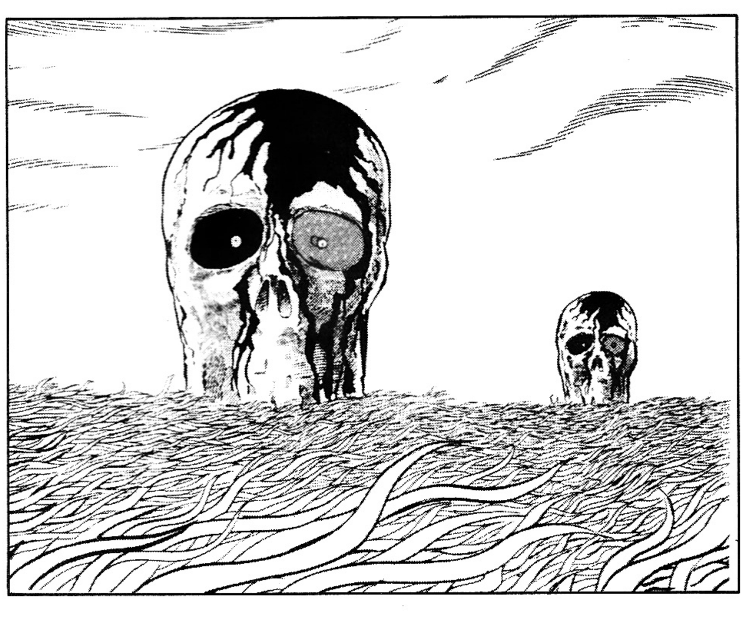
永井 やり切れないからね(笑)。

羽仁 「あいつこないだまでしゃべってたんだぜ」っていう恐怖ですものね。

永井 そのあたりを笑いのめした『バタリアン』は面白かったですね。「脈がない」とか、「体温が室温と同じだ」とか、あれはゲラゲラ笑ってしまった。

羽仁 あれは笑いましたね。「ていうことは…」「理論上、死んでるはずですけど…」とか、ここそこしゃべったりなんかするっていう。

永井 本当におかしかった。



おキクちゃんの見る夢がものすごく怖い『あばしり一家』のワンシーン



人肉をむさぼり食うゾンビたち。トム・サビーニの特殊メイクもみものの『ゾンビ』('79ロメロ監督)



PHOTO:Nippon Herald Films

抒情のゾンビ映画を作るジョージ・A・ロメロ監督。ゾンビ三部作完結篇『死霊のえじき』('85)は壮絶


Ⓒ United Artists

羽仁　意識はあるんだけど、体は先に死んだら、きっとあんな哀しいんだろうなっていうのが、すごくおかしかったですね。あの手の話の全部裏をかいていて、よくできた映画ですね。哀しいっていえばすごく哀しい映画。

そういう意味では昔は、わけのわからないものと対決するホラー映画が多かったけど、今は、相手はよくわかるんだけど、とにかく闘わなくちゃいけないという意味で、意識が大人になってますよね。

永井　そうなんですね。過去の恐怖映画の積み重ねで、ああいう形になってきたんでしょうね。あと、『獣人ゴリラ男』とか『蠅』みたいに、他の動物と混じるというのも怖いですね。ま、蠅なんかに混じると本当に嫌なんだけど、ゴリラとかだったらわりといいかなと思ってもいるんですけど(笑)。

羽仁　半魚人なんてのもいいかな、なんて思ったりして。

永井　半魚人も好きなんですよね。泳ぎが得意だし、美女に対してすごく優しいんですね。美女が泳いでいくのを下からうらやましそうに眺めてたりしてね。

恐怖映画は、サド派とマゾ派に分かれる

羽仁　そう、昔は情緒があるんですよね、そういうところが。今のゾンビは、そういうことに反応してくれないから。でも私、ゾンビ映画の中では、ジョージ・A・ロメロの「ドーン・オブ・ザ・デッド」(邦題ゾンビ)が一番好きで、中でも特に、ゾンビがワアーッとスーパーマーケットに集まってくるんですよ。それは、過去の記憶っていうのがあって、生前、彼らにはここが大切な場所だったから、みんな何となく来てしまうっていう。それが哀しくて好きで。何か意識とはまったく別の記憶の情緒性があっていいなぁ。

永井　トビー・フーパーはどうですか?『悪魔のいけにえ』の。

羽仁　トビー・フーパーとか『エルム街の悪夢』みたいなのは、本当に別の感覚ですよね。見てるとムチャクチャに怖いけど、この人とは友達には絶対になれないと思いますもんね。

永井　あれはやっぱり、『エイリアン』などと一緒なんですね。人間の姿しててもエイリアンと同じというか…。

羽仁　あの人の頭の中に、あれと同じものが詰まっていると思うと怖いですね。ロメロとかの場合は、一緒になって怖がってた人が「ねえ、これってこうなっちゃうんじゃない?」って。小学生が二人で暗い道を帰るときに、お互いに怖い話をしているのと近い感覚ですよね。

永井　怖がり側の恐怖モノと、怖がらせ側の恐怖映画があるってことですよね。SとMというか(笑)。

羽仁　そうですね。M型っていうのはロメロみたいにきれいですよね。どこかロマンティックです。

永井　「やられるの怖いよ怖いよ!」っていう映画と、怖いものがどんどん、『ターミネーター』みたいに、まったくあらゆる障害を無視して迫ってくる、サディスティックな恐怖映画と。

羽仁　また、ああいうS型の人たちの作る怪人ていうのは、本当に嫌な奴ですもんね。

永井　フハハハ。

羽仁　何かこう、やな奴の理由がないっていうか(笑)。〝生まれが嫌な奴〟という世界ですもんね。また逆にクローネンバーグみたいに、体が悪くなっていくのに近い恐怖、あれは別の恐怖ですよね。

永井　クローネンバーグは、胎内回帰願望とか、臓器に対する恐怖感とか、いろんな変なものをかなり持ってるみたいね。

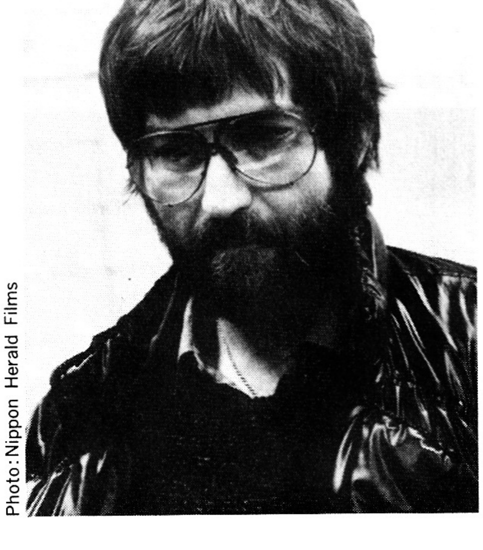
羽仁　そうですね。何か、アル中になっていく過程という感じがすごくするんですよ。体の中のいろんな所が酒の飲み過ぎで、悪いな悪いなと思ってるうちに…。

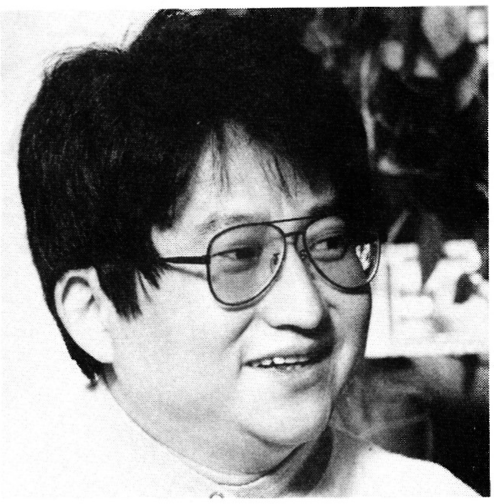


Photo:Nippon Herald Films

『バタリアン』('85)で監督デビューをはたしたダン・オバノン脚本の「伝染病ものだな」(羽仁)というホラー映画『ゾンゲリア』('81、G・A・シャーマン)

『悪魔のいけにえ』('74)のトビー・フーパー監督。「この人と友達には絶対なれないと思います」(羽仁)


Photo:Nippon Herald Films



生まれて初めて観た映画がモンスター映画でした。

©Photo: TOHO-TOWA



「もっと脳を」とゾンビ。『バタリアン』はおかしくて哀しいホラー

永井　ドロドロドロドロと出てくるという…。『ビデオドローム』なんてそうだね。お腹の中にドロドロって入って(笑)。あの人も作家としてはマゾ型ですね。

羽仁　でしょうね。でも、そういう意味で男くさい恐怖ものだなって感じがしますけど。それでやっぱり、ダン・オバノンの異常に伝染性を強調した恐怖——あの人の怪奇ものは必ず伝染病とか、実は自分ももうなっていたという話が多いでしょ。『ゾンゲリア』の、実はみんな死体だったなんて話も、すごく怖い。あの人の伝染病モノの何か絶望的な怖さっていうのも最近ですよね。昔は、安全圏というか、犯されていない聖なる地にいる人たちが必ずいたでしょ。『ドラキュラ』のバン・ヘルシング博士とか。

未知の恐怖を楽しむ姿勢が邦画にほしい

羽仁　私は、わりと最近香港の怪奇ものに期待していて。今度『キョンシー先生』というのがくるらしいんです。

永井　サモ・ハン・キンポーの『霊幻道士』ですね。

羽仁　昔から中国、香港の怪物モノとかファンタジーって、また別の世界があるでしょう。死に幻惑されるって感じがして、楽しみなんですよね。

永井　『蜀山』は観ましたか？　あれも面白かったね、けたたましかったけど(笑)。

羽仁　何か変なとこがすごくきれいで、変なとこがものすごく気持ち悪いんですよね(笑)。あの、何かホヤみたいな悪魔は一体何なんだろうとか。

永井　わけのわからないものが沢山出てくるんですよね。

羽仁　混沌とした怪奇ものっていうのは、アメリカや日本じゃ作られなくなったから。

永井　日本のは必ず、恨みみたいなのが入ってきて陰湿なんです。最近のスプラッタ（SFXを多用した血しぶき映画）風に作っても、やっぱり何か変な恨みみたいなのが入ってくるんですよね。日本人の体質なんでしょうね。

羽仁　それだとつまらないんですね。その場合、ほとんど単に別世界に行った、普通の殺人鬼の話でしかない。やはりホラーの楽しみは、別世界から何かきて、それが何の理由だかわからない〝魔の手〟で…、というものだから。あんまり怒ったりしない方がいいなと思うんだけど。

永井　未知の恐怖というのを、もっとじっくり日本の映画もやってほしいですね。『ミステリー・ゾーン』——『トワイライト・ゾーン』ですか——の楽しさって、わからないものを面白がろうとか、怖がろうという、本当に理不尽なもの、不条理なものとかを恐怖の対象として楽しむって姿勢だと思うんですが、日本の怪奇モノにはそういうものが全然あらわれない。

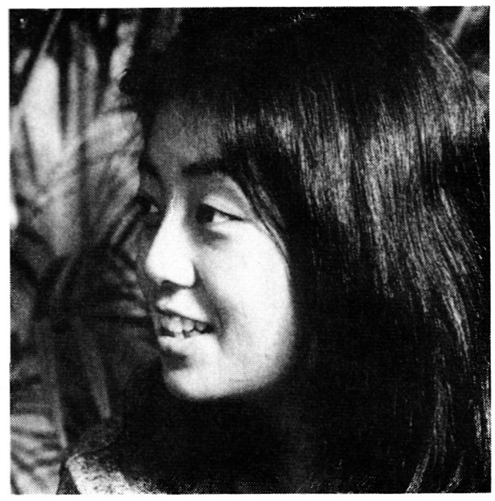
羽仁　狭い島だから、みんなわかりきっちゃってんでしょうか。

永井　日本人同士のつながりが深すぎて、隣近所にみんな気をつかわなければいけないとか、そういうものが日本の怪奇映画の幅を狭くしている原因じゃないかと思うんですけど。

羽仁　『トワイライト・ゾーン』なんかの、一九五〇年代の、文明のすべてが、ちゃんときちんとしているんだけど、何かが冷蔵庫から出てくるような恐怖ってありますでしょ。機械なんだけど、そこからすーっと出てくるようなあの感じって、一生忘れられないもんですよね。

永井　何が何だかわからないっていうか、「そういうわからないものって怖いんだよ」っていうのを、やっぱりもっとやってほしい。

羽仁　そうですね。イギリス映画にはそういう作品が多いから、イギリスのホラーを観たいなとか思っているんですけどね。



ドロドロ溶けていくのに弱いんです。

オカルト夢三夜 其ノ参
怪談四方山話



ささやななえ vs. 永井豪

今夜のゲストは熱心なオカルト願望派のささやさんです。オカルト・コンビニエンス派の豪ちゃんとの四方山話は夜を徹して行われたのでした…！



女流マンガ家。北海道生まれ。血液型／B型。星座／水瓶座。1970年に「かもめ」(りぼん)でデビュー。代表作は「ミノタウロス」、「化粧曼陀羅」(いずれも小学館)など。オカルトもの以外に、「おかめはちもく」(小学館、フォアレディ連載中)にみられるコメディ、そして「井草日記1、2」(角川書店)の映画エッセイなど多彩に活躍中。趣味は旅行(昨年秋に念願の中国旅行も体験)、易や占いにも凝って、オカルト方面には多大な関心をもつ。

病院の幽霊の巻――自転車で骨折入院中

永井　病院でね、看護婦さんの幽霊を見ましたよ。

ささや　ワーッ、すごい！

永井　朝起きて、ひょいと見たら、ドアのところに看護婦さんが立ってるんです。何かかぶりものをしてて、顔がまっ黒で、ブラック・ホールみたいで何もないの。

ささや　それ、意識がちゃんとあって…？

永井　ええ。起き上がろうとして、「あっマズイ、いる！」。ジーッと、ピクリとも動かないんですけど、顔だけが、とにかく何も見えないんです。そしたら、その横のドアが突然バーンとあいて「検温で～す」(笑)。幽霊はサッと消えちゃった。明るい看護婦さんが現われて「ああ、よかった」(笑)。

ささや　そのときは金縛りにあってました？

永井　ところが金縛りになってないから「どうしようかな、どうしようかな」って(笑)。

ささや　患者さんじゃなくて、看護婦さんの幽霊を見るのっていうのがすごいですね。ここは私の分担だ、とか思ったりして(笑)。しゃべったりはしないんですか？

永井　ぼくは、声の幽霊というのは一回だけで、いつも姿のばかり(笑)。

ささや　病院では他には？

永井　いろいろ来ました。いたずらしに来るんです。こっちが動けないのを知ってるから。手術して寝てるでしょ、そうすると、自分の霊体も痛がってるんです。だからやっぱり動けないんですね。

ささや　幽霊は、さわったりするんですか？

永井　いろんなことをしますよ、つねられたり、くすぐられたり…。複数のときもあるし、一人のときもある。

ささや　現われるときは、前兆がありますか？

永井　温度が下がったりとかわかりませんが、つねられたりすると、感覚にピンピンとすごく感じるんですよ。

ささや　金縛りは？

永井　はじめての時だけ一回きりで、あとはありません。

ささや　免疫ができるのかしら…。

永井　一回目のときはものすごくて、自分の体を動かすのに悪戦苦闘だったの。まわり中を囲まれて、いたずらされて。せめて声でも出ればと思って、やっと声が出たときには、ものすごい悲鳴になってるんですよ。そのとたんに体がピョーンって動いて。

ささや　出る時間帯なんて決まってます？

永井　時間帯は関係なくて、朝昼夜いつでも。

ささや　ところで、足を折ったのは『手天童子』のときですか？

永井　いえ、つい最近。そのときは――あとでわかったんですが――同じ病院に、同じ場所で怪我をした人が三人いたらしいんです。もとはお墓だったらしいんですが、みんな同じように足を骨折して。そこは交通事故も多いし、「引っぱられたんですね。自転車ははじめてですよ。バイクの人よりずっと怪我が重いですね」とかいわれてね(笑)。

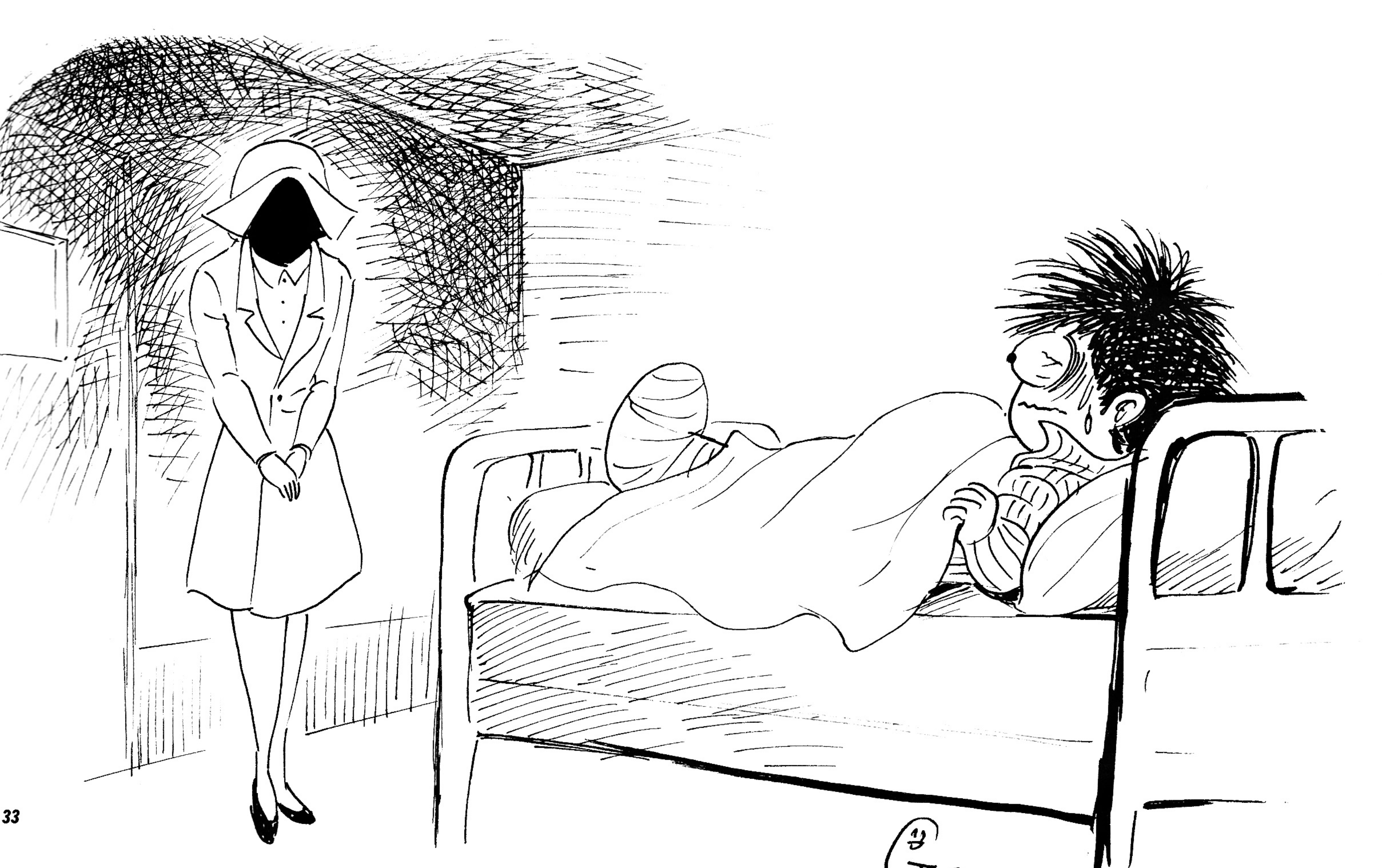
ささや　私ってないんですよね、そういうの。

永井　こっちもね、「ぼくはかなり幽霊なれしてます」なんていうと絶対ダメだね。それに倍する恐ろしいのがくるから。「ぼくは結構なれてるから、やってきても追払えるから」とかいってたら、そのあときたのが、のっぺらぼうで、もう本当に恐ろしかった！

ささや　私なんか見たことないから、見たい見たいって。怖いのは嫌だけど(笑)。

永井　でも、まったく健全な状況で見るっていうのも難しいですね。たまにはありますが、どちらかというと、寝起きとか半覚醒の状態のが確実に見られます。

ささや　私は声しか聞いたことないけど、健全な状態にいきなりなの。コップ取ったりして、日常動作と変わらないから、そのときは気がつかないという(笑)。



鬼のタタリの巻——『手天童子』連載の頃

ささや　『手天童子』のあと書きに書いてありましたけど、あのときはどういう鬼だったんですか？　普通のシャレコウベ？

永井　普通のシャレコウベで、念興寺という飛弾の金山にある観光名所の一つでね、あのへんを車で走るとわかるんですが、〝飛弾名物鬼の○○〟とか(笑)、看板が立ってるんです。「この写真をグラビアに使おう」と担当者が——兄と担当編集者と三人で行ったんですが。念興寺はかなり古い寺で、三百年前に暴れまわったという鬼の骸骨がおさめられてるというので有名なんです。それで、古い、歯ぐきなんか黄ばんだシャレコウベで、ミイラっぽい色をしてるんです。それに、本当に「ツノ」って感じで、皮膚のあったあたりが変色してたりして、すごくリアリティがある。「これはリアルだ。これはいける」って、写真を撮ることになってね。内心ぼくは「気持ち悪いなあ」って思ってたら、お坊さんがやってきて、「写真撮っちゃいけません！」」。「どうしてですか？」、「前に写真を撮って、持ち返った人が死滅しました。その人は、家族が交通事故にあうわ、変死するわで、原因不明のことが次々起こって、気持ち悪くなって、その遺族が写真を返しにきました。だから撮らないで下さい」っていうんです。「じゃあやめよう」といったんだけど、担当者が「せっかくここまで来たのにもったいない」といって、「あのぼくら〝少年マガジン〟の——」なんていうと、お坊さんがコロッと態度を変えて、「あっ、雑誌の！　じゃ、宣伝になりますんでいいでしょう」(笑)。「どういう角度がいいでしょうか？」とかいうの(笑)。

ささや　ひど〜い！　それはヒドイわ(笑)。

永井　それで、帰ってきたんですが、どうも肩が凝るし、人の気配をずーっと感じるんです。一人で仕事をしていても肩が重いし疲れるしね、それに、忌まわしいことが身辺にいくらでも起こるんですよ。家に遊びにきてた犬が車に轢かれたり、夜中に食事に行こうとすると猫の死体があったりとか…、「それは警告ですよ」って人にいわれたりして。そうするうちに、担当から電話があって「写真があがったんですけど…ちょっと問題でして…、やっぱりお見せした方が…。すぐ着きますから」っていうの。持ってきます…いで着くといってたのに、三時間待っても来ないんですよね。やっと「いや、まいった、原因不明のエンストで遅れまして」って写真を持ってきてくれて、見たんです。そしたら気持ち悪いの、その写真が。鬼火みたいな、エクトプラズムみたいなのが、ドシャーっと写ってる。ドクロのまわりに、必ず赤い血のりみたいなものと、火のような傷のようなものがババッと写っていて。門前に三人並んで他の人に撮ってもらったのなんか、ぼくの足だけにそのエクトプラズムみたいなのがドローッと何重にも片足にまとわりついてるの。

ささや　それは怪我した方の足？

永井　怪我はそのずっとあとでしたから、関係はないんでしょうけど…。

ささや　わからないわよォ(笑)。

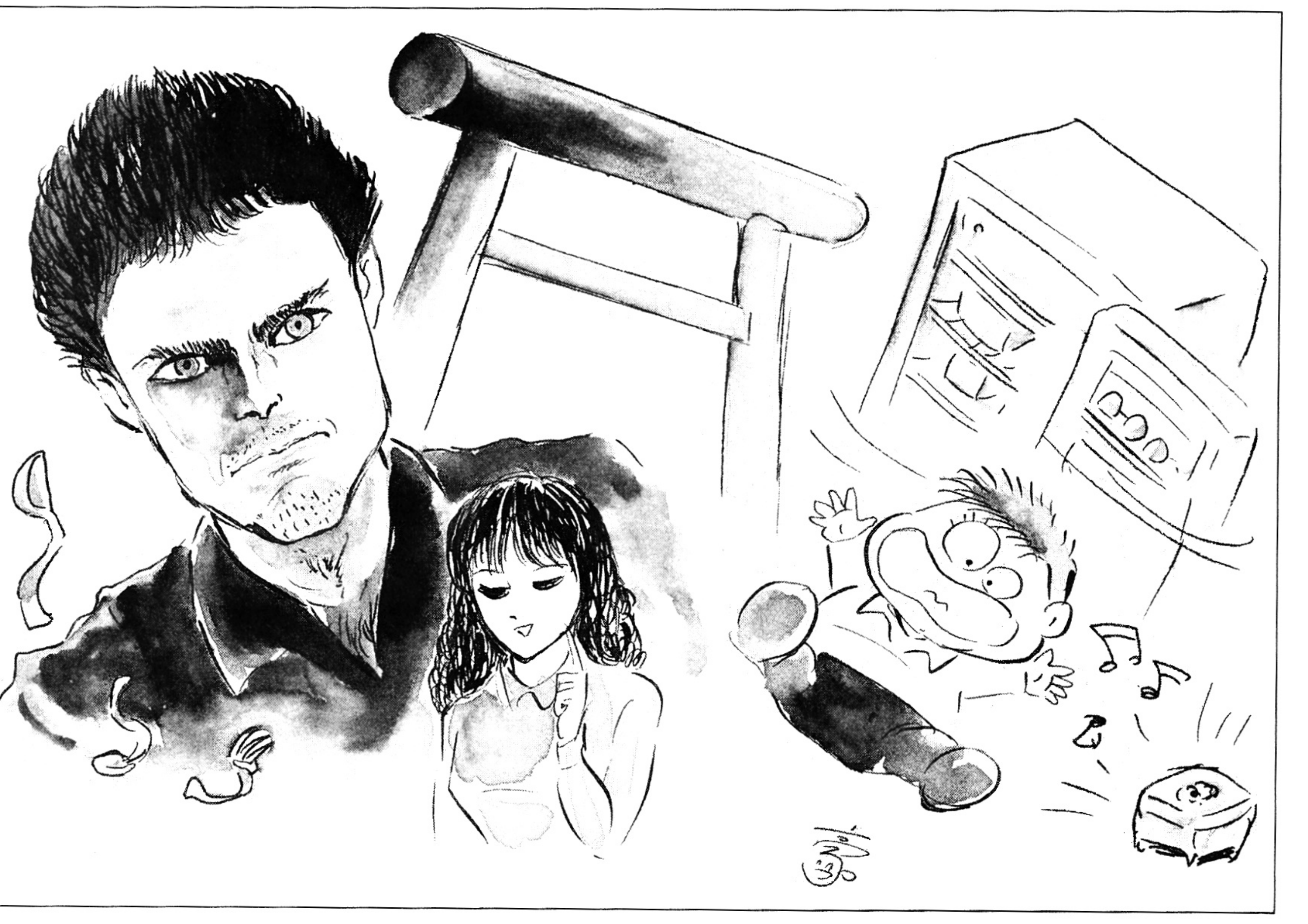
永井　これは本当にたたられてるなと思うと、かえって不審な現象に余計に気がついちゃうんですね。真夜中に電気カミソリが止まって、ヒゲが半分になって、「しょうがないなあ」と思っていて、翌朝にちゃんと動いたりすると愕然とするんだよね。麻雀をやると必ず、信じられないくらいの大負けをしたり、そういう細かいことがいっぱいあって、邪魔されてる感じがすごくする。仕事すれば肩が凝るというわけで、このままじゃラチがあかないと思って、おふくろの紹介で「鬼子母神」でお祓いすることにしたの。それで、ネガをあずかって家の仏壇にあげておいたんです。すると夜明けの六時頃、おふくろの悲鳴で目が覚めまして、びっくりして隣の部屋——おふくろ





ぼくはかなり幽霊なれしてます。なんて…——永井

怖いのは嫌だけど幽霊見たい——ささや





ユリ・ゲラーは本物だ。豪ちゃんの奥さんと山岸凉子さんは赤い鳥居をあてました。永井家は暫くの間ポルターガイストに悩まされて…

の寝ている仏壇のある部屋——にとびこむと、仏壇がメチャクチャになってってね、震度4ぐらいの地震がきても倒れないような大きな花瓶が一メートルぐらいも飛んで……。

ささや　すごいねぇ、それは。

永井　もう、キャーキャー大変でした。それで結局、「鬼子母神」でお経をあげてもらってやっとおさまったんですけど。また、そのお経がすごい迫力で、拍子木みたいなのをガンガン打って、読経も延々一時間くらいあって、終るとみんな数珠でひっぱたかれてね。暑かったからぼくらは汗びっしょり。ところが和尚さんが「私を見てごらんなさい。どうですか、青くなってるでしょう」っていうの。そしたら本当に青くなって、手なんか冷たい。

「普通、これだけのお経をしたら、汗だくになるのがあたり前なんですけど、こうなってます。どうしてかわかりますか？　あなた方の霊は私が背負いましたから…」

ささや　和尚さんは大丈夫かしら？

永井　大丈夫ですって。和尚さんがいうには、

「自分がお経しているうちにわかったんですが、この霊はそういうふうに見世物にされているから成仏できないんです。これからは私が毎日祈って、成仏させますから」と。すると、本当に体が楽になって、スッとしたんだよね。

声の幽霊の巻——怖くはないが不思議

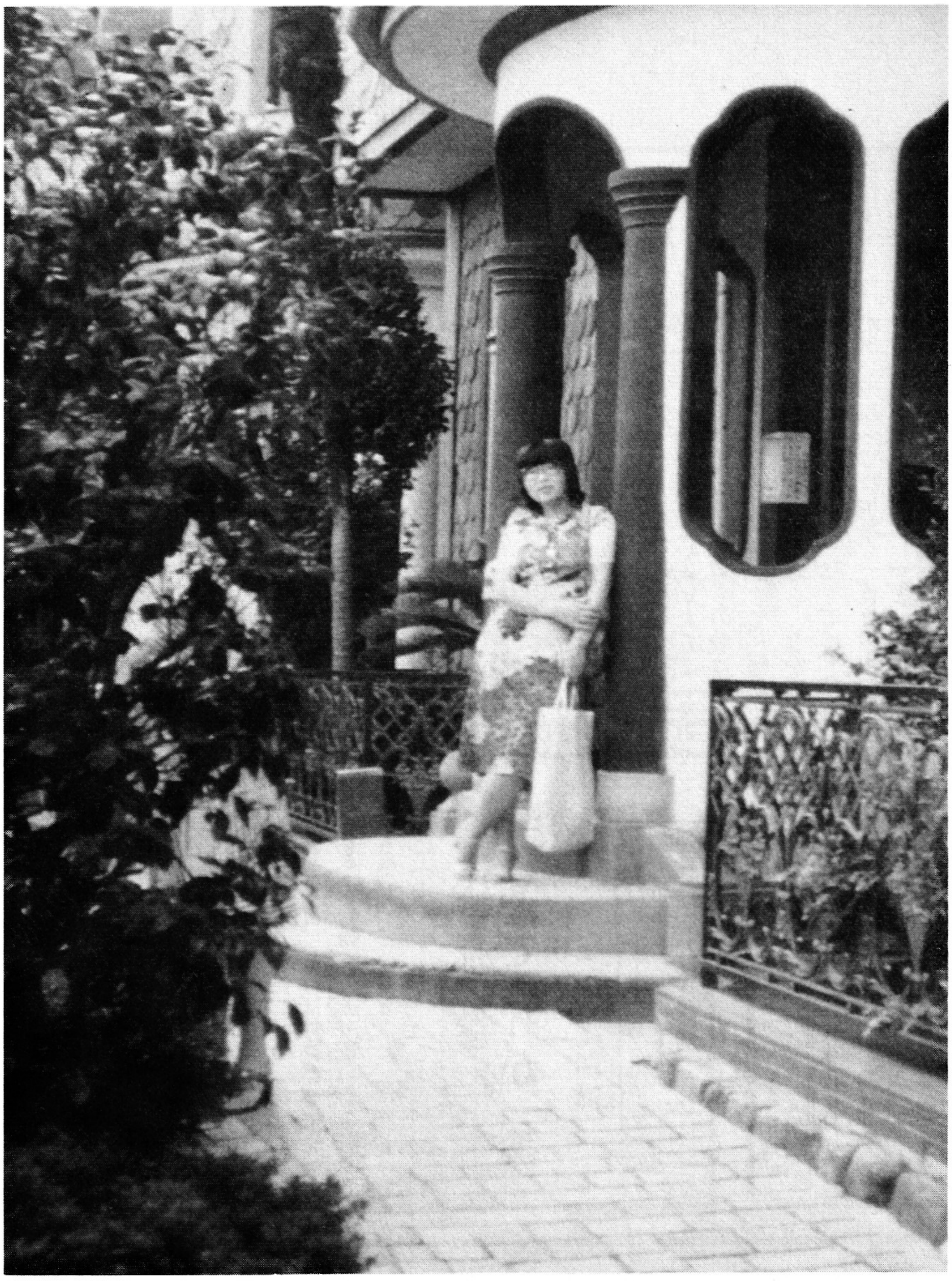
ささや　私が怖いものを描くときも、変なことが起きるの。私は見たことはないんだけど声が聞こえるの、音がするんですよね。それは、外で柏手を打つ音なんです。パン、パンていう音が、その仕事の間じゅう聞こえるの。夜中過ぎると必ず。

永井　それは『化粧曼陀羅』の時ですね。困ったもんだ(笑)。

ささや　それで、他の人には聞こえないんですよ。夏、窓を開けて仕事するでしょ。二階が仕事場なんですが、下の道路で「パン、パン」。何んだろう、何で柏手打ってんのかなと思うとまた「パン、パン」てやるの。それこそ誰かがイタズラしてやってんだろうと思って、私はずっと我慢してたわけ。あれって、わりと気になるんですよね、描いてるときだと。また鳴った、と腹が立ってね、アシスタントにいったの。「さっきから聞こえてるあの音なんだろう」って。そしたら全員、「聞こえてない、そんな音ありました」っていうわけ。「ウソー」ていってね、次に聞こえたときに「ホラア、また」というと、聞こえないっていうわけ。かなり大きな音なのよ。でもね、そのうちただ一人だけ、山羊座の子が聞いたの。柏手を打つような音だけど、下敷を、パコンパコンて鳴らす音にも似てるわけ。そんな音ですっていうので、「ああじゃやっぱり同じ音だ」って。ところが、他の子はいくら耳を澄ましても聞こえないって言い張るわけ。最後まで他の子には聞こえないの。何カ月か連載が続いたんですけど、その間じゅうなの。他の作品をやってるときは聞こえないの。

永井　その作品に何かあったのかねぇ。

ささや　それとね、もう一人牡牛座のアシスタントがいまして、これから仕事が始まるよってときで、その子が一番最初にやってきたの。私は仕事場にいて、その子は台所で片付けてたの。そしたらその子がいきなり「あー」って楽しそうな声をあげたんです。フッと見ると彼女戸口の方をニコニコしながら見てるんですよ。私の位置から戸口は見えないんですけどね。あっ次のアシスタントがきたなと思ったの。すると、台所の窓に白い影がパッパッパッパッと、隣の方に横切って行くのが見えたの。隣の部屋の子もマンガ家なので、階段の下で一緒になって上がってきたんだなと思ったわけ。それで戸を開けたら一人しかいないわけ、アシスタントが。だから牡牛座の子が「あれー、もう一人は？」って聞いたの。そしたら、その子不思議そうな顔して立ってんの。



「神戸旅行の時のスナップですが、私の背後に隠れるように子供の姿が…。後には誰もいなかったのを確認してるんですよ。あと左手前の女の人、足と身体のデッサンが狂ってると思いません？何か気持ち悪い…」(ささや)

「これも典型的な心霊写真で、山形に行った時のスナップですが、何かエクトプラズムみたいなものが…」



永井　かわいそうに(笑)。

ささや　そうなの。その子なんか、二人して自分をからかってるんだと思って怒り出してるわけ(笑)。その子は自分は一人で上がってきたし、誰も会わなかったと。でも牡牛座の子は、しゃべり声を戸口のところまで聞いてるし、私は私で、ちゃんと白い影が窓を横切って歩いていくのを見てるわけ。

部屋の窓の外を白い影がとかはね、前にも見たことがあるんですけれど。台所にいて、仕事場の方に入ろうとすると、その窓のところに白い影がパアッと横切るの。洗濯物は干してないし、そういう白い影で写るようなものはないわけ。でそのときも、何か干してたものあったかな…、紙でも飛んだのかな…、とか考えるのね。私はすぐ信用しない方なのね。仕事場に立って一所懸命考えてると、他のアシスタントが「どうしたんですかぁ？」って聞くわけ。「やぁ、今ねぇ…」といったらやっぱりそのときも、その牡牛座の子だけ、下向いたまま顔上げないの。それで一言、「さっきあたし見ました」っていうのよ(笑)。

永井　ハハハ。

ささや　怖くはないんですよね。怖くはないんですけどね。そういうことが頻繁に起きました…。

永井　怖いのと怖くないのがあるんですよね。

ささや　そうなの。私は幸いに怖くないのばっかりなんですけど。

永井　怖くないのは本当にね、そんな悪い奴じゃなくて、そういうのはほとんど現実と同じ格好で出てくるんです。怖い奴ってのは、例えば地縛霊とか——ぼくの見た奴は目の下に半月形のクマがあって、全員がベロッとまっ黒なんです。

ささや　クマがある…ヘエー。目は光ってますか？

永井　光ってないです。とにかく、その一人一人の空間が青いんです。まわりが青く、ワアーっと。何ていうの、青いライトで下からお化けを照らすでしょ、あのとおりなんです。

ささや　おかしい。今度は両手が冷たくなっている。期待の幽霊の話になったのにどうして(笑)。鬼の話になると肩が軽くなるのに。

永井　だから、怖いのもいるわけですよ。

ささや　そういう幽霊と鬼っていうのは同じ世界のものと考えてますか？

永井　ぼくが考えるには、ほとんど近い世界ですよね。鬼の方が怨念に凝り固まってるんじゃないですか。つまり、霊的に怒っている、怨みがある、そういうことで角がはえてんじゃないかなと思うんですけど。

あるいは、そうじゃなくて、別な生物、別な次元の生物ってことも考えられるし、そのへんは、はっきりしたことはわからないですよ。けれど、ぼくの考えではさっきいったふうに解釈してますけど、本当は違う次元の生物なのかもしれないなって気がしないでもない。

ささや　その、幽霊を見るときと、夢を見るときは全然違うんですか？

永井　違います。まったく違う。幽霊を見るのは起きてるときなんです。ただ、起きてるんだけど、まっとうな状態じゃなくて、半覚醒みたいなはざま的なときに。

動物霊の巻——血まみれの赤ん坊が

ささや　幽霊が出てくる夢を見ている、というのとも違う…？

永井　それとはまた違うんです。目をつぶって何か見えるっていうのではなくて、目はしっかりと開けてて見えるんです、それは(笑)。それはもうまったく別のものだし、例えば、触感とかもあるんですね。一度なんか、ホットパンツ姿の女子大生の幽霊が朝方出て、ぼくのタマタマを握るんですよね(笑)。ゴリゴリってやるんです。美人なんですよね。だけど痛いから「やめてくれー、俺は眠いから帰ってくれー」——そのときは徹夜明けで、やっと描き上げて布団にもぐり込んですぐだっ

たんで——それで帰ってもらったんですけどね(笑)。

ささや 何か恨みがあるとか。

永井 淋しいから遊びにきたんでしょうね。

ささや なるほどね。

永井 そういう幽霊は悪くないんですけど、鬼にたたられててそのお祓いをする前に、何かうさ晴らしをしようと思って、飲みに行ったことがあるんです。酒でも飲んで景気つけようって、何とか明るい話をしようとするのに、そういうときに限って変なホステスがついてね、不気味な話をするわけ(笑)。「そういう話、聞きたくないよ!!」っていうのにね(笑)。それがすごいんだよね、すさまじい人でね。中学生のときに友達の家で、赤ん坊が階段から落ちて頭を打って、血だるまになって死んじゃってね、それ以来家鳴りが起こるようになって、その同級生から「怖いから一緒に泊まりにきて」といわれたんで、それで泊まりに行ったんだって。その晩は騒ぎながら布団に入ったので、楽しくて、「何だ、怖くないじゃない」と思ってたら、なかなか寝つかれない。友達と一緒に寝ててね、二時の鐘がボンボンって鳴ったら、自分の体が動かなくなっちゃった。ハアーと思ってると、ふすまがサーと開いて…。

ささや うわっ、すごい。

永井 そうしたら、たたみの上三〇センチぐらいのとこに、赤ん坊が浮いてるの。頭からまっ赤な血がこう、で、目が金色に光って…。

ささや あっ、その光ってるのはヤバイんですって。

永井 金色なんだって。それがね、三〇センチの空間をスッスッスッてはっていくんだって。二人とも起きて見てるんだけど、身動きがとれない。脂汗だけが出てね。そしたら、ズズッズズッズと来て、隣の同級生の子の布団の上に乗ってくるの、胸の上に。「ワーッ」って、その子はのたうちまわってる……。

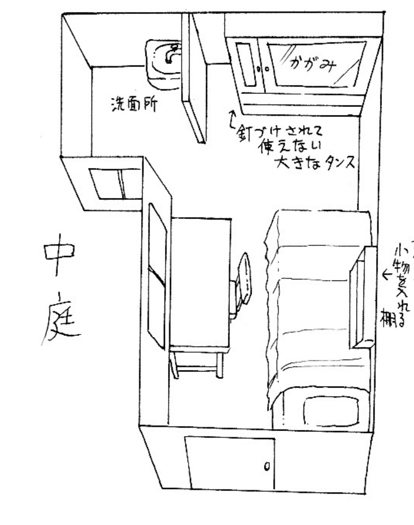
ささや すごい。それでどうなったんです?

永井 パッと消えたらしい。

ささや すごいね。もしかしたら、赤ん坊に生きる執念があったのかもしれない…。

永井 でもね、それが本物かどうかわかりませんね。というのは、あるとき平井和正さんの紹介でミカエルさん——「GLA」という新興宗教の教団があるでしょ——にお会いしたんですけど、その方が「それは赤ん坊じゃないですね。それは動物霊ですよ」といってました。動物霊が赤ん坊の姿を借りて、そういう怖がっているとこに、ワザといたずらをしにくるんですといってました。

幽体離脱の巻——苦しさでこれが一番



ささや 「悪魔」というのはどうなんでしょう。

永井 同じようなものじゃないですか。

ささや 私、悪魔の夢を見たんです。それがすごく俗っぽい夢で、いうのも恥かしいくらいなんだけど(笑)。朝方ね——私は悪夢ってめったに見ないんです、ときどき体調の悪いときに見るぐらいで。そのときは体調も良かったんですよ。それで、寝ててね、普通夢見ててもいいかげん目覚めるって時刻なの。バックには何もなくて、黒い影がボーッとあるわけ。その黒い影が、いきなりしゃべってるんです。私を指差してる感じで、それこそ、「自分は悪魔だ」っていうんですよ。「俺を信用しないだろ」っていうの。そして私を指差して「信用させてみせる。今、お前の首は動かなくなる。」いわれた瞬間にものすごく首が痛んだわけ。でね、痛んだ瞬間に目覚めてるの。初めは寝違えたかなと思ったんだけど、体を動かした覚えはないし、その夢の直後でしょ。とにかく、あまりの痛さで言葉もしゃべれないわけ。少なくとも二時間くらいは動けなかったんです。そのままの状態で。それから起き上がれるようになっても、首は曲がらないんです。ダンナに聞くと、何かうなされてる感じで、うなり声を上げたっていうの。それでダンナが私を見たら、私が目を開けたっていうのよ。何だったんでしょうね、あれ。

永井 やっぱり、霊体に衝撃を与えられたんじゃないでしょうか。でも、悪魔がただ証明してみせて、だからどうしたという。その続きがないと(笑)。

ささや そう(笑)。それ以後そういうことはないんですよね。

永井 自己顕示欲の強い悪魔だったんだ(笑)。

ささや そのあと変なことはなかったんだけど、それが気になって。けれど夢の中で「俺は悪魔だ」っていうの、すごくミーハーだと思いません? 腹が立ってね、私は(笑)。でも、自分が害を及ぼされたってことはめったにない。もっともフランスで一度、そういう目にあったことはあるんです。あれは部屋がおかしかったと思うんだけど、Lの字型の。映画に同じ場面があって、ベッドの上で、これやられるんです。『エクソシスト』のやつですよ。夢の中で…。

永井 起き上がるんですか?

ささや 何かね、変な夢を見てて、私、時計のついたペンダントをしてたんですよ。それは寝る前にはずしておいたはずなのに、夢の中でしてるわけ。まわりはまっ暗闇、電気は消して。いきなり、ペンダントをこうやって掴まれて、グーと起こされるの。それで、あまりの苦しさに抵抗したらね、パッと放されて、バーンとベッドにたたきつけられるわけ。もう一度掴まれて、抵抗して放されて、これの繰り返し。

永井 それはたぶん霊体だけですよ。肉体は動いてないです。

ささや そうだと思う。すごく苦しいの。それで私は、夢かな、現実かなと思い始めたの。

永井 夢じゃないし、現実でもないけど、やはり現実ですよ。

ささや やっぱりそうなんですか。それでね、初めは強盗だと思ったわけ。だけど鍵は閉めた記憶はあるし、おかしい!

永井 やはり焦りますからね。霊体が肉体から抜けるときっていうのは。苦しいですよ。

ささや あれ、霊体がでるときなのかしら。それで、ものすごく抵抗してね。とにかく電気だけはつけようと、必死で手を伸ばして電気つけたの。そしたら誰もいないんですよ。その瞬間、苦しさもパッとなくなるわけ。

永井 もう何もかにも明らかですよ。

ささや それそうなんですか、霊体が抜けだそうとしたの?

永井 引っぱっていかれそうになったんです。何かいたんですよ。

ささや やっぱりいたんですか。その、何故変かというと、その部屋7号室だったんですが、一階ごとの踊り場に一つ部屋があるという不気味なホテルでね。それで、扉をあけるでしょ、すると、タンスの鏡に私の体が写るわけ。嫌だなあと思ったの。スーツケースの物をしまおうとすると、タンスの引き出しから、開き戸まで全部釘が打ってあって開かない…。(部屋の構造は図を参照)

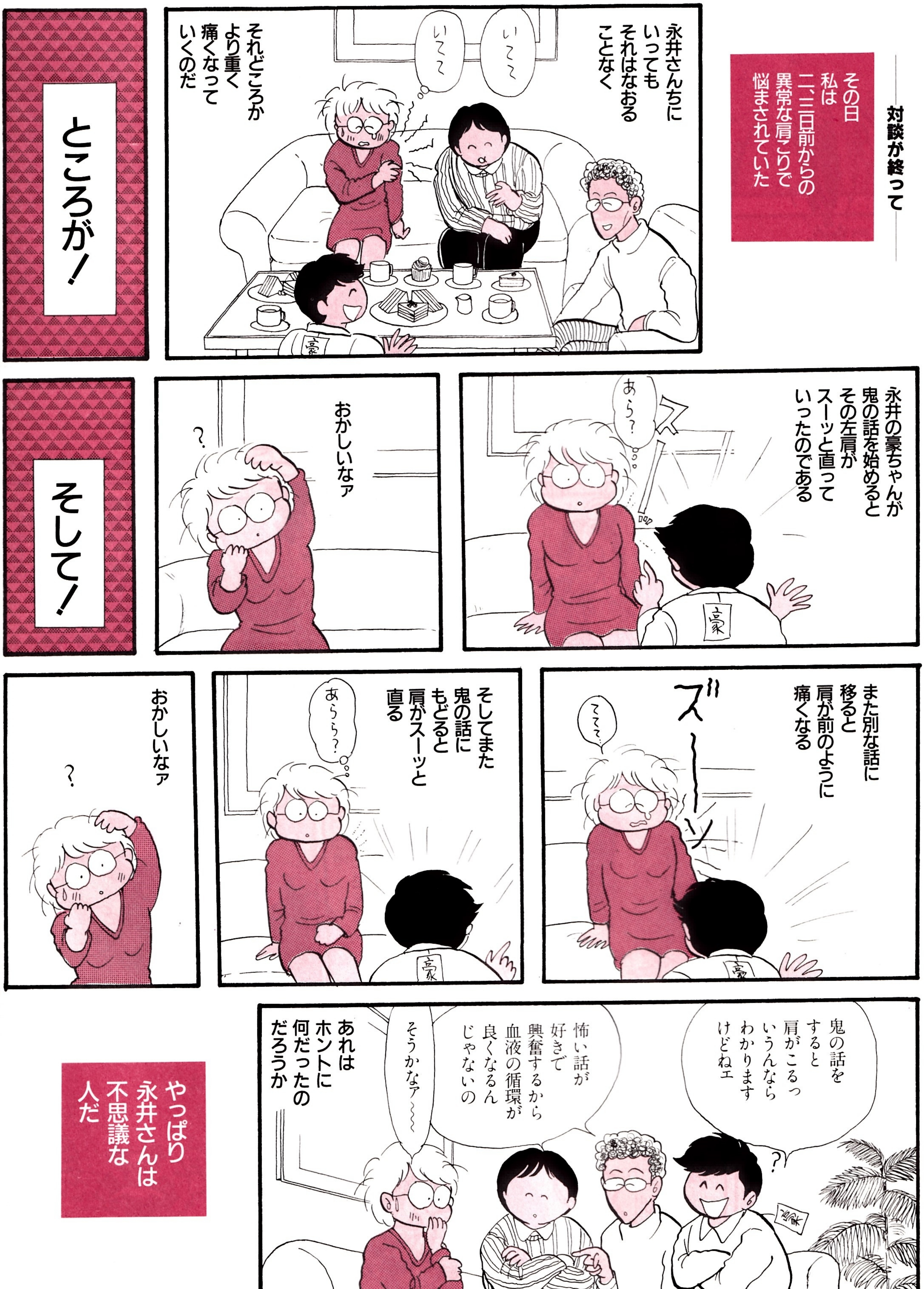
永井 あれみたい、『コールドルーム』って映画。

ささや それ観てない。

永井 いや、冷凍室なんです。肉屋の。それに釘を打って——ホテルなんです——タンスの裏にそれがあってね。

ささや ひぇー!

——という調子で話はどんどん盛り上がり対談はすすみ、夜はふけていくのでした……。



対談が終って
その日 私は 二、三日前からの 異常な肩こりで 悩まされていた
永井さんちに いっても それはなおる ことなく
いてて
いてて
それどころか より重く 痛くなって いくのだ
ところが!
永井の豪ちゃんが 鬼の話を始めると その左肩が スーッと直って いったのである
あら?
おかしいなァ
?
そして!
また別な話に 移ると 肩が前のように 痛くなる
ズ〜〜ッ
ててて
そしてまた 鬼の話に もどると 肩がスーッと 直る
あららら?
おかしいなァ
?
鬼の話を すると 肩がこるっ いうんなら わかります けどねェ
?
怖い話が 好きで 興奮するから 血液の循環が 良くなるん じゃないの
そうかなァ〜〜
あれは ホントに 何だったの だろうか
やっぱり 永井さんは 不思議な 人だ

37



永井豪ファンのための基礎教養講座
講師／高寺彰彦
コホン
まずは手はじめに魔王ダンテからデビルマンに至る悪魔世界の分析
デビルマンでも、ダンテでも、悪魔は
☆地球の先住民族で
☆合体能力がある
という2点では、似てなくもないけど
ダンテでは、悪魔はその昔人間で、侵略者(神)への怒りから、怪物化して悪魔となる。
神のエネルギーを逆にすいとってしまった
かたやデビルマンでは、神が創造した生物が、弱肉強食の中で合体をし、異常な進化をとげたものが、悪魔となっている
ダンテでは、
悪魔 vs. 神＝人間
VS
「対立の図式の比較」
デビルマンでは、
悪魔vs.人間(悪魔人間含む)vs.神
ひとえに主人公の設定の相違によるものですね
ダンテ
ゼノン
ゼノン
サタン
飛鳥了
ヒムラ
ザンニン
ザン
これにTV版がくわわるとキャラクターのビミョーな関係が色々比較できるのだけど…
ややこしいから次に行きましょう
こらこら


3誌にまたがって描き続けられているバイオレンスジャック
その傾向と対策
まず週刊誌編は地獄地震からはじまって
どとうのエルドラドで突然エンド
と思いきやの月刊は門土が生きのびる改訂版
しかし結局ラストはエルドラド
この間の変化としてはジャックの超人化——
肉体から超自然へ——…があげられます…
このよ～にかわりました
最初は地震が起こるくらいだった肉体派の怪人が
なぜ走れるんじゃあよ
ゴゴゴゴ
ゴオーッ
そのうち鳥と話したりする
ザザッ
略画
これが月刊ともなれば
幻覚を見せたり
うわあ
深傷を負った人物を他の場所へ飛ばしてその間に傷をなおしちゃう
あげくは連れの子供が鳥になり
ジャックは消えたり現われたり…
炎にも燃えつきない
服もコゲない
よりハードな青年誌編になると冥界で死者と闘い
ゴゴゴゴゴ
巨大化して超能力者と闘い…
ズシャーン
地震を起こし
ビシッ
光を放出して大軍をジューリンしてしまう
人間じゃねーよこいつ



このハードな青年誌編には月刊誌で死んだ早乙女門土が身堂竜馬とともに再登場しちゃう
青年誌編は門土が死ぬ前か死んだ後か…
この2人いわずとしれた「ガクエン退屈男」のキャラクター
しっかりレギュラーになってしまった
ちなみに月刊には錦織つばさも名前だけ出てる
おしいガクエン版のキャラクター
あーにてねェ
週刊にはオモライくん一家が出てたっけ
飛鳥了と牧村美樹は人犬にされてたし…
うーとてもまともにかけないムゴくて
剣鉄也あえなく死んで
グレートマジンガーッ
炎ジュンは復しゅーに狂ってしまう
ダンテは暴走族のリーダー
リッキーは殺されちゃうし
あゆちゃんも再び死んじゃう
これがハイパーグラップル編ともなれば朱紗真悟は悪役で登場して凄ノ王に変身しちゃうわ
合田もめてます
「アイアンマッスル」のキャラクターは若干のアレンジをほどこされて
アイアンマッスル鋼光
ファイアービーナス
ゾロゾロ出て来るわ
その後もドンドンエスカレートしてるもようで
学園番外地とか
マジンガーZとかこれはもうパロディに近い
この先誰がどんな役で出てくるかは作者ならぬ身の私には手に余る
バイオレンスジャックのこの壮大な支流を泳ぐ本筋の主人公達がどうからみあって大河となるかはひたすら首を長くして作者にプレッシャーをかけるしかないのであった…
どうだ勉強になったろ
フンッ
どこが

40


DEVILMAN
デビルマン・悪魔のFANTASY



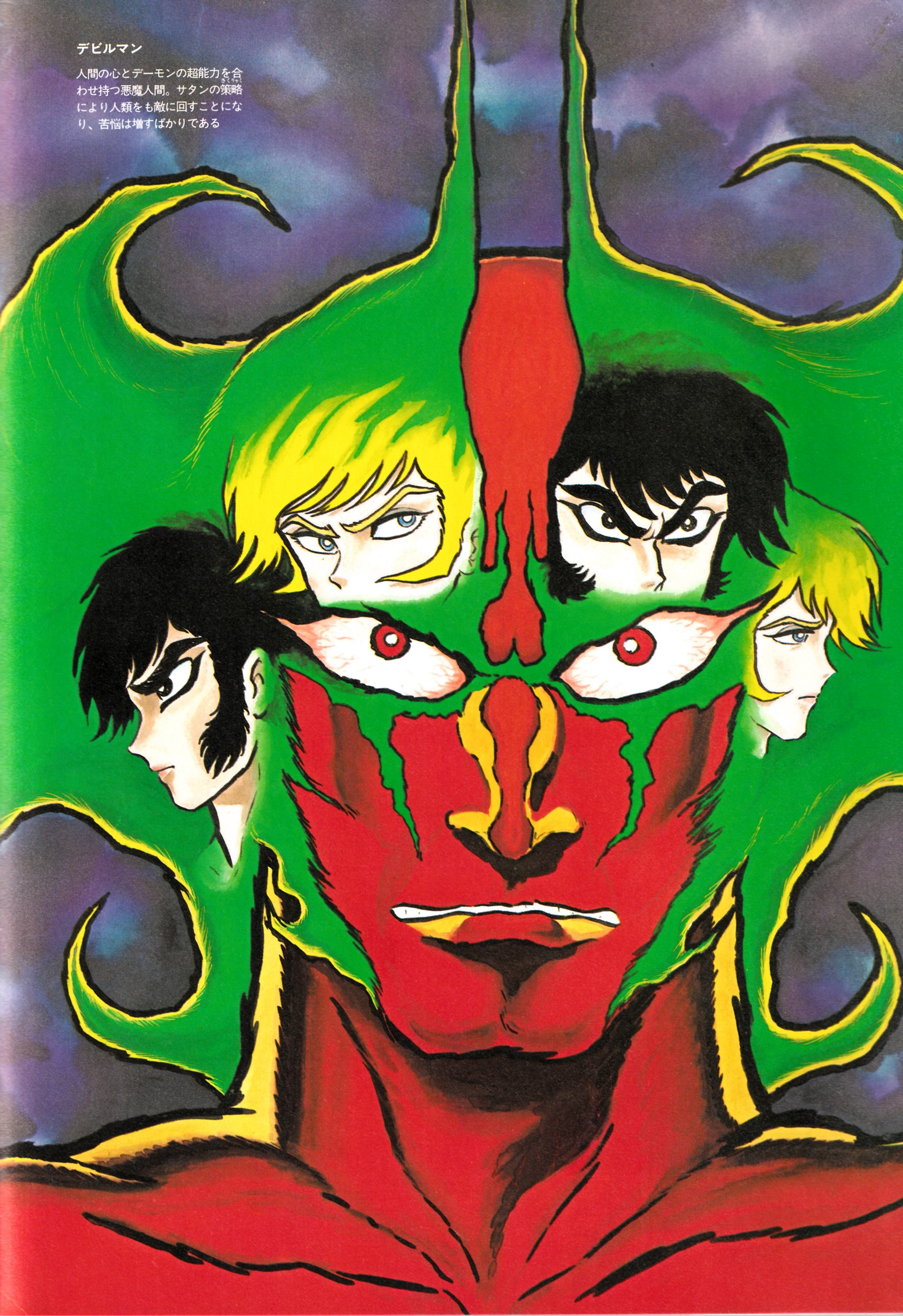
不動 明 デビルマン

はるかなる太古の地球に先住族として存在したデーモン族が再び甦った。デーモン軍団の攻撃から人類を守るために不動明はデビルマンとして立つ決心をした。しかしそのためには、デーモンの恐るべき超能力をおさえる強い意志と、善良で純粋な心を持ち、正義を愛する若者でなければならない。デーモン軍団の勇者アモンと合体した不動明は、デーモンの超能力を手に入れ、なおかつ人間の心を持ちつづけることができるか⁉






SCENE ① —— SIRENE
妖鳥死麗濡



デビルマン

人間の心とデーモンの超能力を合わせ持つ悪魔人間。サタンの策略(さくりゃく)により人類をも敵に回すことになり、苦悩は増すばかりである

●不良五人衆



カミソリ鉄



木刀政



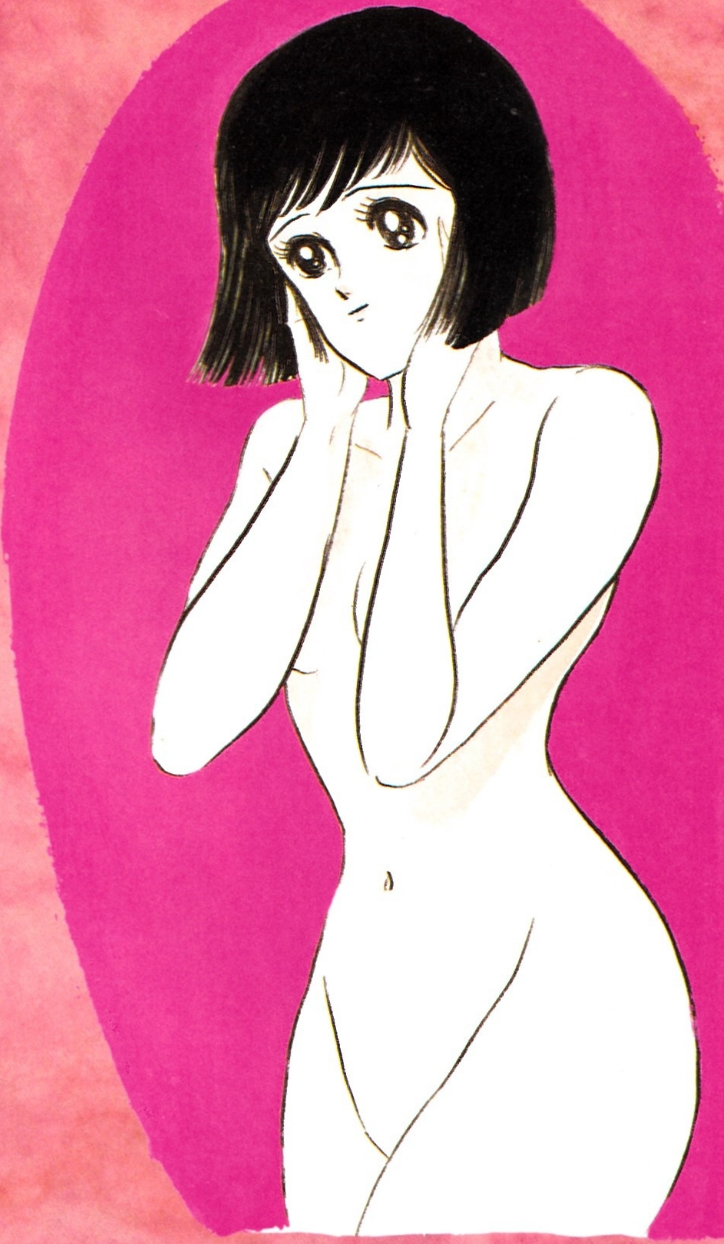
ドス六



チェーン万次郎



メリケン錠



牧村美樹

不動明の恋人。通称平手美樹と呼ばれるように気の強さでは明に負けない。明がデビルマンとなった後も愛情は変わらないが……



デビルマン軍団

デーモン軍団に対抗するために世界各地より集まった超能力者たち。デーモンの無差別合体によって生み落とされたデビルマンの集団





SCENE ② ——SIRENE
シレーヌの最期



サタン

デーモン族総帥。大魔神にして堕天使そして不動明の親友・飛鳥了でもある。三百万年以上の昔、宇宙の創造者である神に対し、地球上の生命を守るために反旗を翻した。いま、かつての神のごとく、デーモンは人間を滅ぼそうとするが、サタンには不可解な躊躇いが…

●デーモン軍団



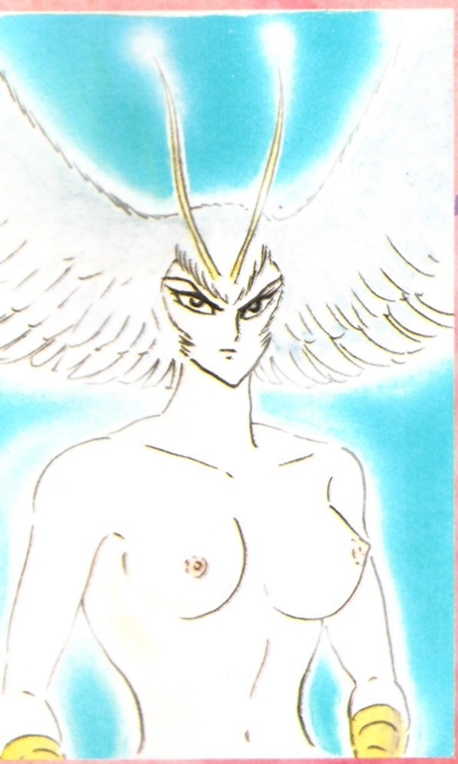
カイム

シレーヌに対する片想いを自らの身体を犠牲にしてとげる。その最期は哀しくも美しい独得な美的世界だ



ゼノン

魔王ルキフェルとして文献で知られ、腹＝獰猛・正面＝冷酷・左＝邪悪・右＝狡知を表わす四つの顔を持ち、百の魔将軍を率いる



シレーヌ

勇者アモンに恋心を抱くが、皮肉にもデビルマン打倒の一番手として派遣され、壮絶なる死闘の末、破れ去る

ジンメン

人間を食べ、半ば生きたまま甲羅にコレクションする恐るべき悪魔。その最期はあまりにも哀しい



ザン

百の魔将軍のうちの一将。配下の者とデビルマンを一度は倒すが、なぜかサタンの「殺すな」の指令が出て…





ゲルマー



サイコジェニー

アグウェル



アモン

魔将軍と同等の力量を持つ凶暴な一匹狼だが、不動明と合体した時、理性ある最強戦士に生まれ変わる



SCENE ③ —HARMAGEDON
ハルマゲドン





SCENE ④ —FINAL
フィナーレ

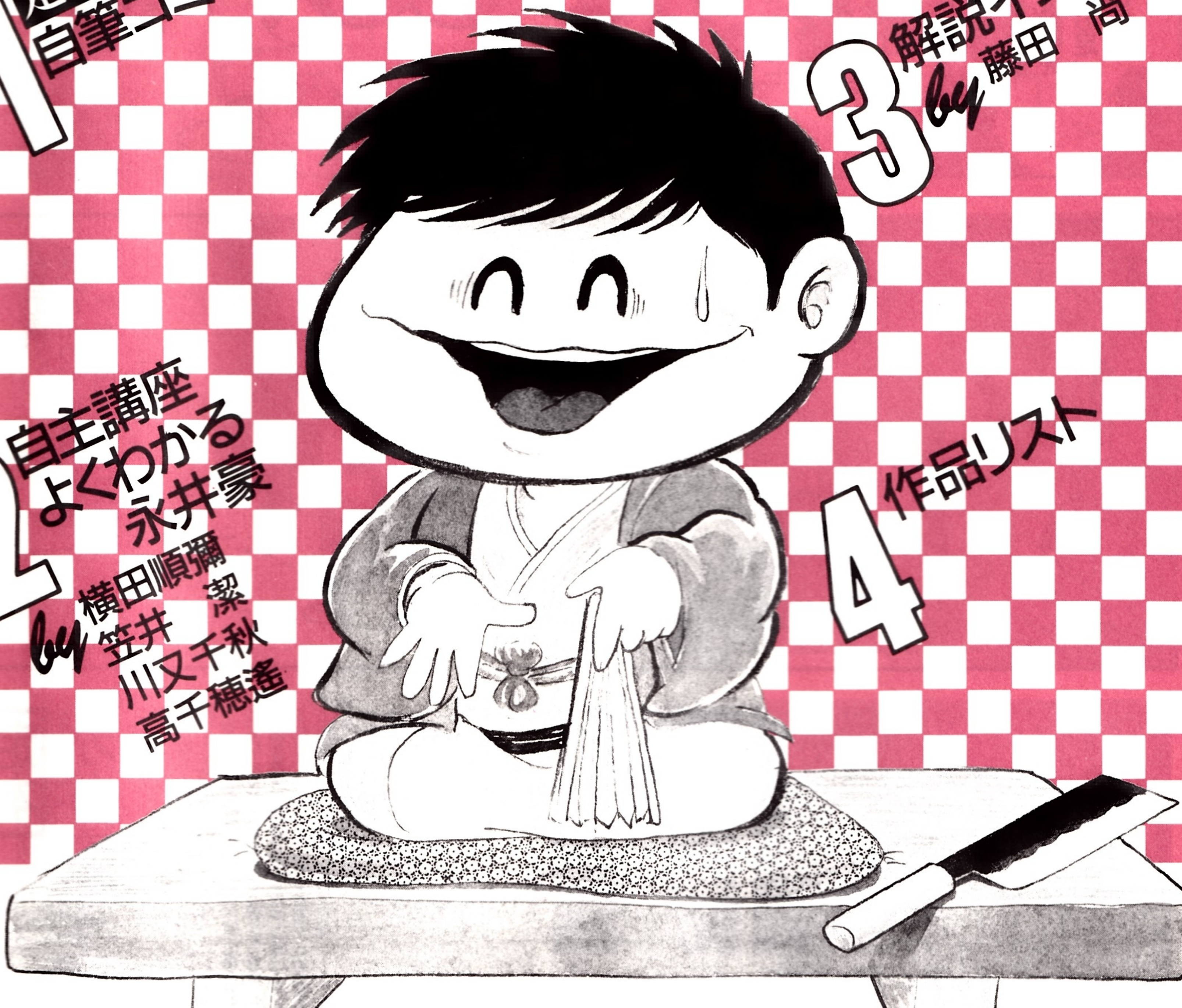




ALL ABOUT GO NAGAI

解説篇 天才 永井豪のすべて

オカルトもの
SFそしてギャグと、
何でもござれのマルチ天才
永井豪大解剖の一席でござる！



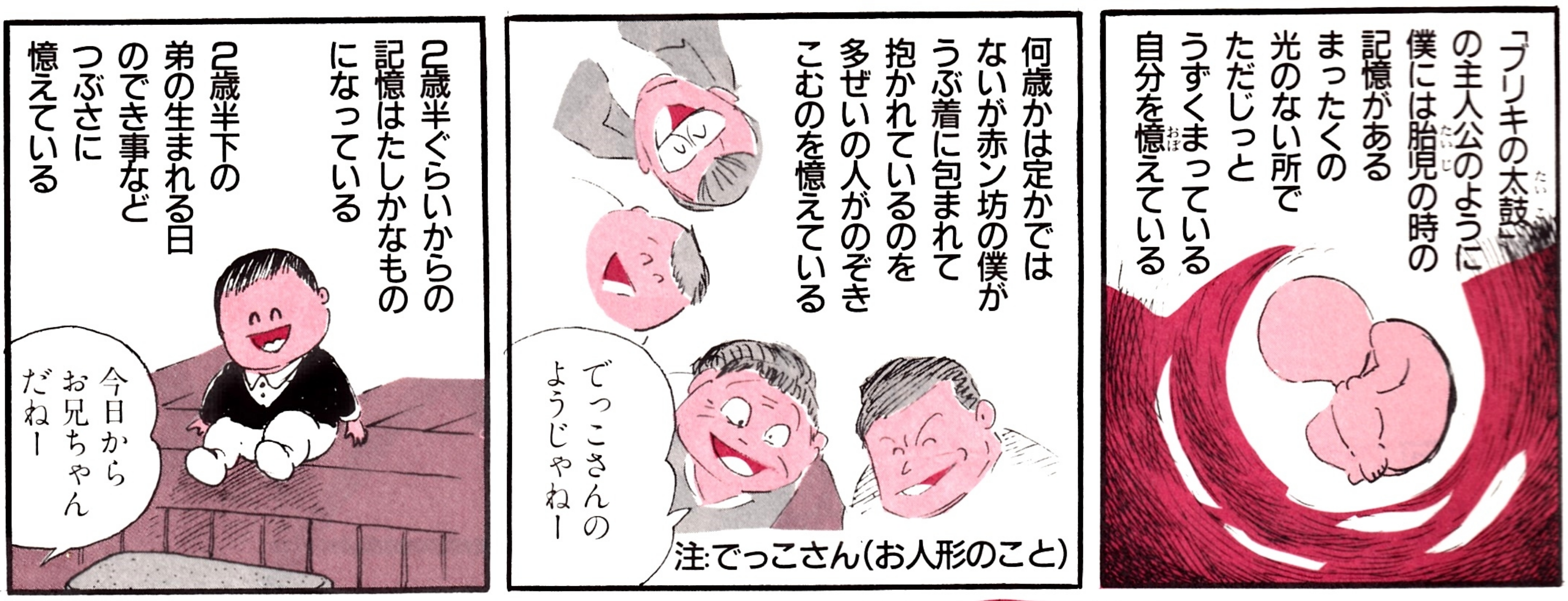
1 定本年譜 自筆コミックス＆完全年譜

2 自主講座 よくわかる永井豪 by 横田順彌 笠井 潔 川又千秋 高千穂遙

3 解説インタビュー by 藤田 尚

4 作品リスト

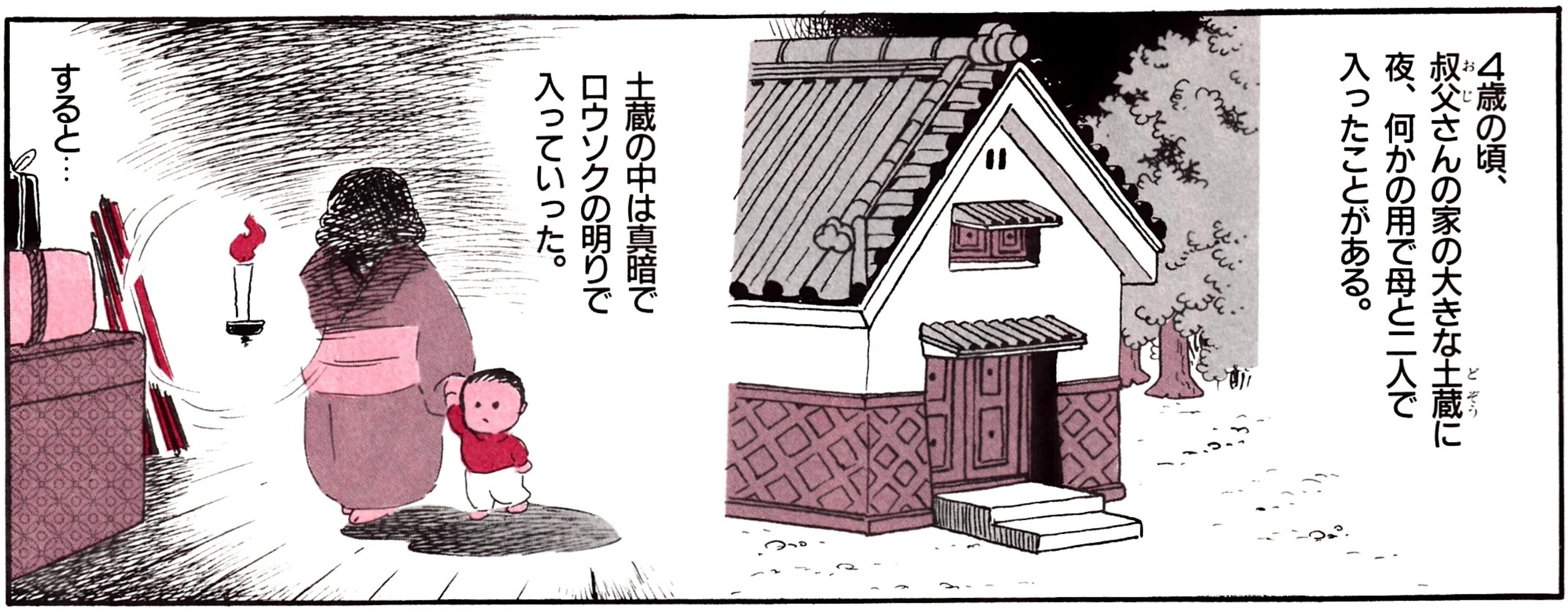
自筆年譜コミックス オカルト篇



3歳の頃、初めて鬼の夢を見る。夢の中で僕は平安時代あたりの貴族の館のような所で寝ている。広々とした板ばりの館だ…



突然、バリバリと天井をつき破り巨大な鬼の手(まだ鬼のことを知らない年なのに)が僕をつかみにかかった。僕は悲鳴を上げて泣き叫び夢からさめた。母がすぐに抱いてくれたが、あまりの夢のリアルな迫力にいつまでも泣きやめられなかった。この時の鬼の手のイメージはデビルマンの中で、不動明を襲うシレーヌのかぎ爪の足として作品に描きました。



定本 永井豪年譜

敬称略

昭和二十年（西暦一九四五年）**九月六日**　石川県輪島市に、両親永井芳雄・富士子の間に生まれる。男五人兄弟の四男。本名潔。

三、四歳の頃、兄・泰宇に手塚治虫の「ロストワールド」を読んでもらい、夢中になる。

福井地震（昭和二十三年）の時、揺れている柱にしがみついたまま断固として動かず、この頃すでに意志の強さを発揮している。

昭和二十七年四月一日　輪島町立輪島小学校入学。おとなしい性格の上、人形好きで、女の子みたいと兄たちにひやかされる。

この頃までに両親と末弟隆（現ダイナミックプロダクション役員）は東京に進出、洋服店として足場を築く。

昭和二十七年七月　一家をあげて上京。豊島区立大塚台小学校に一年二学期より転入。



昭和61年4月某日、自宅ベランダにて



幼時の著者。頭の大きさが目立つ子だった(兄談)

この頃からチラシ広告の裏、教科書やノートをマンガの落書きで一杯にする。

また、生来の引っこみ思案と方言のコンプレックスから、友人を作らずに家の中で“ごっこ”遊びにふける。この時すでに遊びにもかかわらず、状況設定、キャラクター設定などは綿密にノートに記している。

昭和三十三年二月四日　父・芳雄、病没。家

GO NAGAI SINCE 194




昭和27年4月、輪島小学校入学記念写真。前列の左から5番め。1年4組だった

業は泰宇が継ぐ。

四月、豊島区立巣鴨第二中学入学。中学二年生の頃から、突然積極性を表に出すようになる。幼時から、自分で考えて自分で行動するタイプながら、ほとんど人前で自分の意志を語らなかったのが、活発に発言するようになる。

それでも、マンガへの熱意は変わらず、父親の反対もなくなったこともあってか、ますますマンガの習作に励む。

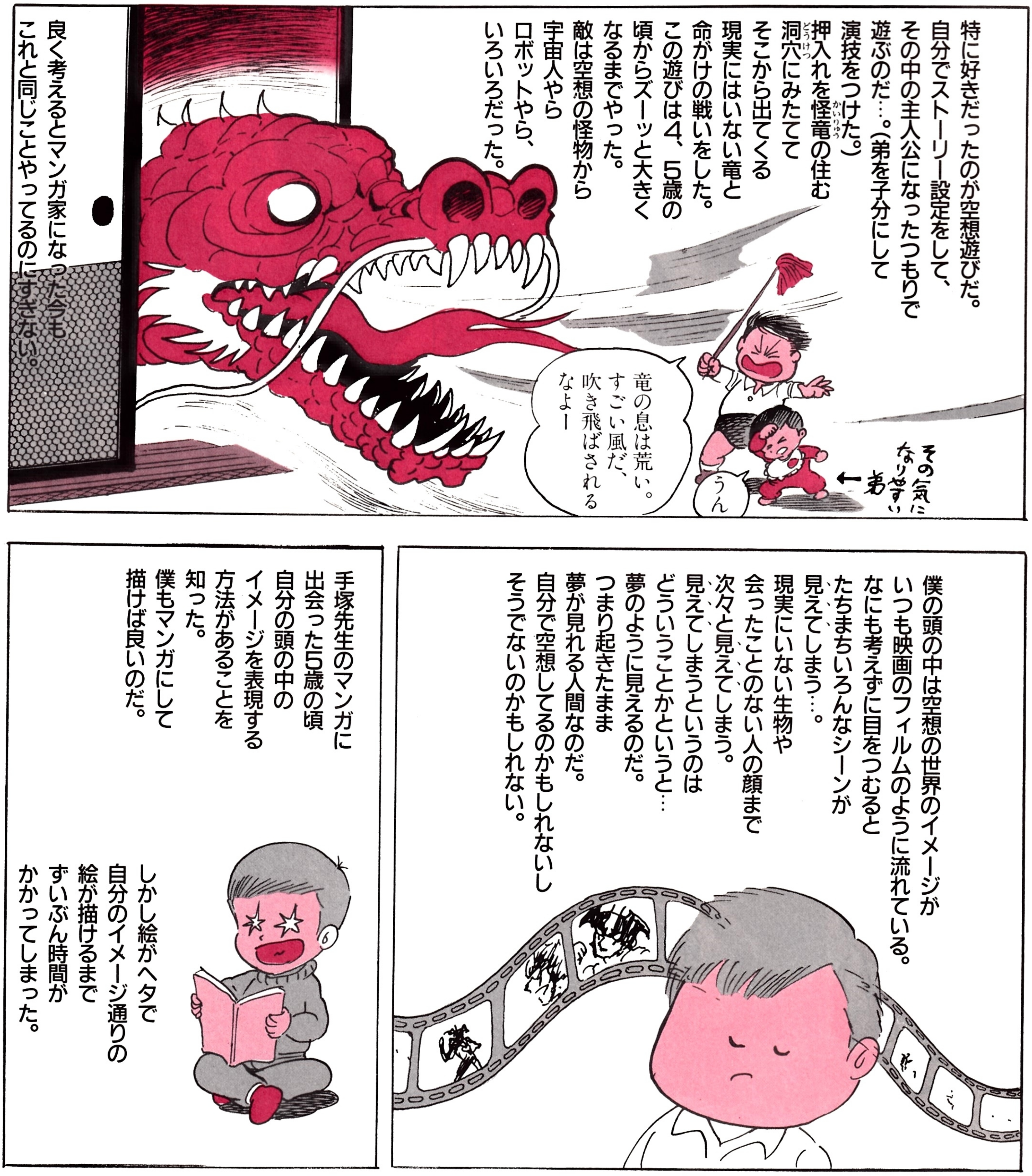
昭和三十六年　都立板橋高校に入学。体を鍛えるため体操部に入部。優秀な成績で入学も、二学期には早くもクラスのブービーへ。

高校三年の夏休み、大学進学を勧める兄・母親にかくれて、持ち込み原稿執筆に精を出す。

昭和三十九年　同校卒業。美術系の大学受験に失敗。予備校に通い始める。

しかし、夏休みに一大決心して大学進学をやめ、マンガ一筋に打ち込む。その間、ボーイや町工場に勤めるなど、職業を転々とする。この間、両親のつてで小学館に原稿を持ち込むが不採用。後に判明したが、マンガを断念させようと、母親がひそかに手を回していた。

昭和四十年　今度は兄・泰宇の紹介で『少年サンデー』に持ち込む。そこで「内容はいいから、テクニックを勉強しなさい」と、石森章太郎を紹介される。描きためた原稿を持って、石森章太郎を訪ね、その場でアシスタントに採用される。通いのはずがほとんど住み込みと同じ状態でアシスタント時代を過ごす。




弟と立ち小便の図。撮影者は兄・泰宇

一年を経ずしてチーフへ。

昭和四十二年十一月 石森プロ退社、独立する。デビュー作は「目明しポリ吉」(『ぼくら』一月号)。「ヤダモン」(『ぼくら』)を初連載。

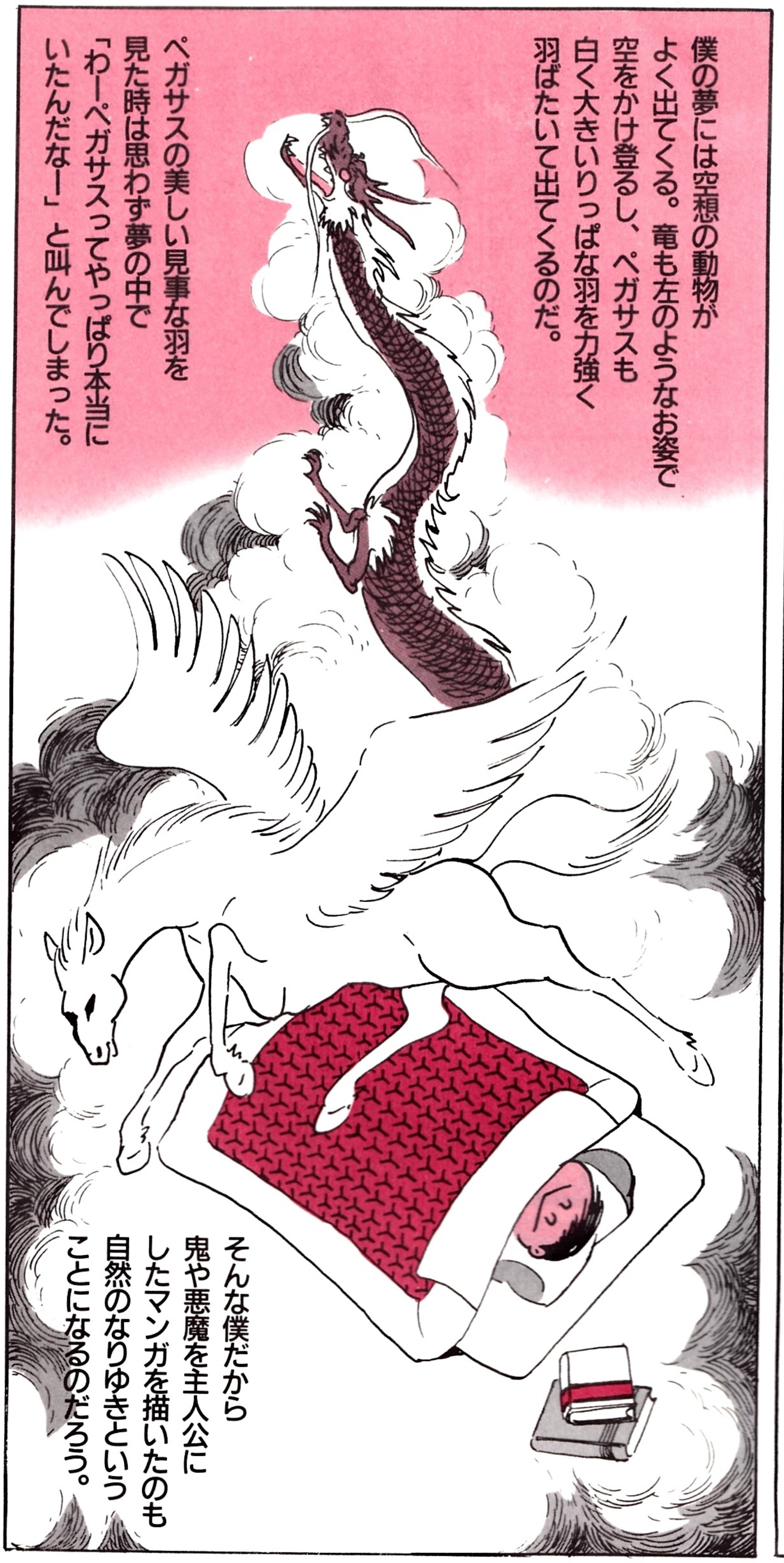
昭和四十三年 『週刊少年ジャンプ』に連載した「ハレンチ学園」が空前のブームとなり各方面に賛否両論を巻き起こす。兄・泰宇、江戸川乱歩賞候補となる(永井ぱく名義)。
この年、蛭田充がアシスタントとして参加。

昭和四十四年四月 豊島区南大塚に於て有限会社ダイナミックプロダクション設立。取締役社長就任。
この年、石川賢がダイナミックプロに入社する。

昭和四十五年 株式会社ダイナミックプロダクション設立。「ガクエン退屈男」(『ぼくらマガジン』二月～九月)連載。
最初の海外旅行(ハワイ)。同行は泰宇、石川賢、蛭田充、桜多吾作ら。
永井豪ファンクラブ(初代会長・筒井康隆)


昭和35年10月。中学校の修学旅行。前列左から２人目の生徒。撮影場所は石山寺





設立。
五月、風忍、小山田つとむ入社。
五月、映画「ハレンチ学園」(日活)公開。以後、九月に第二作、十一月に第三作、四十六年三月に第四作が公開される。
十一月、槙村ただし(元・真樹村正)入社。
〈この年のTV化作品〉
「ハレンチ学園」(東京12チャンネル＝現テレビ東京、十月〜四十六年三月)放映。

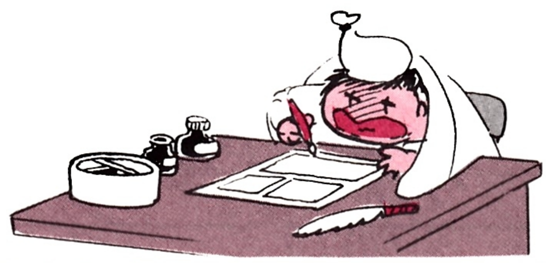
昭和四十六年 「魔王ダンテ」(『ぼくらマガジン』一月号〜五月号)連載。
この頃から本格的にSF作品を描きだす。
「ススムちゃん大ショック」(『週刊少年マガジン』三月七日号)発表。

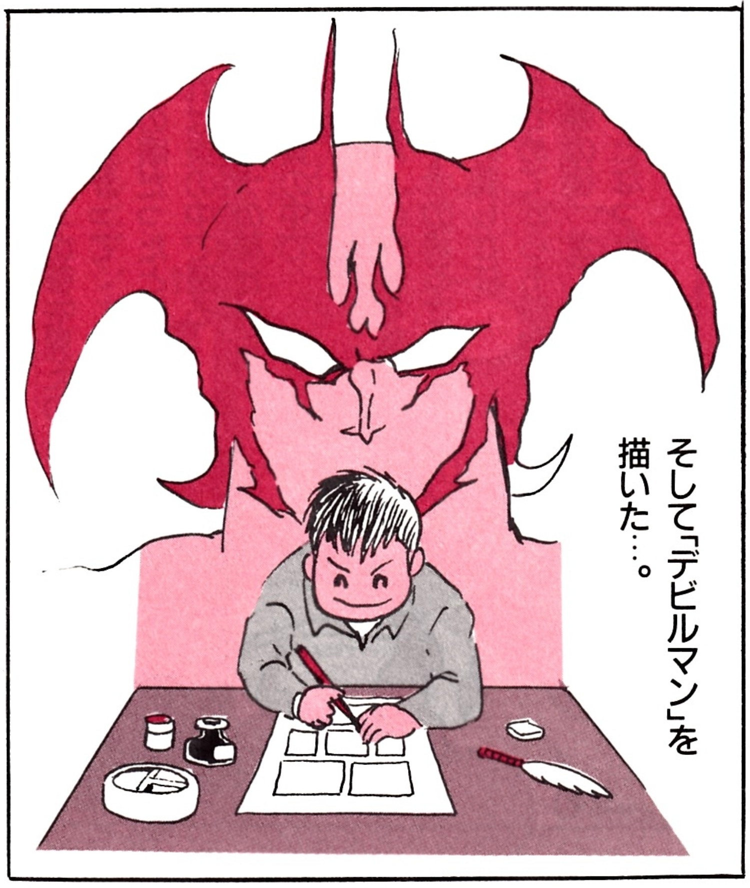

南大塚の頃。母と、手前は兄・泰宇

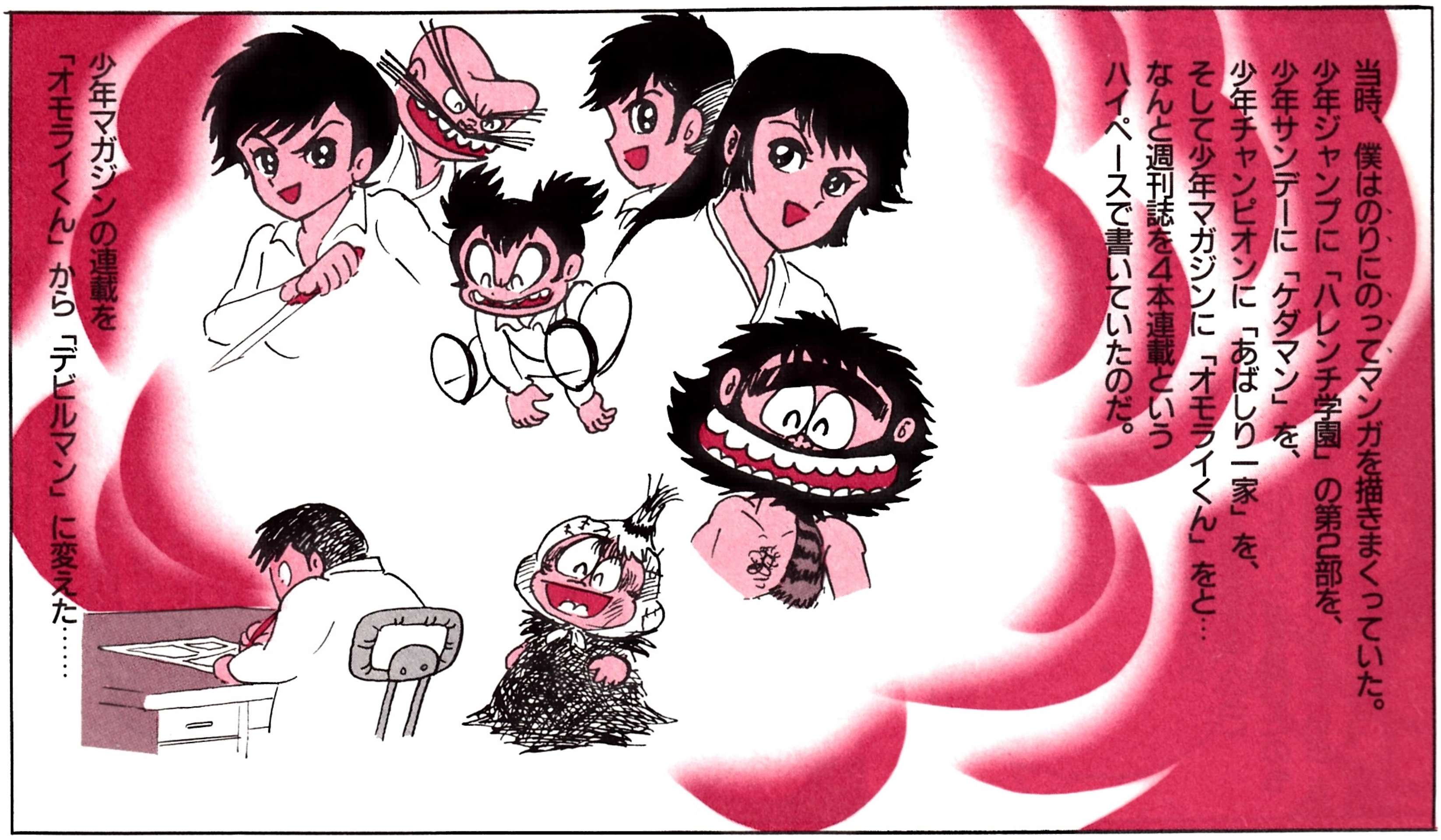
三月、はまだよしみ入社。
この年、ファンクラブの高千穂遙、団龍彦らとプロレス観戦に行くようになる。

昭和四十七年 「デビルマン」(『週刊少年マガジン』六月〜四十八年六月)連載。「マジンガーZ」(『週刊少年ジャンプ』四月〜四十八年八月、『テレビマガジン』十月号〜五十三年三月号)連載。
四月、団龍彦入社。
兄・泰宇、高円寺博名儀で作家活動を開始する。
〈この年のTV化作品〉
「デビルマン」(NET＝現テレビ朝日、七月〜四十八年三月)放映。
「マジンガーZ」(フジテレビ、十二月〜四十九年九月)放映。

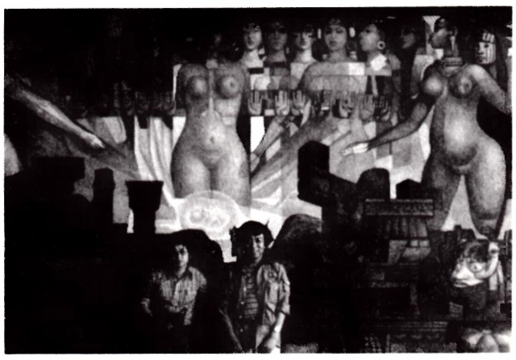
最初に鬼を描いた。
少年マガジンの一〇〇ページ読切
「鬼」を描いた時、突然
40度の高熱にみまわれた。
中学生ぐらいからおよそ風邪と
エンのなかった僕がだ。
高熱と戦いながら必死の思いで
〆切に間に合わせたが、
連載中の「キッカイくん」は
デビュー以来初めて〝落とす〟
ことになってしまった。
この時はまだ〝鬼〟を描くとたたってくる
とは知らなかったのだ…。







昭和四十八年　「バイオレンスジャック」(『週刊少年マガジン』七月～四十九年九月)連載。「ドロロンえん魔くん」(『週刊少年サンデー』九月～四十九年三月、『小学三年生』十月号～四十九年三月号)連載。「キューティーハニー」(『週刊少年チャンピオン』十月～四十九年四月)連載。
七月、映画「マジンガーZ対デビルマン」(東映動画)公開。
この頃から、永井作品が続々とアニメ化されるようになり、ラッシュ状態になる。
〈この年のTV化作品〉
「ドロロンえん魔くん」(フジテレビ、十月～四十九年三月)放映。
「キューティーハニー」(NET、十月～四十九年三月)放映。


メキシコ旅行中豊田有恒氏とのスナップ。

昭和四十九年三月　ダイナミックプロダクションを現在地の新宿区西早稲田に移す。
七月、映画「マジンガーZ対暗黒大将軍」(東映動画)公開。
九月、田中正仁が入社。
〈この年のTV化作品〉
「ゲッターロボ」(フジテレビ、四月～五十年四月)放映。
「グレート・マジンガー」(フジテレビ、十月～五十年九月)放映。

昭和五十年　この頃から海外旅行が増える。
〈この年のTV化作品〉
「ゲッター・ロボG」(フジテレビ、五月～五十一年三月)
「鋼鉄ジーグ」(NET、十月～五十一年八月)
「グレンダイザー」(フジテレビ、十月～五十



二年二月）

昭和五十一年　「手天童子」（『週刊少年マガジン』九月～五十三年四月）連載。

〈この年のTV化作品〉
「マシンハヤブサ」（NET、四月～九月）
「グロイザーX」（東京12チャンネル、七月～五十二年三月）
「バトルホーク」（東京12チャンネル、十月～五十二年三月）
「アステカイザー」（NET、十月～五十二年三月）

この年の一月、「マジンガーZ」がスペインで放映開始。以後、続々と永井豪作品がヨーロッパでTV放映され、一九七〇年代後半には「ゴールドラック」（UFOロボ・グレンダイザー）がフランスを中心に一大ブームを呼び、社会現象化。この狂乱ぶりは日本の新聞にまで報道される。

昭和五十二年　「バイオレンスジャック」（『月刊少年マガジン』一月号～五十三年十二月号）連載。


若かりし頃のダイナミック・プロの面々。後列左から、隆、石川、蛭田、小山田ら

昭和五十三年　SF作家クラブ加入。漫画家としては手塚治虫につぐ二人目。
四月、小松左京、豊田有恒、永井泰宇らとメキシコ旅行。

〈この年のTV化作品〉
「魔女っ子チックル」（テレビ朝日、三月～五十四年一月）

昭和五十四年　「新デビルマン」（『バラエティ』一月号、『増刊少年マガジン』四月、五十五年一月、九月、五十六年一月、五月）掲載。『凄ノ王』（『週刊少年マガジン』六月～五十五年三月）連載。

この年「Xボンバー」の取材で、NASA見学ツアーに出かける。



昭和五十五年　「凄ノ王」で第四回講談社漫画賞受賞。受賞決定の時、豪はアメリカ旅行中で、ロスアンゼルスで受賞の連絡を受ける。
兄・泰宇、高円寺博から永井泰宇と名前を改めて本格的な作家生活に入る（最初の作品は「デビルマン」）。
〈この年のTV化作品〉
「Xボンバー」（フジテレビ、十月～五十六年三月）

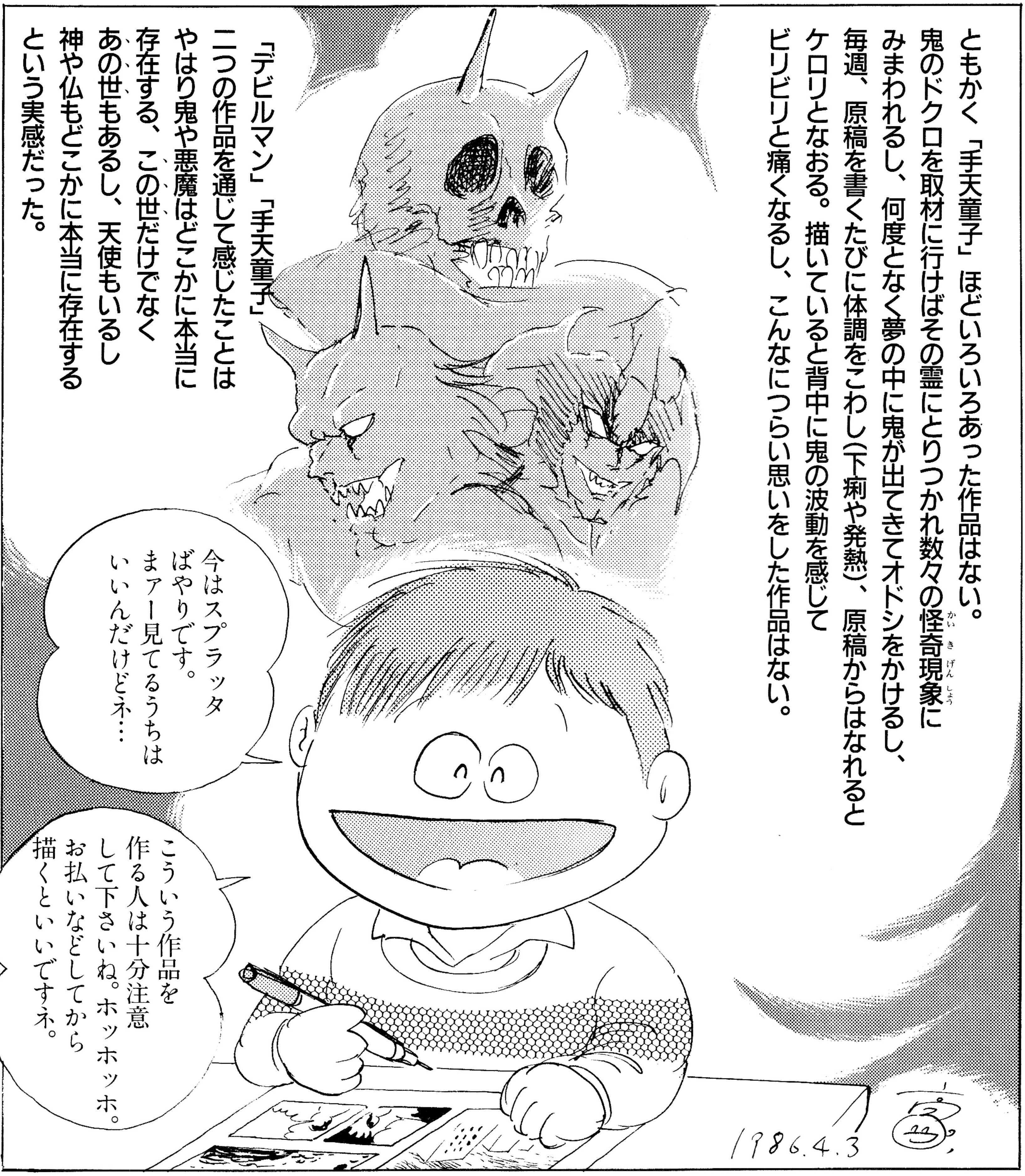

昭和55年、第4回講談社漫画賞受賞。
ＳＦ作家クラブの面々に囲まれて

昭和五十七年九月二十六日　結婚。新婦は肥後純子。「翼の人々」（『ヤングジャンプ』三月～六月。原作・団龍彦）連載。
〈この年のTV化作品〉
「ロボッチ」（テレビ東京、十月～五十八年六月）

昭和五十八年　アメリカのビジュアル・コミック誌〝エピック〟に「鬼」（オリジナル、描き下し）を発表。「アイアンマッスル」（『週刊少年マガジン』一月～十二月）連載。「バイオレンスジャック」（『週刊漫画ゴラク』一月～）連載開始。
〈この年のTV化作品〉
「ゴーバリアン」（テレビ東京、七月～十二月）

昭和五十九年
フランスのコルシカ島で催された第2回ベデ・シネ・フェスティバル（マンガと映画祭）にフェデリコ・フェリーニらと共に招待される。
〈この年のTV化作品〉
「ゴッドマジンガー」（日本テレビ、四月～九月）

昭和六十年　「凄ノ王伝説・火神子」（『バラエティ』六月号～六十一年三月号）連載。
四月、オリジナル・ビデオ「超能力少女バラバンバ」発売。
九月、同「夢次元ハンターファンドラ」発売。



秋、「獅子王」(朝日ソノラマ・季刊)に映画エッセイの連載開始。

昭和六十一年　「バイオレンスジャック」(『週刊漫画ゴラク』)いよいよ佳境に入り、オリジナル・ビデオ化決定。


昭和57年 9 月26日、結婚式でのケーキカットの瞬間

●付録①劇場用映画作品リスト

「ハレンチ学園」監督／丹野雄二、主演／児島みゆき(日活　S45年5月)
「ハレンチ学園2」監督／丹野雄二、主演／児島みゆき(日活　S45年9月)
「ハレンチ学園3」監督／丹野雄二、主演／児島みゆき(日活　S45年11月)
「新ハレンチ学園」監督／林功、主演／渡辺やよい(日活　S46年3月)
「マジンガーZ対デビルマン」(東映動画　S48年7月)
「マジンガーZ対暗黒大将軍」(東映動画　S49年7月)
「グレートマジンガー対ゲッターロボ」(東映動画　S50年3月)
「グレートマジンガー対ゲッターロボG　空中大激突」(東映動画　S50年7月)
「宇宙円盤大戦争」(東映動画　S50年7月)
「グレンダイザー対グレートマジンガー」(東映動画　S51年3月)
「グレンダイザー・ゲッターロボG・グレートマジンガー　決戦大海獣」(東映動画　S51年7月)

●付録②オリジナル・ビデオ・リスト

「超能力少女バラバンバ」(ジャパンホームビデオ　S60年4月)
「夢次元ハンターファンドラ」(日本コロムビア　S60年9月)
「バイオレンスジャック」(創映新社　S61年6月)

自主講座
よくわかる永井豪

1「手天童子」と「凄ノ王」

目前で恋人・雪代小百合を耳宇高校の不良共に犯されなすすべもなかった朱紗真悟の怒りと哀しみが頂点に達した時、伝説が始まる





「手天童子」は伝奇小説ブームの先駆的作品なのだ。

BY 横田順彌

「凄ノ王」の永井豪なりの結末を読みたい

まずはじめに、これ以上はないという、つきなみないいかたをさせてもらう。永井豪はすごい。すごい漫画家といっていいのか、劇画家といっていいのか、あるいは、そんな区別をする必要はないのか、そのへんはよくわからないが、とにかく、すごいことだけは断言できる。

いま、代表作のひとつである『手天童子』と『凄ノ王』を再度読み終え、改めてそのすごさに脱帽している。永井豪が、その実質的な意味でのデビュー作といってもいい『ハレンチ学園』をひっさげて、コミック界に登場してきた時から、彼が手塚治虫や白土三平とならぶ、何十年にひとりという大天才であることはわかっていた。『ハレンチ学園』は、一見、きわめて軽い、はめをはずしただけのギャグ作品のように見えはするが、その実は百人の凡人がよってたかって挑戦しても、とうてい真似のできる作品ではなかった。

ぼくは永井豪とは同年で、小説とコミックスという差こそあったが、似たようなギャグものを書いていたから、彼が『ハレンチ学園』に続く、『あばしり一家』などの一連のギャグものを発表していた時、自然に親しみを覚え、親近感を抱いていた。まったく、一方的に仲間意識を持っていたのだ。大天才の永井豪と自分を、同じ枠内に置くのは、いささか図々しいのだが、力強い同志のつもりでいた。

だが、『手天童子』をはじめて読んだ時、そんな気持ちは一瞬にして、頭の中から吹き飛んだ。そして、永井豪の怖いほどのすごさが心を占領した。ぼくは、雑誌連載ではなく、単行本でこの作品を読んだのだが、巻を進めるごとに、表現しようのないすごさにからだがふるえた。形容詞ではなく、ほんとうにからだがふるえた。同じ体験は手塚治虫の『ジャングル大帝』を読んだ時に一度あるきりだ。

いきなりの鬼と鬼の壮絶な死闘シーンにどぎもを抜かれ、いやみのないセックス・バイオレンス描写のうまさに驚嘆した。小説のセックスシーンやバイオレンスシーンは、読み手の創造力を借りなければ成立せず、その創造力の品で、評価が異なってくる。しかし、コミックスは描き手の手腕のみで、品が定まる。その意味では、小説よりはるかにきびしい。『手天童子』のそれらのシーンは、厳しく、残酷で、悲惨でありながら、ぼくにいささかも不快感を与えなかった。まず、このことにおどろかされた。

ストーリー展開も新鮮だった。いまや、妖鬼や悪魔や化物が現代社会に出現して、暴れまわり、それに超能力者がからみ、バイオレンス・セックスシーンを展開する小説は珍しくないどころか、そうではない小説のほうが珍しいといっていいくらい大隆盛の状況だが、この作品の描かれた時点では、こんなスタイルの物語は、小説にもコミックスにもほとんど見あたらなかった。ヒーロー・ストーリーはあったし、伝奇小説もあったし、バイオレンス・セックス小説もあった。だが、それらをたくみに、ミックスさせたストーリーは見あたらなかった。それだけでも『手天童子』は、その種のストーリーの先駆的作品として高く評価されなければならない。

けれど、ぼくがほんとうにショックを受けたのは、後半にきての、突然のSF的展開だった。それまで、現代伝奇ストーリーだとばかり思っていた物語は、突如として、二十一世紀を舞台とした宇宙SFに姿を変えてしまったのだ。そして、スペース・オペラを展開したかと思うまもなく、時間テーマに移行し、広瀬正の『マイナス・ゼロ』にも匹敵する、複雑なパラドックスの謎解きをして見せ、最後にはインナー・スペース・テーマでしめくくられた。この後半部分のたたみかけるようなSFとしてのストーリー展開に、ぼくは完全にノックアウトを食らった。『手天童子』を





『凄ノ王伝説』小説版は6巻目から小説独自の展開を始める。『手天童子』でも白鳥美雪は再三危機にさらされるが、戦鬼、護鬼らの助力もあって手天童子郎と無事再会

まだ読んでいない人のために、ストーリーの細部に触れることはしないが、その網の目のように張られた伏線が、結末部分で完璧に説明されるところは、これぞSFの醍醐味としかいいようがない。永井豪のほんとうのすごさが、この時になって、やっとわかったのだ。永井豪は、ぼくごとき、三流SF作家が仲間意識を持つような人物ではなかったのだ。

『凄ノ王』は、この大傑作『手天童子』の系列に属するというより、そのあとを追う作品であり、同時にそれを越えることを目標とした作品であるといっていいと思う。この作品は『手天童子』の衝撃的な幕開きにくらべ、いかにもオーソドックスなはじまりかたをする。ほとんど、熱血学園ものかのようなはじまりだ。ストーリーの進行も『手天童子』にくらべると、かなりテンポがゆったりとしている。『手天童子』でおどろかされた読者は、「おや」と首をかしげるかもしれない。が、首をかしげれば、その時もう、読者は永井豪の手の中に捕らえられているのだ。

ヒロインが悲惨な体験をするあたりから、ストーリーは重々しく、読者にのしかかるように進行し、『手天童子』以上の壮大なスケールの物語世界を展開していく。先の予想ができない点では『手天童子』と同様だが、伏線らしきものが少なくストレートなぶんだけ、『手天童子』を知っている読者には、逆に不気味さを感じさせる。永井豪が、そんな単純なストーリーを作るはずがないと考えさせるのだ。そして、おそらく、その考えはまちがっていないはずだ。残念ながら、『凄ノ王』はようやく、前半が終わったと思われるところで中絶してしまっているので、ぼくとしては、推測する以外にないのだが、この作品が描き継がれれば、まず、『手天童子』より、ストーリーの入り組んだ物語になるにちがいなかろう。

どういう理由で、『凄ノ王』が中絶してしまったのかぼくは知らないし、知りたいとも思わない。ただ、いえることは、どんなことがあっても、後を描き継ぎ、完結して欲しいということだ。たとえ、中絶の理由が作者の側にあり、中絶しないではいられなかったとしても、酷ないいかただが、これは、ぜったい、読者のために完結させる義務がある。どうでもいい作者のどうでもいい作品なら、こちらもどうでもいいが、『凄ノ王』はどうでもいいですまされるような作品ではない。

永井豪はシリアスな作品のみならず、ドタバタ作品でも、常に人間の善と悪の観念をテーマにし、追求してきたが、『凄ノ王』はまさに、その問題に真正面から取り組んだ超大作だ。『手天童子』も、この問題がストーリーを支えていたが、それには薄皮が一枚かぶせられていた。それに対し、『凄ノ王』はむきだしで、この問題が前面に押しだされている。そのぶんだけ、『手天童子』にくらべて外見が重いのだが、なんにしても、永井豪の善悪観念の到達点は見極めたい。あるいは、どこかで、予想もしない方向にストーリーが転換してしまうのかもしれないが、それはそれで、なっとくできると思う。小説版のほうは、幸いにして、兄君の永井泰宇が書き継いでいるが、小説と同じ展開になるにしろ、別のものになるにしろ、永井豪なりの結末を読みたいのは、ぼくだけではないはずだ。

ぼくなりの『手天童子』論、『凄ノ王』論を展開するつもりだったのだが、悲しいかな、ぼくにはそれだけの力がなく、極めて独断的な読後感想と要望の雑文になってしまった。おまえのいうことは、まるっきり、的はずれだといわれても、反論はできそうにない。ただ、そんなぼくにも、たったひとつだけ、これだけは自信を持っていえることがある。もう一度、くりかえす。

だれがなんといおうと、永井豪はすごい！『手天童子』はすごい！　『凄ノ王』はすごい！　絶対にすごい!!

これが、結論だ。

（敬称略）

自主講座
よくわかる永井豪

「吹雪の中に現われるツァラはジャックにヒントを得た」



「少年漂流モノとして読むと代表的な傑作に入ると思いますね」



2「バイオレンスジャック」

永井作品は少年小説の伝統を忠実に継承しているのだ。

BY 笠井潔

人間界と自然界にまたがった両義的存在

永井豪の『バイオレンスジャック』には非常に感銘を受けました。どういうところが凄かったかというと、わりと初めのほうの震災のシーンで、ヤクザが子供を抱きかかえて、砦のシーンで、ヤクザが子供を抱きかかえて、近づくとこいつを殺すぞとジャックを脅かすわけ。どうするのかと思っていると、無言のまま大ナタのようなジャックナイフで子供の首もろともヤクザの首を切り飛ばしてしまう。大衆小説とかでこういうシーンとかシチュエイションていうのは非常に濫用され、酷使されてると思うけど、大体うまくいって、子供の命だけは助かるということになってる。現実にそんなにうまくいくはずがないってのははっきりしていて、そこのところをバサッと、こういう解決しかあり得ないってやったのが、一つ象徴的に感動した場所だった。

それは、バイオレンスジャックが人間界の法とかモラルとかを超えた存在であるという、一種の超人性を示すものだと思う。それが鬼や悪魔だったら何をしてもあんまり驚かないけれども、二メートル二〇センチとはいえ一応、人間であるらしい。人間でありながらなおかつ、人間社会の法やモラルを超越してしまっているという、そういう両義性というか二義性というか、予盾したキャラクターの魅力というものがあったわけです。永井豪の他の代表作である『デビルマン』とか『手天童子』とか『凄ノ王』とかは、鬼だったり悪魔だったりして、そもそも人間ではない。実感として人間を超えた存在である。そうするとその暴力性、圧倒的な暴力性というのが、わりと素直に読めてしまう。バイオレンスジャックの場合、なかば人間であるというところから、読者を非常に不安な気分に追いやってしまうという面白さがある。『水戸黄門』をみてもそうであるように、読者は自分の常識に沿って物語を楽しむわけで、それはそれで面白いんだけど、もっと面白い、自分の常識が破壊されてしまう面白さというのがあるわけで、それをやっぱり感じたんじゃないかと思っている。

そして、鬼や悪魔の持っている暴力性と同時に、永井豪の描くもう一つの暴力というのは、例えば『凄ノ王』の最初のところで執拗に描かれるように、雪代小百合というヒロインの女の子が、獣のような不良学生によって強姦されるというような、ヤクザの暴力であったり、チンピラの暴力であったり…。これは人間の持っている悪であり、人間の持っている暴力性なんだけど、それと、鬼や悪魔の発揮する自然――自然だと思うんだ、人間に対して――の暴力性みたいなものがあって、バイオレンスジャックというのは、その二つにまたがって存在しているから、人間対自然の、二項対立っていうんだけど、そういう二元的な安定した枠組みを超越していくところがあって、それがキャラクターとして非常に魅力的だと思う。

それで、この機会に一言いって、仁義を通させてもらうと、私は『巨人伝説』というシリーズを書いていて、その中に〝ツァラ〟という巨人が出てきます。これは、『バイオレンスジャック』を連載時に読んで、そのキャラクターの魅力に非常に打たれて、こういうものを自分も書いてみたいと思いました。それで、ジャックは関東地獄地震後の荒野に現われるわけだけれども、吹雪の中に現われる巨人のイメージが浮かんで、八ケ岳山中に何メートルもある巨人の影が横切っていくというシーンを書いたわけですが、まずそのシーンが先にあって、話はあとからいろいろ付け加えたということなんです。全巻完結後は、後書きに永井豪へのお礼の言葉というのを書くつもりだけど、なかなか完結しそうもないから、ここで一言いっておきます。

日本のコミックスは、少年マンガから入った作家が多いわけで、その後少年が青年、中



「こういう解決しかあり得ないというやり方に感動しました」

年になって読者層も押し上がって、少年マンガとは呼ばない作品もたくさん出てきてるんだけれども、やはり少年を主人公にしたものに傑作が多いと思う。その中で「十五少年漂流記」というのが一つの典型ではないかと思うんだけど、少年たちが日常生活から逸脱してしまって、そこで自分たちが生き抜くために、さまざまな知恵を出し合ったり、組織を作ったり、リーダーを選んだりして闘っていくというドラマがある。永井豪の場合も『バイオレンスジャック』の初めのほうで特にそういうテーマを扱っている。その面でもかなり代表的な傑作に入るのではないか。楳図かずおに、たぶん「十五少年漂流記」を念頭に置いた、『漂流教室』という傑作があるけれども、それと並ぶ、いわば〝少年漂流モノ〟の成果としてあるように思う。

社会発生の原点を描く少年漂流モノ

何故そういうものが面白いのかというと、人間の社会発生の原点というようなものを、この種の物語の中で追体験するから面白いんじゃないかと思う。つまり、社会や組織や集団というものがゼロからダイナミックに作られていく過程がある。「十五少年漂流記」の場合は、子供たちがヨットで海に出ると嵐に遭ってどこかに漂着しちゃう。そうすると、学校という制度の中にたまたまはめ込まれていた、つまり社会や大人から与えられた組織の中で生活していた少年たちは、漂流という異常事態によって、裸の十五人として放り出されてしまう。学校社会や他人から与えられた組織は壊れてしまったわけだから、自分たちで新しく小さな社会を作っていかなければならない。そこにはいろんな冒険や危険があるけれども、眼目はそういった危険に直面しながら、一旦バラバラになってしまった人間が、自分たちの力で社会を作っていくところに面白さがあると思う。

『バイオレンスジャック』の最初の部分で扱われている震災孤児たちの中にも、そのパターンというのは典型的に読み取れる。作者の思わくとしては、逞馬竜という孤児たちのリーダーが、最後はスラムキングと雌雄を決して関東にユートピアを建設する、というふうに考えてるらしいんだけれども、その意味では、社会発生の原点を物語として語るという「十五少年漂流記」的なテーマとともに、一種の教養小説——自己形成小説、ビルドゥイングス・ロマン——の要素もある。典型的なビルドゥイングス・ロマンというのは、ゲーテの「ウィルヘルム・マイスター」とかトーマス・マンの「トニオ・クレーゲル」などがそうで、一人の人間がいかにして自己を形成していくかという過程を描く、人格形成小説なわけです。

そういったテーマというのも永井豪は非常に特殊な形、永井豪的なやり方で繰り返し扱っている。逞馬竜に即していえば、すでに今あげたような、子供社会のダイナミックな形成過程がそうであるし、もっと典型的なのは『凄ノ王』で、『凄ノ王』というのは、非常に弱々しい少年が、だんだん自己の内なる力に目覚めていく過程を描いていて、最後は凄ノ王になってしまう。橋本治もいってたけど、弱い子供でいる間は世界は安泰だけれども、平凡な少年が自分の真の姿に目覚めると、その代償に世界は破滅してしまうという特殊な形で。これは、永井豪の無意識的な世界とのつきあい方の認識として、非常に興味深い。

とにかく、そういう形での教養小説というか、教養マンガというかが、永井豪のいろんな作品に繰り返し表われる一つのパターンとしてあるんじゃないか。そういう意味でも面白いところがある。そして、少年小説というのは基本的に教養小説だから、永井豪は、少年小説の要素を少年マンガとして非常に忠実に継承している作家です。

（談）

自主講座
よくわかる
永井豪

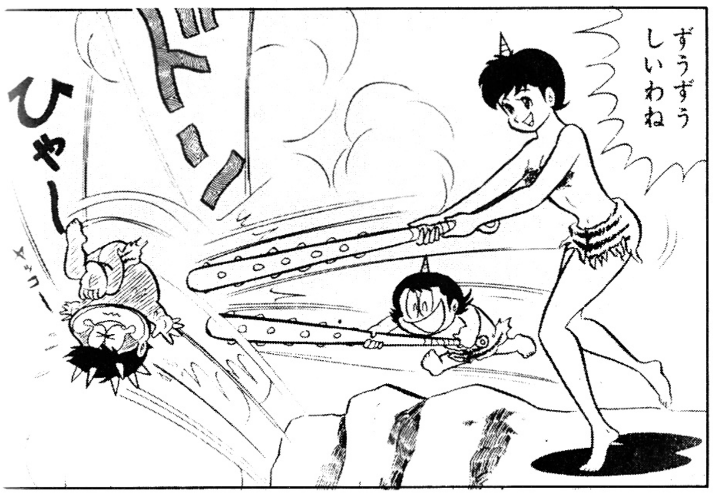
3 「デビルマン」

永井豪は他人より早く世紀末を迎えてしまった。

BY
川又千秋



「マンガは大学に入って読み始めたんですが、ある日、心理学教室のうしろで『キッカイくん』を読んでびっくりしまして。これはただものではない(笑)。それから本格的に読み出したわけです。モラル破壊の印象がまずあって、それもモラルをモラルとして意識して破壊するんじゃなくて、何かやりたいっていうとすべてのことをそれにひき寄せて行動して、否応なしにモラルが吹き飛んでしまう。キッカイくんは一面作者自身でもあって、自分の欲求をそのまま描いて、現実と欲望をどんどん短絡させて出て来た作品だと思う。その短絡のすばやさみたいなものがコンセプトだったんじゃないかと考えてます」



『キッカイくん』より

「右脳」に身をまかせきって生まれた作品

『デビルマン』は、連載で読んでた当時は迫力だけすごく印象に残ってたんだけど、今読み直してみると、年取ったせいもあるかもしれないけど、非常にトータルな、統一された世界に驚いてます。この頃読者だった人たちが、今描き手として出て来ていて、『デビルマン』が原体験になっている人は非常に多いでしょうね。特にこの救いのない終り方というのは私好みでして(笑)。こういう超越的な存在が闘い始めてしまったらもう人間社会のモラルなり論理なりというのは全然意味がなくなって、ただ彼らは殺戮されるためだけに右往左往する。そのへんがすごく自然に出てきて、その自然さの衝撃みたいなものをすごく強く感じました。連載されてた頃はバイオレンスの描写のすさまじさの背後に隠れてて、そんなに意識してなかったのが、改めて読んで非常にびっくりしまして。

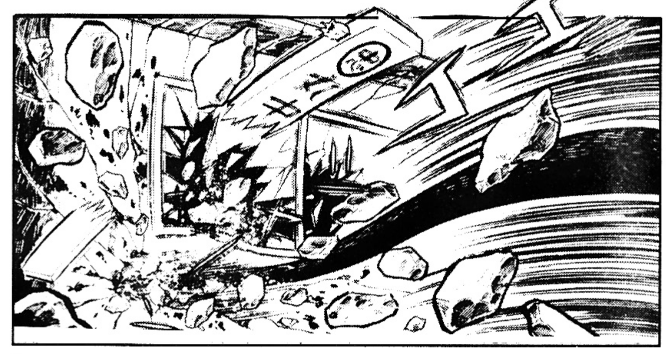
ヒロイック・ファンタジーは、いろんな人が描いているけど、あれって、自分の無意識というか本能というか、何かそういうものに身をまかせきる人じゃないと絶対描けないと思う。永井豪の真似ってもし誰かしようと思っても、まずこうはならない、理性的なものの検閲を受けちゃって。例えば、俺は今モラルを崩してるんだと途中で作者が感じてしまったらアウチ、みたいなところがある。豪ちゃんの場合は、そのへんが全然なくて、非常に自然に物語が展開していき、最終的には、実に巨大なテーマが描き出されている。ものすごく残虐で血なまぐさいシーンが連続するんだけど、視点が人間の側から離れて超越的なものの闘いの場に完全に移行してるから、それが血なまぐさくも何ともない。非常に必然的な流れで最初から最後まで通っていて、全体としては見事に統一がとれてる。この統一性ってのは何かというと、永井豪の内部世界の因果律みたいのが非常に色濃く出てきて、完全に作品を覆ってるというか、その内部的な因果律だけで物語が進んでる凄さというのがあるわけ。逆に、こういう作品が可能だった時代というのはすごいなあと(笑)。だから、豪ちゃんが先のこと考えずに描いてるというのは、正解だったと思うね。物語的な完成度みたいな起承転結のパターンを守ってたら絶対こんな作品描けっこないし。自分の無意識を完全に信頼して進めてったからこそ、こういうとてつもない作品ができちゃったんだろうと思う。これは、神話というか、黙示録的世界を踏み台にしてるわけだけど、そういうのとまた全然違った、何か人間の原型的なイメージみたいなものをトータルに表現している、すごい作品だと思う。やっぱ豪ちゃんは天才ですよ。

『デビルマン』に比べると『バイオレンスジャック』の方がむしろある程度世界観みたいのが固められてきてるところがあって、その中で個人個人の成長なり動きなりがわりと意識化された部分で、世界が組み立てられていると思うんだけど。『デビルマン』ってそのへんの組み立ての意識ってのもとっぱらわれている。本当に、精神のどこかにひゅっと開けられた穴から、観念の素型みたいなものがどんどん噴出して、ハイ、全部出終りました、といって終ったと思う。そういう意味でも驚くべき作品だし、こういう魑魅魍魎が人間の精神の中から出て来るときの、一つのパターンを描き尽くしちゃったんじゃないですか。

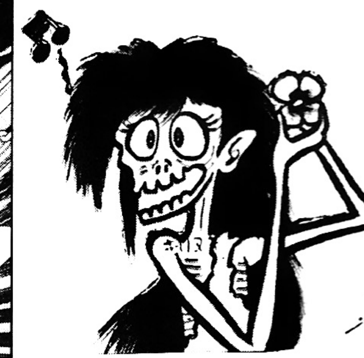
『デビルマン』てのは本当、SFの古典だと思う。やはり、少し早かった作品だと…。早すぎたかどうかはわかんないけど。一種の世紀末的感性だと思う。ぼくは、今世紀に関するかぎり、世紀末ってすごく早く来ちゃったって気がするんです。『デビルマン』が出た時期っていうのは実は二十世紀人類にとっての世紀末だったという意味で、これはやはり世紀末の作品だったと思いますね。（談）



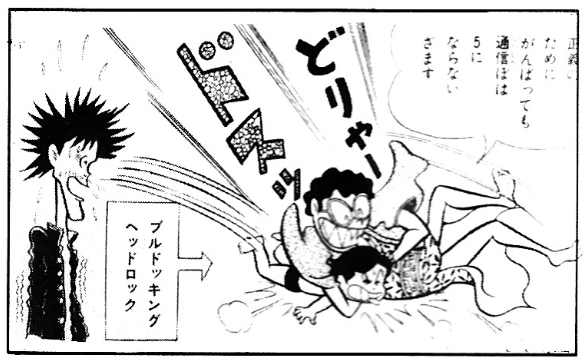
スラムキングは18歳の時、家庭教師の女子大生の体に触れることを通して、力を制御することを学んだ。



『ウスラマン』の中で怪獣に壊されてしまう高千穂氏の実家テーラー丸忠



『まろ』に登場する餓死者姫。モデルは高千穂遙氏。やせていた頃を偲ばせる数少ない証拠の一つ



4「永井作品と格闘技」

実はギャグ作品にこそ、通好みの格闘シーンが多い。

BY 高千穂遙

並の荒唐無稽ではない異常設定のうまさ

私がプロレスをライブで観る時はいつも豪ちゃんと一緒でね、一番面白かったのは、ワールドリーグ戦を後楽園に観に行った時です。キラー・カール・コックスが出場しているのを並んで観てまして、場外乱闘になったんですよ。そうしたら、よせばいいのに、私らの後にいた観客がミカンの皮か何かを投げつけて、コックスの背中に当たったんです。コックスは激昂しまして、いきなり振り向いて私らの方をにらむと、何かわめいてこっちへ向かって来るんです。投げた奴はって見ると、もう真っ白になって硬直してる。どんどん迫って来るから私は思わず豪ちゃんの背中を押して「この人です」（笑）。コックスは若手に制止されて帰っていきましたが（笑）。

豪ちゃんは、私みたいなフリークスじゃないから、格闘技そのものについての知識は少ないけど、観かたの鋭さというのがあるんです。楽しみ方も心得ていて。それも、私みたいなフリークスは、過程があった上での、理詰めの面白れエや、なんだけど、豪ちゃんの「面白れーっ」という感覚は、直感なんです。そのへんが私なんかにはすごく新鮮ですね。それこそ、作品にも面白れエやっていうシーンがポンと出せてしまう感覚で。この面白さの感覚は口では説明しにくいですけどね。

それに、何といっても団龍彦君が私を上まわるプロレス・ファンで、技とかに詳しいですから、格闘技についてもアドバイスしてます。以前、マンガにブルドッキング・ヘッドロックのことをネックブリーカー・ドロップって間違えて描いたんだけど、すぐネームを直した。豪ちゃんはそのへんに節度があるというか、人の意見を作品に取り入れるのがうまいですね。ブレーンと才能の使い分けが上手なんです。そういう姿勢と、作品に生かすセンスとかが合わさると、なかなか格闘技マニア向けになるんです。だから、むしろギャグものの方にプロレスの雰囲気があって、『あばしり一家』とかに出てくるシーンが意外と通好みでいいんです。『バイオレンスジャック』なんかは、格闘技というより、キャラクターのパワーの人称化であって、とにかく強い人間を設定していくとどうなるかという面白さですから。格闘技そのものに関してのアプローチではないわけです。私はスラムキングの設定が一番好きで、ジャック本人よりも興味がある。鎧で押さえつけないと筋肉がはじけとんでしまう、などという設定は見事なものです。まさしくパワーの具体的な見せ方。あれができるというのは重要だと思いますね。豪ちゃんの異常設定の作り方のうまさっていうのはすごいですよ。並の荒唐無稽ではない。心地よく荒唐無稽にしていくからいいんです。

やっぱりそういう設定で始めた場合、話が収斂に向かわなくなってしまうのはもうしょうがない。どこかでジャックが野垂れ死ぬ結末しかあり得ないわけです。一番いいのは、みんな主人公が死んでいって終るという、ハレンチ学園式。あれ以外ないと思いますね。そのくらい豪ちゃんの作品は、いい意味で荒唐無稽に過ぎている。豪ちゃんは論理の人ではないし、フリークスではないのだから、でき上がる作品はそのときの感性で決まっていくわけです。だから、『デビルマン』にしても、ああいうふうにしかできないんだと思います。きれいに終るっていうのは、逆にいうと不本意なんじゃないかな。未完の作品が多いのも、そういうところがあると思います。

『バイオレンスジャック』についても、他の作品のキャラクターをひきずっているし、論理で作ってたらあんな作り方はできないですよ。格闘技にしても、豪ちゃんの使い方というのは、パワーをキャラクターに叩き込んでいって、結果として出てくる格闘シーンというものですから。理詰めな作家ではないから、本当に評論家泣かせですよ。（談）



解説インタビュー

最初からスペース・オペラみたいなSF志向だった。

BY 藤田 尚

単純明解なSFが大好きという先生が如何にしてオカルトしてしまったか、永井豪の〝天才〟に迫るロング・インタビュー!!



現在ではほとんどアイデア・ノートを使わないという豪ちゃんの小学校時代のアイデア・ノート。本邦初出のきわめて珍しい貴重な写真です

小学校時代に一所懸命、当時のヒーローたちを模写していて、手塚作品などが大きな影響を与えたことがよくわかる

永井豪 単行本リスト

Bibliography

あ

アイアンマッスル①〜⑤（講談社 S58）

あばしり一家①〜⑮（秋田書店S45〜）①〜⑧（秋田書店 S52〜 文庫判）①〜（秋田書店S60 B6判）〈永井豪ギャグ傑作集①〉（講談社S54）

アフリカの血　原作：筒井康隆〈混乱列島〉（朝日ソノラマ S52）

アラーくん（講談社 S44）

い

いざり市物語〈永井豪傑作選②〉（朝日ソノラマ S49）

イボ痔小五郎シリーズ

廃人二十面チョ〈永井豪ギャグ傑作集①〉

ハゲ髪鬼毛毛一発〈永井豪ギャグ傑作集②〉

女財ふろとかげ〈永井豪ギャグ傑作集③〉（講談社 S54）

イヤハヤ南友①〜⑦（双葉社 S55〜）

う

ウスラセブン〈永井豪傑作選①〉（朝日ソノラマ S49）〈永井豪SF傑作集④〉（講談社S53）

宇宙怪物園〈永井豪SF傑作集⑤〉（講談社 S53）

ウルトラスパイヒゲゴジラ〈ハレンチ学園⑥〉（集英社 S45）

え

江の島ドジラ〈永井豪傑作選②〉（朝日ソノラマ S49）

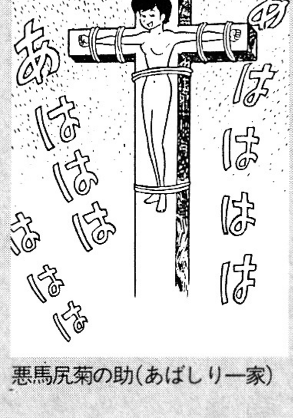
お

おいら女蛮①〜⑦（朝日ソノラマ S55）〈永井豪ギャグ傑作集①〜③〉（講談社 S54）

おちこぼれクン〈永井豪ギャグ傑作集②〉（講談社 S54）

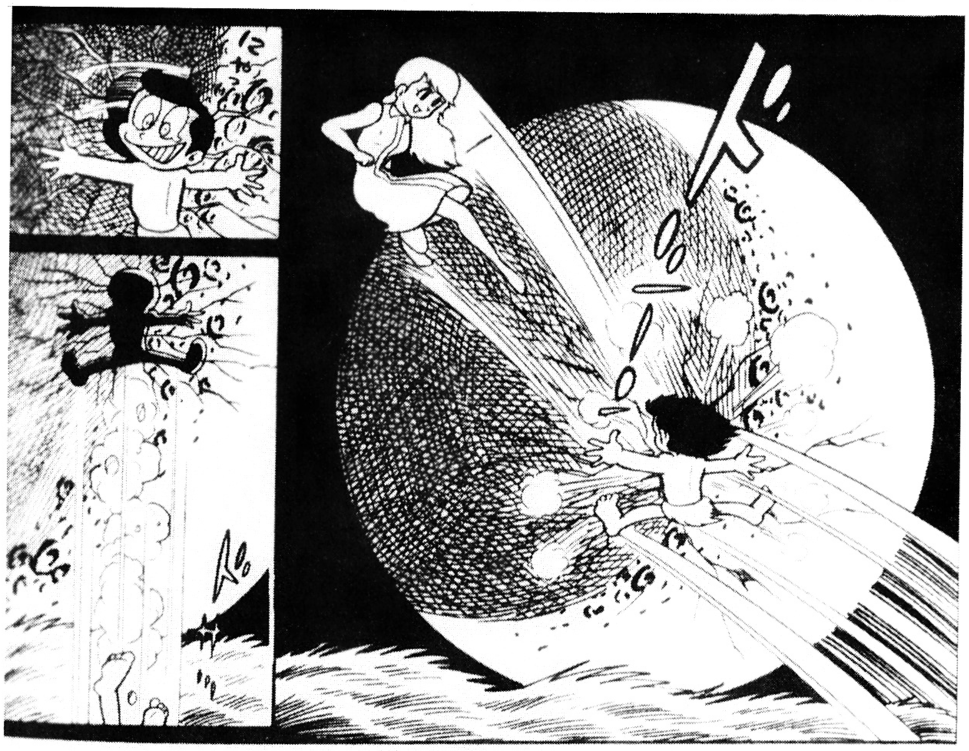
鬼（朝日ソノラマ S46 A5判）〈永井豪SF傑作集②〉（講談社 S53）●「週刊少年マガジン」S45年1月1日号掲載

思い出のK君〈永井豪SF傑作集⑧〉（講談社 S58）



悪馬尻菊の助（あばしり一家）

「COM」(S43年4月号)に発表された『ふぁんたじいわらうどバン』は豪ちゃんの存在を初めて読者に印象づけた記念碑的作品。パロディの原型『ファンタジーワールドジュン』(石森章太郎)は、当時のマンガ少年たちのバイブルで、それをいとも軽々とパロッた豪ちゃんの才能はこの頃から輝いていた



自宅にあるオモチャ箱(箪笥)。中でも友人のSFXマン、グレッグ・ジーンからプレゼントされたミニチュアは宝物



『魔王ダンテ』から『デビルマン』への道

――最初ギャグで出発したというのは、ギャグの方が描きやすいみたいなことで?

豪 ええ、そうですね。あの、こういっては何ですが、当時アシスタントをしていた石森章太郎先生のところでは、とても原稿を描いている暇というのはありませんで、とにかく画がラクなものでないと描けないと思いまして、ギャグに無理やり転向したんです。それまでギャグは勉強してなかったけど、ただ映画は好きで、喜劇映画は山ほど観てましたから。ほとんど洋画ですけど。その影響で、日本のギャグマンガのノウハウと全然違うことをやっちゃったと思うんですよね。それがかえって功を奏したというか。

――すると、その前に自分がマンガ家となって描こうとしていた作品というのは、どういうイメージでしたか?

豪 とにかくSF志向だったんですけれど、『デビルマン』とか『手天童子』みたいなものを描こうとは別に思ってなくて、どちらかというと、明るいドンパチを考えてたんです。

――スペース・オペラみたいな?

豪 そうですね。「スター・ウォーズ」志向とかね。もちろん「スター・ウォーズ」のない頃ですけど、そういった方向をやりたいと思ってました。

――それじゃ特に悪魔的なものとかは…。

豪 ただ何となく怪物が好きというのが根本にありまして(笑)、ギャグをずっとやらされて飽きがきたときに「ぼくらマガジン」(講談社)から「何でも好きなものをやっていい」といわれたものですから。「じゃあ怪物だったらいいや」と――その時はもうメッチャクチャに忙しくて、怪物だったら大ゴマ取れるんじゃないか(笑)、そのへんの下心も若干あって。それが『魔王ダンテ』。三十ページを、見開きばかりでバババババッて終わらせたりとか、メチャクチャやったんですけど(笑)。それが結構評判良くて。それを見た東映動画のプロデューサーの人が、TVアニメにしたいといってきたんです。キャラクターが怖すぎるから、TV用にもう少しおとなしくしてくれというんで、描き直して局へ行ったら、「主人公がいない、これは敵だろう」といわれて(笑)。もっとスーパー・ヒーローとか、そういうものに近い、アメコミ風にキャラクターを描き直して作ったのが『デビルマン』だったんです。

あれは、TV企画が先行してたわけです。TV用の基本設定を作って、脚本の辻真先さんに、これこれこういうストーリーですよと打合わせをして、あとシナリオはおまかせしますって預けたんです。そしたら今度は、自分も連載しなければいけないことになって。当時「少年マガジン」で『オモライくん』をやっていたんですが、それを無理やり終えて『デビルマン』を入れたんですよ。

当初はTVアニメに沿っていこうと思ってたんですけど、描きだしたら、どんどんのめり込むタイプなので、あっという間に違うものになってしまった(笑)。

――人間と、何か別のものが合体するみたいなパターンがお好きなんですか?

豪 その方法が、敵なんかを一番沢山作りだせていいだろうな、ぐらいの気持ちで大して深く考えてなかったんです。それがだんだん、描いていくうちに理屈を通さなければならなくなる(笑)。というか、ぼくはギャグをやってたせいなのか、先を考えるとつまんなくなっちゃう。だから最初はね、何も考えてないです。まとめてレールを敷いてから描くと、自分で飽きちゃうんですよね。作品を描く上で義務感がでてくるんですよ、ここをこうして、ここで盛り上げてとか、そういう計画的にやるってことができないタイプなんです。先がわからない方が、自分で面白いわけです。もともとマンガを描くことが好きだったから、

オモライくん①~③(朝日ソノラマ S55)
おれのロリータ〈ぼくたちドーテー隊〉(徳間書店 S60)
女賭博師がゆく〈バクラッ教室〉(双葉社 S50)

か

快傑ウルトラスーパーデラックスマン〈永井豪SF傑作集④〉(講談社 S53)
快ケツ婦警さん〈ぼくたちドーテー隊〉(徳間書店 S60)
会心作〈豪ちゃん爆発8秒前〉(広済堂 S52)
鏡の中の宇宙〈永井豪SF傑作集⑥〉(講談社 S54)
ガクエン退屈男①②(朝日ソノラマ S60 B6判)
学園番外地①② 共作:石川賢(少年画報社 S45~)
ガリキュラろぼちゃ―ド・キーン〈永井豪SF傑作集⑥〉(講談社 S54)
ガリベン〈なんでもチイコ〉(朝日ソノラマ S49)
ガルラ(朝日ソノラマ S57)

き

キッカイくん①~⑥(朝日ソノラマ S48)
キッカイ対オモライ〈永井豪ギャグ傑作集②〉(講談社 S54)
キックちゃん〈ハレンチ学園⑥〉(集英社 S45)
きまぐれ先生〈ハレンチ学園⑥〉(集英社 S45)
キャプテンパースト〈永井豪SF傑作集⑤〉(講談社 S53)
吸血鬼狩り〈鬼〉(朝日ソノラマ S46 A5判)〈永井豪SF傑作集②〉(講談社 S53)〈バイオレンスジャック⑥〉(講談社 S60 B6判)
●「別冊少年マガジン」S45年4月号掲載
キューティーハニー(秋田書店 S60 B6判)
霧の扉シリーズ
霧の扉〈永井豪SF傑作集①〉(講談社 S53)
赤いチャンチャンコ〈永井豪傑作選③〉(朝日ソノラマ S49)
ふりむいた私〈永井豪傑作選③〉(朝日ソノラマ S49)
キングボンバ①②(小学館 S53)全一巻(大都社 S61 B6判)

く

くずれる〈ズバ蛮③〉(朝日ソノラマ S47)〈永井豪SF傑作集①〉(講談社 S53)
グッバイボーイ 原作:高円寺博〈ぼくたちドーテー隊〉(徳間書店 S60)
グレート・マジンガー①②(立風書房 S55 B



「ぼくにはお坊さんの守護霊がついてて、豪傑タイプで弁慶みたいな。その人が守ってくれるんです。小鬼なんかは握りつぶしてくれたんですけど、だんだん鬼も大きくなって…」

「現実か夢かわからないような夢を沢山見ます。暗い山道を歩いてるんですけど、やけに道が黒いなあと思ってると足下に東京の夜景がわん曲した形であってね、ここは1ランク違う次元なんだと、あわてて逃げだしたり…」



描いてる瞬間が面白ければいいというか、同時体験として描いてるときに楽しみたいわけです。

——そうすると、伏線というようなことはあまり考えない。

豪　考えないし、自然に出てくるのをあとから利用したりとか。例えば、ストーリーを押し進めるのがつらくなったから画面を切り変えて、関係ない登場人物をだしてしまえって、苦しまぎれにポッとだすとするでしょ。この人物はもう使わないだろうなあ、なんて思ってると、あとですごい重要な役割を持ってでてきたりする。自分ではそのつもりじゃないのに、それが伏線になって生きてきたりするんですよね。終ってみると、何となくしっかり計算されてるなって、自分でもびっくりするんだけれど(笑)。

——ということは、長さがどれくらいになるかってことも全然…、連載何回ぐらい、何年続くかとか。

豪　わからないですね。それが一番読めないんです。「あとの準備があるから何回か決めて下さい」っていわれて、「んー」と考えて、適当に決めるんだけど、たいてい足らなくなるんですよね(笑)。

——キャラクターが勝手に動いてる感じになるわけですか?

豪　そうですね。登場人物にのめり込んでるから、すぐに自分がその気になっちゃうんですよ。自分だったらここで死にたくないと頑張るとか、そんな意気込みですからね(笑)。悪人になったり女になったり、忙しいんです。

アイデアよりも画の方に苦しんでる

キャラクターに感情移入する性格は、幼い頃の"ごっこ"遊びからきているようです。それは五十八ページから六十五ページの自筆年譜コミックスに詳しいですから、そちらを参照して下さい。

——その頃の遊びを、長じて今度はマンガで、紙の上でやっているわけですね。

豪　ええ、そうです。だからぼくは、アイデアには比較的苦しまないんです。描けばでてくるという。でないときは、これは調子悪いからって、パッとやめちゃう。無理してやるときもありますけど、なるべくノッたときにワーッてやってしまう。

それでぼくの場合、苦労したのはむしろ画ですね。画は、あの、そんなに才能があった

6判）（大都社 S61 B6判）
グレンダイザー①②（立風書房 S56 B6判）
全一巻（大都市 S61 B6判）
黒の獅士①~④（朝日ソノラマ S59）

け

ケダマン①~③（朝日ソノラマ S48）
けっこう仮面①~⑤（集英社 S51~）

こ

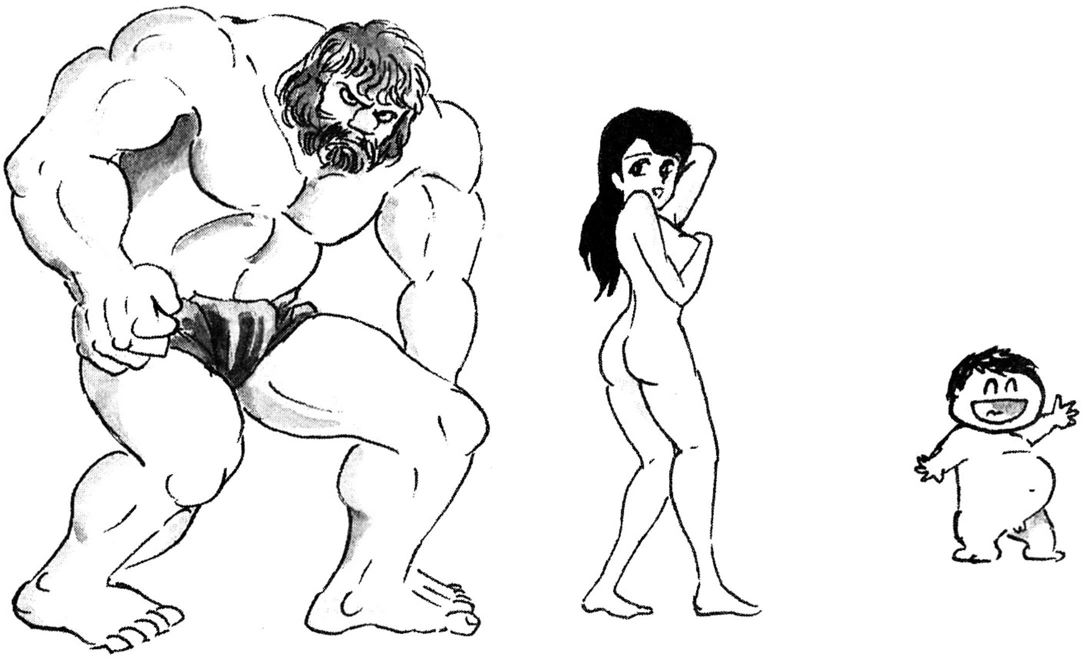
ごうけつミカちゃん〈パンジーちゃん〉（若木書房 S44）〈バクラツ教室〉（双葉社 S50）
荒野の剣マン〈じん太郎三度笠〉（集英社 S46）
ゴエモン先生①②（集英社 S55 文庫判）
GO!豪!ナンセンス〈豪ちゃん爆発8秒前〉（広済堂 S52）
ゴッドマジンガー①~④（小学館 S59 A5判）
こまっチャーム 共作:小山田つとむ〈スイートちゃん〉（若木書房 S45）
ゴロンボ探偵社〈ビバ!女子プロレス〉（集英社 S55）〈超少女UFO〉（朝日ソノラマ S59）
混乱列島 原作:筒井康隆（朝日ソノラマ S52）

さ

さすらい学徒 共作:石川賢〈ハレンチ学園⑨〉（集英社 S46）
三四郎〈永井豪傑作選②〉（朝日ソノラマ S49）
三匹の剣マン〈じん太郎三度笠〉（集英社 S46）

し

都市M1〈永井豪SF傑作集⑥〉（講談社 S54）
忍がゆく〈永井豪傑作選②〉（朝日ソノラマ S49）
シャーヤッコ・ホームズ（朝日ソノラマ S59）〈永井豪ギャグ傑作集①〉（講談社 S54）
シャルケン画伯 原作:レ・ファニ〈永井豪SF傑作集①〉（講談社 S53）〈バイオレンスジャック⑥〉（講談社 S60 B6判）
手天童子①~⑤（講談社 S60 B6判）●「週刊少年マガジン」S51年9月5日号~53年4月30日号
女子プロレス2001年〈ぼくたちドーテー隊〉（徳間書店 S60）
白雪姫〈あばしり一家⑮〉（秋田書店 S48）〈永井豪SF傑作集⑦〉（講談社 S54）
白い世界の怪物〈永井豪傑作選③〉（朝日ソノラマ S49）〈豪ちゃん爆発8秒前〉（広済堂 S52）〈永井豪SF傑作集②〉（講談社 S53）
新選組そまつ記〈永井豪傑作選②〉（朝日ソノ



「前世でね、ぼくは女性だったような気がするんです。それと、ものすごい大男だったような記憶もあるんです。えらく乱暴な大男でね。だからわりと女性を尊敬してるところがありますね」

とは思わない。今でも苦しんでる部分がかなりあります。

――画を描く場合には、頭の中に何かイメージがあって、それを形にしようと思うのか、それとも描きながら、いろいろくっつけたりはずしたりしてデザインしていくんですか?

豪 ぼくの頭の中では、ほとんど映画みたいに動いてるんです。イメージが。それをどうやってコマにはめようかというのが苦しいんですよね。あのイメージのままパーッとコマが流れてくれたらいいのになと、いつも思っている。とにかく、映像が見えちゃうんです。眠る前から夢を見ちゃうんですよね。

――眠る前というと?

豪 例えば、瞬間こう目を閉じるだけで、自分の全然考えてもいないようないろんなものが見えちゃうんです。ポンポンポンポンと映像が動いてね。で、意識のあるときは、そこは見たくないからもっとこちらを見たいと思うと、見たい方の映像がグーッときたりするんですよね。まっとうな人間じゃないですね、ぼくは(笑)。

――そうすると、わりと白昼夢にひたるのが多い…。

豪 もうしょっちゅうです(笑)。それが一番楽しい。

――寝ているとき見る夢も、同じですか?

豪 寝てるときの夢はすごいですよ。本当にリアルでね。大変な思いします(笑)。

――それは子供のときからですか?

豪 そうですね。ぼくはとにかく、鬼とかそういうの全然知らないうちから、鬼の夢を見てますから。

――何か子供の頃の環境に怖いものとか、怪物的なものが…?

豪 んー、わかんないけど、小さい頃は臆病だったらしいんですけどね。

――暗いところが怖いとか。

豪 そうじゃなくて、遠くの方に車が一台見えると、もう道を渡らない。親がいくらせかしても、車が通過するまで絶対に動かないとかね(笑)。でも、小学校の半ばからはそういうのはなくなって、わりと無謀なことも平気でやるようになったんです。

――そういうのは想像力の過敏症とでもいうのでしょうね。ところで、描いていて怖いということはないですか?

豪 怖いというより楽しんで描いてるんです。ただ、こういう悪魔みたいなのをやると必ず祟りがくるでしょ。『デビルマン』のときとか、その前にも『鬼』という短篇を描いたんですけど、そのときも高熱だして、ぶっ倒れたりしたんです。だいたいぼくは、本当に丈夫でね。中学生の頃から学生服の下はランニングシャツ一枚で走りまわってましたから。風邪なんかひかない人間だと思ってたのに、そういう作品を描くと必ず倒れるんですよね。

とにかく、『デビルマン』とか『手天童子』とか、ああいうものを描くと、波動がくるんですよね。バイブレーションがビリビリビリ、と背中が痛くなってくる…。

――やっぱり、そのときに登場人物に成りきってるという、その成りきり方が普通のギャグマンガのキャラクターよりも、特別なエネルギーを必要とするから、何か…。

豪 そうですね。呼び込んじゃうみたいです。気持ちを霊的な世界に置こうとするから。

嘘でもリアリティーがあればいい

――マンガでは、永井さんが初めてですよね、鬼のマンガというのは。

豪 かわいい鬼っていうのはありましたけど、リアルに描いたのはなかったですね。鬼って、やっぱり描かれたくないんですよね。別に悪く描くわけじゃないのにと思ってても、絶対邪魔をするんです。それは悪魔を描いてても同じですけど、存在してることを知られたくないという気持ちが強いんですね。

――体調が良くなるマンガってありませんか

ラマ S49)

じん太郎三度笠(集英社 S46)〈パクラッ教室〉(双葉社 S50)

シンデレラ騎士①②(朝日ソノラマ S58)

心霊探偵オカルト団①~④ 原作・高円寺博、共作・石川賢(秋田書店 S51)

す

スイートちゃん 共作・野口太陽、小山田つとむ(若木書房 S45)

凄ノ王伝説①~⑤(角川書店 S60 B6判) ●『凄ノ王』のタイトルで「週刊少年マガジン」にS54年30号より55年17号まで連載。その続編にあたる『凄ノ王伝説・火神子』は「バラエティ」S60年6月号より61年3月号に連載された。

ススムちゃん大ショック〈鬼〉(朝日ソノラマ S46 A5判)〈永井豪傑作選③〉(朝日ソノラマ S49)〈永井豪SF傑作集①〉(講談社 S50、徳間文庫 S56) ●「週刊少年マガジン」S46年3月7日号掲載

スーパーにゃん〈まぼろしパンティ③〉(集英社 S57)

ズバ蛮①②(朝日ソノラマ S60 B6判)

スペオペ宙学①~③(秋田書店 S54)〈永井豪SF傑作集⑦〉(講談社 S54)〈まいるど7③〉(秋田書店 S56)

スペース騎士〈永井豪SF傑作集④〉(講談社 S53)



雪丸(右)とジャンヌ(ズバ蛮)。ここにも鬼(百鬼一族)が登場する

スポコンくん〈なんでもチイコ〉(朝日ソノラマ S49)〈永井豪ギャグ傑作集③〉(講談社 S54)

せ

00学園学期末スパイ大作戦〈永井豪SF傑作集⑦〉(講談社 S54)

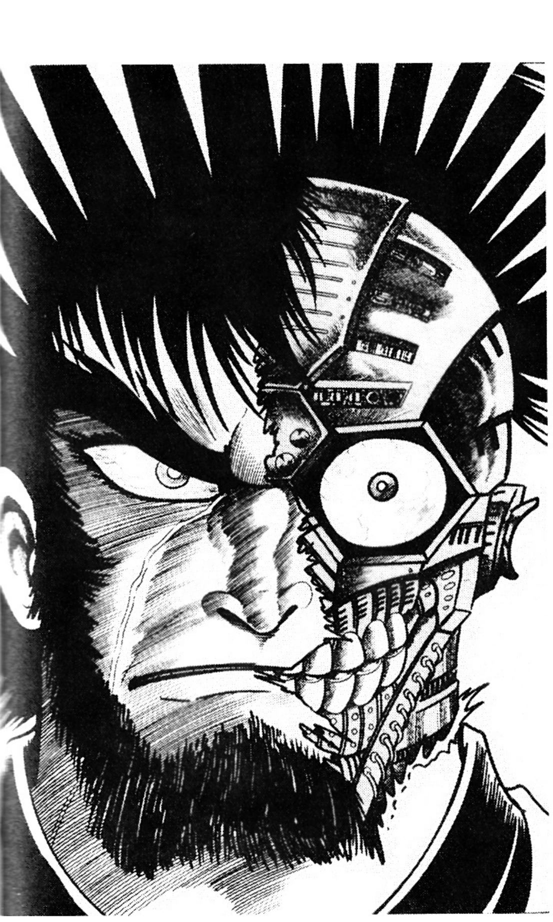
た

大仮面〈永井豪傑作選①〉(朝日ソノラマ S49)〈永井豪SF傑作集④〉(講談社 S53)

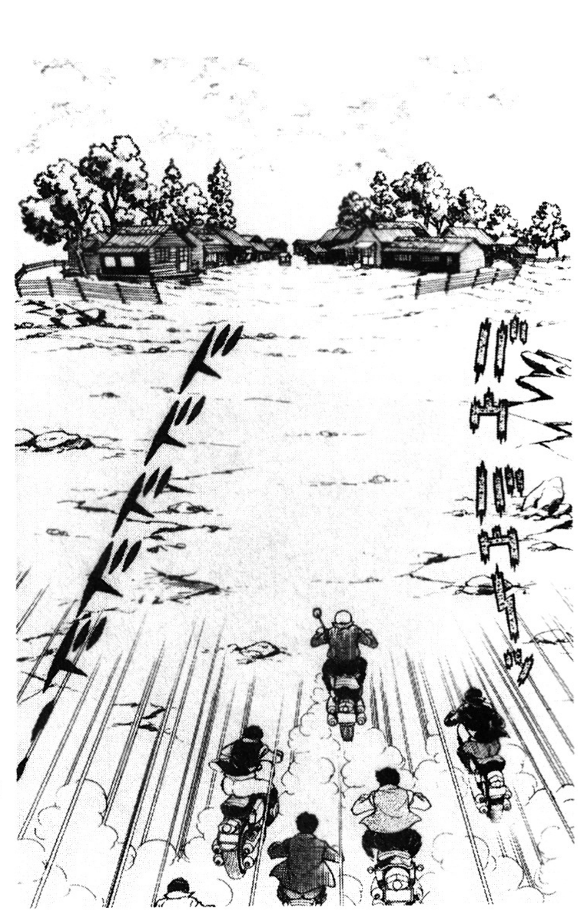
ダイガク無籍人〈ビバ!女子プロレス〉(集英社 S55)

第三時中華大戦〈永井豪SF傑作集⑥〉(講談社 S54)

大盗賊〈永井豪ギャグ傑作集②〉(講談社 S



すでに８年前に『ターミネーター』のパターンをやっていた。『黒の獅士』に登場する銅磨陣内（どうまじんない）は不死身の兵法者として設定され戦国時代を暴れまわる



『バイオレンスジャック』には10以上の作品の影響がみられる。中でも大きいのは黒沢明の作品だ。これは『七人の侍』を想起させる場面。黒沢フリークぶりがわかる

ね、天使を描くとか(笑)。

豪　天使とかは確かに疲れないですね。とにかく激しいものを描くとすごく疲れます。『バイオレンスジャック』でも、殺してるシーンとかを描くと、すごーく消耗するんですよ。

――ギャグのときはどうですか?

豪　ギャグだと全然疲れないですね。もう三倍ぐらいのスピードで描けます。『デビルマン』のときなんか、週刊誌を四誌をやってたんですけど、片っ端からおりて、一本に絞ったんです。それでも、目一杯忙しくて、最終回なんかもうヘトヘトで、一ページ描いてはのたうちまわって、ハアハア(笑)。邪魔しようとしているエネルギーと戦っている感じがしましたねぇ。ギャグを描いてたときなんか、週刊誌五本までやれましたから。

――オカルト的なことって、当然宗教にも関連してくるわけですが、キリスト教とか仏教とか、正面から考えたことありますか?

豪　特に深く考えたことはないです。『デビルマン』なんかでも、聖書の雰囲気を使ったりしてますけど、ちゃんと読んでやってるわけじゃなくて、大体こんなことだろうと、いいかげんもいいとこなんです。黙示録の部分をちょこちょこっと読んでみたりとかね。でも、それを下敷きにしてるとかではなくて、むしろ後追いみたいな感じですね。

――イマジネーションが先にあって、それを補強するために、アリバイ的に使う…。

豪　そうですね。『手天童子』で母親が精神病になりますよね。あの病気なんかも実際にあるかどうかわからなくて、先に自分で作っちゃってから、担当さんに調べてもらったら、「なんだ、そっくりなのがあるじゃないか。じゃあこれでいきましょう」って。

――マンガ家の人って、たいていそうですよね。でも、読者は逆で、調べに調べたあげくにやっていると思っている。

豪　逆なんですよね。ぼくはだから、最初からデタラメをやってるというのが念頭にあります。「マンガなんて面白ければそれでいいじゃないか、ウソでもリアリティーがあればそれでいい」。嘘のリアリティーってものがあればいいと思うんですよね。映画の中でも「これはウソだい」と明らかに思っちゃうシーンがでたらシラケるし。『ランボー』とかでも、メチャクチャだけれどね、あれだけ体を張って、崖から飛び降りたりなんかしてたら、何となく一人であそこまでやれるじゃないか、見てる瞬間は納得できる。そういうリアリティーが欲しいと思うんです。だから、それが現実に嘘かどうかは知ったこっちゃない。「ウソだ」といわれたら、「ええウソですよ、文句あるか」ってね(笑)。

――居直っちゃう(笑)。

現実生活よりも描いてる方が充実してる

――描いてるときの充実感と、他人の作品を読んで楽しんでるときとどちらが…。

豪　両方好きです。描いてるときも、体力があってノッてるときは本当に楽しいっていうか面白いんです。生きてるなって充実感があります。現実生活ではそういうのはあまり求められないというか。

――例えば、恋愛に夢中になるとか。

豪　あんまりね…(笑)。どこか冷めてるというか、現実生活はわりとおろそかなんです。いつもうちの奥さんにいわれるのは「あなたはここにいてもここにいない。頭がどっかへ行ってる」と。例えば、いろんなスケジュールとかを説明されても、全然覚えていない。だから「エッ、初めて聞いた」っていうと、怒るんですよね。「この件に関しては何度説明したことか」っていわれるんですけど全然記憶にないんです。嘘でも何でもなくて、別に忘れようとしてるわけでもないんだけど、日常的なことは覚えてない。やっぱりそのとき、どこか異次元の世界を求めて意識がさ迷っている。

54)
タイマチ先生〈パンジーちゃん〉(若木書房　S44)

ち

チェンジ!さぶ(朝日ソノラマ　S56)
ちびっこ刑事ちゃん〈ヤダモン〉(若木書房　S45)
チャンクン〈ハレンチ学園⑧〉(集英社　S46)
超少女UFO(朝日ソノラマ　S59)
超マン①②(集英社　S54)

つ

翼の人(翼の人々)原作:団龍彦(角川書店　S61　B6判)

て

鉄戦士ムサシ①②(朝日ソノラマ　S58)
鉄の処女JUN(朝日ソノラマ　S59)
デビルマン①〜③(講談社　S58　B6判)●「週刊少年マガジン」S47年6月11日号〜48年6月24日号
新デビルマン　原作:辻真先(講談社　S56)〈永井豪SF傑作集⑦〉(講談社　S54)
電撃四郎イナズマ大作戦〈ヤダモン〉(若木書房　S45)
電送人バルバー〈永井豪SF傑作集⑤〉(講談社　S53)
展覧会の絵〈豪ちゃん爆発8秒前〉(広済堂　S52)

と

ドリーマン〈永井豪SF傑作集③〉(講談社　S53)
ドロロンえん魔くんシリーズ
ドロロンえん魔くん①②(朝日ソノラマ　S60　B6判)
炎魔地獄〈ドロロンえん魔くん②〉(朝日ソノラマ　S60　B6判)
DON〈永井豪SF傑作集⑧〉(講談社　S58)
どんがら三銃士〈キングボンバ②〉(小学館　S53)
ドンケツ王〈永井豪傑作選①〉(朝日ソノラマ



柳生十兵衛(ハレンチ学園)。丸ゴシにらちされて危うし…懐しの場面



著者近影。公私にわたってエンタテイナーの豪ちゃん。池袋某デパートの売り子さんも笑いをこらえるのに必死だったとか…

『バイオレンスジャック』を自己分析してみる

——作品を描く場合、刺激を受けたりするのは映画とかが一番多いですか?

豪　たぶんあると思うんですけど、観る時点では気にしてないんです。内容に没入してしまって、分析的な見方ができませんから。それと、何かを見てそれから取ろうとすると盗作っぽくなっちゃうから。なるべく沢山見てれば、その中から自然にでてきたときは、いろんなものがミックスされてるから、もう自分のものになってるんですよね。

最近、過去の作品だから冷静に分析できるんですが、『バイオレンスジャック』に〝スラム街編〟てあるんです。描いてるときはオリジナルだと思って描いてるんですけどね、今頃になって分析してみると、十ぐらいの作品の影響を受けてるなって。例えば、基本的な設定で、戦国時代的な状況を作りたかったのが、白土三平の『忍者武芸帳』だった。キャラクター・イメージで「御子神の丈吉」って原田芳雄が映画の『無宿人御子神の丈吉』シリーズ(東映)でやった役がすごく無口で野生味が強くてね、この雰囲気がいいなとか。それから、プロレスのアンドレ・ザ・ジャイアントの体格をいただこうとかさ。キャラクターだけで『コナン』から何から全部入ってきて、その上で黒沢明の『用心棒』の設定を混ぜて、『七人の侍』も入るんじゃないかとかね。そうやって数えてったら、一つの作品に十ぐらいの要素がワーっと入ってて、そして自分流に洗ってでてくるような気がするんです。それは意識してやってるんじゃなくて、もう自然なんですよね。そのとき、机に向ってたときに浮かんでくることを描いてるだけ。変に意識すると、「これ盗作じゃないか」ヒヤリ、なんて筆が止まったりして(笑)、描けなくなったりするんじゃないかと思う。でもその代わり、もうすごい量の映画を観たり、一所懸命読書したり。やっぱりマンガより小説の方が多いですね。マンガ家がマンガから吸収して描いてもよくないんじゃないかと思ってます(笑)。それから、画集とか写真集がとにかく好きです。その一枚からイメージが湧くことも多いですね。ファンタスティックな絵とか、その一枚絵から特殊なストーリーや設定が浮かぶことはありますね。

——ビデオ・ソフトも沢山お持ちですが、ジャンルでいうと…?

豪　SFとホラーが大半を占めている(笑)。本当いうと、怪物でも見苦しいのは好きじゃないんですよ。みにくくても格好いい方が好きなんです。青い顔してズルズルにむけたゾンビがノロノロ歩くのを見ると腹が立ってくる(笑)。「うるせぇなぁ」と思って。うっとうしい感じがするんですよ。そういうのより、やっぱり〝凄み〟でね、これは太刀打ちできないって感じで、ズンズンくるゴジラみたいなのが、はるかに好きです。

——そうですね、スプラッタ映画なんかの怪物というと、せいぜい殺人鬼ぐらいの、変質者みたいなスケールですものね。

豪　『ターミネーター』を観たとき、ぼくの『黒の獅士』に出てくる忍者そっくりだなと思ったんだけど。人間大でも、あのぐらい怪物性があれば好きなんですね。

——『ターミネーター』は、まわりを全然相手にしてないですもんね。目標に黙ってまっすぐ行く。他の連中は居ても居なくても、撃たれようが全然気にしない。

豪　ああいう感覚は好きですね。狙いがはっきりしてるのはとにかく好き。

——そうすると、強くなりたいって願望は権力志向とは違うんですよね。

豪　ええ、権力はあっても構わないんです。その権力で弱い奴をやっつけるのが許せない。強い奴が強い奴をやっつけるならいいって気がするけど、圧倒的に力の差があるのにジク

S49〉

ね

ネッけつ団〈永井豪傑作選①〉(朝日ソノラマ S49)

の

のらねこラブちゃん〈パンジーちゃん〉(若木書房 S44)

は

バイオレンスジャック①～⑥(講談社 S59～ B6判)●「週刊少年マガジン」S48年7月22日号～49年9月30日号、「月刊少年マガジン」S52年1月号～53年12月号

バイオレンスジャック①～⑨(日本文芸社 S59～ B6判)●「漫画ゴラク」S58年新年号より連載中

バクラツ教室(双葉社 S50)

ハナの三四郎〈永井豪傑作選②〉(朝日ソノラマ S49)

花平バズーカ①～⑩ 原作・小池一夫(集英社 S55～)

ハマグリどっせ～!①～③(双葉社 S53～)

〈チェンジ!さぶ〉(朝日ソノラマ S56)

バラバンバ①②(スコラ社 S59 B6判)

青春一番①② 原作・高円寺博(講談社 S56)

青春の雨〈ぼくたちドーテー隊〉(徳間書店 S60)

ハレンチ学園①～⑬(集英社 S44～)①～⑫(集英社 S51～ 文庫判)①②～(講談社 S61 B6判)〈こども漫画傑作集〉(筑摩書房 S45 A5判)

ハンサムくん〈パンジーちゃん〉(若木書房 S44)

パンジーちゃん(若木書房 S44)

ハンターくん〈ハレンチ学園⑥〉(集英社 S49)

ひ

ひどい巨塔〈永井豪ギャグ傑作集①〉(講談社 S54)

ビバ!女ターザン〈ビバ!女子プロレス〉(集英社 S55)

ヒバ!女子プロレス(集英社 S55)

百円美人〈永井豪ギャグ傑作集〉(講談社 S54)

超人間現わる〈永井豪SF傑作集③〉(講談社 S53)〈バイオレンスジャック⑥〉(講談社 S60 B6判)

氷壁の母〈永井豪ギャグ傑作集③〉(講談社 S54)

ふ

ファイティングパンツくん〈ハレンチ学園⑥〉



フェミニストの豪ちゃんですが、まさか２次元コンプレックスとは！　あの美人の奥サマも、やっぱり写真を見てから選んだのでしょうか？

ジクいじめたりとか、ああいうのは大嫌い！

——でも強い奴を作るのはなかなか大変で、だんだん神とか悪魔にまでいってしまう。

豪　そこまでエスカレートしないと結着がつかなくなってくる。だから人並みの強さっていうのはつまんないなと思ってるんですけど。『バイオレンスジャック』の設定にしても、人間よりもひとまわり、生物学的に上位のものがきたら面白いだろうというものなんです。人間同士だとバランスが拮抗するのが、それより一つグレードが上のものがポンと入ると、たちまち混乱する面白さですね。

精神は不滅だ。でも肉体にこだわるわけ

——永井さんの本名は「潔」ですよね。それを「豪」という逆の感じにしたのは。

豪　マンガの内容も含めて、徹底的に強いマンガ家になるんだという意味で、豪傑の豪を単純につけたんです。

——英語のGOというのも…？

豪　それは考えなかったですね。あくまで、豪傑の豪で。それは自分には一つの枷でもあるんです。こういう名前をつけたからには、〆切でも、どんなにつらくても頑張らなきゃいけないという。

——肉体っていうのは好きですか？

豪　肉体よりは精神の方が好きです。精神は不滅だと思ってますから。

——つまり、怪物が好きっていうのは、怪物の強さを自分で味わいたいという、破壊衝動というか。

豪　身につけられたら身につけたいなと。

——そこでその場合、モビルスーツとかリモコンとかじゃなくて、永井さんの場合は自分が悪魔と合体して強くなるみたいな。

豪　そうですね。ある程度、肉体に応えるような感覚がないと(笑)、その気になれないんじゃないですか。例えば『マジンガーZ』でも、リモコンで操縦するんじゃ自分でやるのと違うなって感じがして、ロボットの痛みも感じたいというつもりで乗り込んだんですよね。結局『マジンガーZ』にしても『デビルマン』にしても根は同じですね、そうなりたいという点では(笑)。

——やっぱり血や何かは流れた方がいいと…。

豪　ええ、生身の方がいいです。ロボットなのになんとか血をだそうかとか、血の感覚で油を流したり(笑)。そういう意味では、吸血鬼が一番好きですね。変身能力があって、しかも金髪の美女の血が吸える、これは最高にいい(笑)。

——なるほど、すると「お姫様を助ける」的な目的はどちらかというとどうでも…。

豪　それは二次的ですね。とにかくやっつけたいという(笑)。困ったもんで。

——出てくる女の子は中学生くらいでも、ちゃんと胸があるグラマー・タイプが多いですね。

豪　いや、それはこだわらないです。

——ロリコンとは違う。

豪　全然ちがう。どっちかというと、二次元コンプレックスですね。あの、平面フェチというか(笑)、現実の女性とかはね、なかなか好きにならなかった。面倒くさいてのもありますが、やっぱり現実に「あ、いいな」と思わないんです、わりと。あとで写真なんか見て「おっ、きれいじゃないか」とかね(笑)。

——あっそうか。写真に撮ってみないとわからない(笑)。

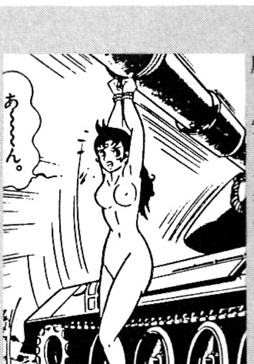
豪　困ったもんで(笑)。でも、平面だけど、何とか生命を吹き込めないか、すべての生理的要素を盛り込めたらいいなという願望が…。

——やっぱり、その生命というのは重要な…。

豪　ぼくの場合は、生きるということに対する執着がものすごく強い。死んだからといって、魂はまだ残れるんだってわかってるんだけど、それでも生身のボディに入っていたい。

——それはいわゆる、食欲とか性欲とか、肉体を通して得られる快感とかを維持したいということでしょうか？

(集英社　S45)
ファンタじい〈永井豪SF傑作集③〉(講談社　S53)
ふあんたじいわらうどバン〈まろ③〉(若木書店　S47)〈永井豪SF傑作集⑦〉(講談社　S54)



加羅見純(無頼・ザ・キッド)

風天忍法帳〈永井豪傑作選②〉(朝日ソノラマ　S49)
無頼・ザ・キッド①〜③(朝日ソノラマ　S61　B6判)
ブラボー!!先生〈パンジーちゃん〉(若木書房　S44)〈超少女UFO〉(朝日ソノラマ　S59)

へ

へんちんポコイダー①②(講談社　S52)

ほ

ボーイハンター〈なんでもチイコ〉(朝日ソノラマ　S49)
ほういん大子〈永井豪傑作選②〉(朝日ソノラマ　S49)
ぼくたちドーテー隊(徳間書店　S60)
炎の鷹①②(秋田書店　S53)

ま

まいるど7①〜③(秋田書店　S56〜)
魔王ダンテ①②(朝日ソノラマ　S59　B6判)
●「週刊ぼくらマガジン」S46年1月1日号〜5月31日号
マカロニちゃん〈まろ③〉(若木書房　S47)
馬子っこきん太①②(朝日ソノラマ　S47)
マジンガーZ①〜③(朝日ソノラマ　S60　B6判)
魔人戦車バルドス〈永井豪SF傑作集⑥〉(講談社　S54)〈バイオレンスジャック⑥〉(講談社　S60　B6判)
まぼろしパンティ①〜③　原作・高円寺博(集英社　S57)
真夜中の戦士①(講談社　S57)〈永井豪傑作選③〉(朝日ソノラマ　S49)〈永井豪SF傑作集③〉(講談社　S53)〈74日本SFベスト集成〉(徳間書店　S50、徳間文庫　S58)
まろ①〜③(若木書房　S47)　①②(朝日ソノラマ　S52　文庫判)

み

みがわりパンジーちゃん〈パンジーちゃん〉



「胸あきドレスの胸のところの、わずか1ミリの線にドキドキしてました」という豪ちゃんですが、現在と違って昔は、男の子が少女マンガを読むということが、すごく後ろめたく感じられ、勇気を必要とする時代でした

豪　よくわかんないですけどね。とにかく、生きてられる限りは生きてようと思ってるんです。何ん度か死ぬんじゃないかと思ったんですけど。そのときの恐怖感というより、淋しさみたいなものが嫌だったのと、ぼくが淋しがり屋なのもありますね。

——血液型は？

豪　O型です。O型って、生命に対する執着が強い。

かなり早熟でしたが女の子には免疫ゼロ

——かなり早熟なタイプでした？

豪　そうですね。そういうのに目覚めるのは早かったですよ。幼稚園ぐらいから、手塚先生のマンガの女の子とか、あと山川惣治の『少年王者』とか。『少年王者』は、顔は女の子と変わらない。かわいくて、きれいでね。それで、裸でしょ、マントヒヒなんかにいじめられたりして、見ててドキンドキンしてました(笑)。幼稚園に行ってるか行ってないかの頃ですよね。

——手塚マンガで特に好きな女の子は？

豪　『リボンの騎士』とかね。そういうのは少女マンガだから買ってもらえないでしょ。うちは兄弟、男ばかりだから。それで、何とか本屋で見ようと、いろいろ苦労しました。貸本屋で少年マンガ一冊借りて、そのスキにこうちょっと立読みするとかね(笑)。中学生ぐらいの男の子がね、エロ本なんかをこっそり見るような感覚で『リボンの騎士』を見てました(笑)。白いタイツにドキドキしながらね(笑)。

——それはやっぱり、自分がなりたいというよりも、対象としてでしょうね。

豪　そうですね。それで、リボンの騎士がずっと男の格好してでていて、一度ドレスを着るんですね。胸開きのドレスで、胸に、ほんの一ミリぐらいの線が入ってるのね。もうウワーっていう感じで(笑)。

——それでも色っぽさはありますもんねぇ、一ミリの線で。

豪　ほとんど病気(笑)。

——小さい頃、女性に対する免疫がなかったとか？

豪　免疫はなかったですね。だって男五人兄弟であろうはずがない(笑)。家業は洋服屋で男の職人ばかり、部屋のどこを見ても、殺伐もいいとこ(笑)。小学校のとき、たまに女の子の家に行くでしょう、フランス人形なんかあるとドキドキしちゃって、女の子が席をはずしたスキに、スカートをひっくり返して、そしたらボール紙しかなくてガックリ(笑)。

——アメコミというのはどうだったんですか。

豪　ほとんど知らなかったです。目にしたのは中学生ぐらいになってから。そんなには思い入れないですね。ただ、小さい頃から、女優なんかだと外人の方が好きでしたね。外人の方が目が大きくてマンガ的というのか、きれいだと思ってました。

——そうですね。現実ぽくないというか、マンガの美意識に近いというか。ただこう、きれいだと思っちゃうとあまり欲情しないってことありません？

豪　そんなこと全然ありませんよ(笑)。そこまで昇華しないんですね。きれいであればあるほどいい、何でも。現実というよりは絵的にね。例えば、変な風に思われるけど、悪魔のシレーヌがきれいとかね。造形的に人間と異形のものでもね、すごく美を見出せる。というか、怪物にでも美しさがあるじゃないかという。そういうの好きなんですよね。だから、必ずしも人間の形にはこだわってない…(笑)。ひどい話だなこれは。メチャクチャになってしまいましたね(笑)

かくしてロング・インタビューは幕を閉じるわけですが、永井作品のパワーと〝凄み〟がどこからきているのかを理解する一助に少しでもなっていれば幸いです。

藤田　尚

(若木書房　S44)

む

蟲〈永井豪SF傑作集⑧〉(講談社　S58)

目明しポリ吉〈じん太郎三度笠〉(集英社　S46)

や

野牛のさすらう国にて　原作・R・ブロック〈永井豪SF傑作集⑧〉(講談社　S53)

屋台王〈永井豪傑作選②〉(朝日ソノラマ　S49)

ヤダモン(若木書房　S45)

やっこらショ〈永井豪SF傑作集⑥〉(講談社　S54)〈永井豪傑作選①〉(朝日ソノラマ　S49)

ゆ

夕日の剣マン〈じん太郎三度笠〉(集英社　S46)

UFOから来た少年ムー〈永井豪SF傑作集⑧〉(講談社　S58)

夢少女レイ〈ぼくたちドーテー隊〉(徳間書店　S60)

ゆめの世界のマリちゃん〈パンジーちゃん〉(若木書房　S44)

よ

よくふか頭巾〈永井豪傑作選②〉(朝日ソノラマ　S49)

夜に来た鬼〈永井豪SF傑作集④〉(講談社　S53)

り

リョーコ少年団①②　共作・石川賢(少年画報社　S51、朝日ソノラマ　S52)

れ

レシーブちゃん〈パンジーちゃん〉(若木書房　S44)

れすらマン〈永井豪傑作選①〉(朝日ソノラマ　S49)

わ

若バカさま①②(秋田書店　S53)

わんぱく野郎のメカニック大戦争〈永井豪ギャグ傑作集②〉(講談社　S54)

※　※　※

〈注〉同じ作品で再編集されて出ている場合(例：「KCスペシャル」)新版の方を記載。SFオカルト作品に関しては掲載誌などのデータを付記してあります。

●INDEX

PAGE	TITLE	SIZE(天地×左右mm)	PAINTS	AGE	DATA
ポスター	手天童子（描き下し）	595×420	リキテックス	1986	白鳥美雪、平安時代の大江山山中　着色・天地和洋
1	手天童子＋デビルマン(描き下し)	380×270	ポスター・カラー、リキテックス	1986	着色・天地和洋
2-3	手天童子（描き下し）	380×540	ポスター・カラー	1986	着色・天地和洋
4-5	手天童子（描き下し）	360×515	リキテックス	1986	鬼獄曼荼羅　着色・風忍
6-7	手天童子（描き下し）	380×540	リキテックス	1986	暗黒寺の闘い其ノ壱　着色・風忍
8-9	手天童子（描き下し）	380×540	リキテックス	1986	暗黒寺の闘い其ノ弐　着色・風忍
11	手天童子	380×270	水彩	——	「週刊少年マガジン」掲載時扉
12	手天童子	365×230	モノクロに色指定	——	「週刊少年マガジン」掲載時扉　色指定・Pencil Studio
13	手天童子（描き下し）	380×270	ポスター・カラー、リキテックス	1986	大暗黒死夜邪来　着色・天地和洋
42-43	デビルマン	375×520	モノクロに色指定	——	「少年週刊マガジン」掲載時扉　色指定・Pencil Studio
44-45	デビルマン	380×520	リキテックス	1986	デビルマンvsシレーヌ　「獅子王」掲載
46	デビルマン	380×270	ポスター・カラー	1981	『新デビルマン』（講談社、新書版）表紙
48-49	デビルマン（描き下し）	375×540	ポスター・カラー、リキテックス	1986	シレーヌの最期　着色・天地和洋
50	デビルマン（描き下し）	380×270	ポスター・カラー	1986	サタン　着色・天地和洋
52-53	デビルマン	380×540	ポスター・カラー	1978	ハルマゲドン　『永井豪の世界』掲載
54-55	デビルマン（描き下し）	380×540	ポスター・カラー	1986	フィナーレ　着色・天地和洋
56	デビルマン	310×220	リキテックス	1977	『デビルマン①』(講談社漫画文庫)表紙
81	真幻魔大戦	340×270	ポスター・カラー	1982	ビッグ・プロローグ　『平井和正の幻魔宇宙』
82-83	バイオレンスジャック	350×470	ポスター・カラー	——	『バイオレンスジャック①』(日本文芸社)ドラゴン砦を逆襲
84 右上	バイオレンスジャック	380×230	水彩	——	「週刊少年マガジン」掲載時扉
84 左上	バイオレンスジャック	375×510	水彩	——	『バイオレンスジャック①』(講談社、B6判)関東スラム街編
84 左中	バイオレンスジャック	380×540	ポスター・カラー、水彩	——	同上　ヤクザに襲いかかるジャック
84 下	バイオレンスジャック	375×530	水彩	——	同上・東京滅亡編　荒野に出現した巨人
85	バイオレンスジャック	335×466	ポスター・カラー	——	『バイオレンスジャック⑦』(日本文芸社)海洋浮上都市に上陸
86-87	魔界水滸伝	325×450	ポスター・カラー	1984	『魔界水滸伝⑦』(角川書店)口絵、富士山噴火
88 右上	魔界水滸伝	340×270	ポスター・カラー、リキテックス	1982	同④巻表紙　クトゥルーの邪神がエジプトに出現
88 左上	魔界水滸伝	270×380	ポスター・カラー	1982	同③巻口絵　古き者たちの翼一族と土蜘蛛衆
88 左中上	魔界水滸伝	325×450	ポスター・カラー	1982	同④巻口絵　砂漠の上空を不気味な影が…
88 右下	魔界水滸伝	310×190	ポスター・カラー	1984	同⑧巻口絵　異次元に侵略された東京タワー
88 左中下	魔界水滸伝	300×245	ポスター・カラー、水彩	1984	同⑧巻表紙　魔の巣窟と化した東京
88 左下	魔界水滸伝	380×250	ポスター・カラー、リキテックス	1982	同②巻表紙　世界に跋扈するクトゥルーの邪神
89	魔界水滸伝	325×270	ポスター・カラー	1982	同③巻表紙　クトゥルーの邪神に対峙する翼一族の女王
90 右上	凄ノ王	380×270	ポスター・カラー	1985	『凄ノ王④』(講談社、新書判)表紙
90 左上	凄ノ王	380×270	ポスター・カラー、リキテックス	1985	同上表紙
90 左下	凄ノ王伝説	380×270	ポスター・カラー	1980	『凄ノ王伝説②』(角川書店、B6判)口絵
91 右上	凄ノ王伝説	365×265	ポスター・カラー	1985	『凄ノ王伝説①』(角川書店、B6判)口絵
91 左上	凄ノ王伝説	350×230	ポスター・カラー、リキテックス	1985	小説版『凄ノ王伝説⑦』(角川書店、永井泰宇著)口絵
91 右下	凄ノ王伝説	350×230	ポスター・カラー	1985	同上口絵
91 左下	凄ノ王伝説	350×230	ポスター・カラー	1985	同上口絵
93	凄ノ王伝説	350×230	ポスター・カラー、リキテックス	1985	同上口絵
94	デビルマン	410×520(全高×全幅mm)		1986	ゼノン　圓句昭浩製作
95	デビルマン	330×440		1985	デビルマン　圓句昭浩製作
96	デビルマン	380×570		1985	シレーヌ　圓句昭浩製作
96	デビルマン	140×80		1986	ジンメン　圓句昭浩製作

GO GO CHEERLEADERS：横田順彌（よこたじゅんや）SF作家、笠井潔（かさいきよし）評論家・作家、川又千秋（かわまたちあき）SF作家、高千穂遙（たかちほはるか）SF作家、高寺彰彦（たかでらあきひこ）マンガ家、藤田尚（ふじたしょう）マンガ&アニメ・レビュアー

構成／ダイナミックプロダクション　編集／中尾重晴、渡辺幸博　デザイン／Pencil Studio　撮影／井町等、中島秋則
SPECIAL THANKS：圓句昭浩、ボークス、月刊スターログ、角川書店、朝日ソノラマ、徳間書店

永井豪　鬼と悪魔のFANTASY

1986年5月17日　第1刷発行　定価1800円

著　者　永井豪
発行者　野間惟道
　　　　石森俊夫
編集発行　株式会社　コミックス
〒112東京都文京区音羽1-2-2　第2音羽ビル　TEL03(934)7261
発売発行　株式会社　講談社
〒112東京都文京区音羽2-12-21　TEL03(945)1111(大代表)
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大村製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社雑誌業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-06-176901-4(0)(コミ)



永井豪・鬼と悪魔の系譜

「光」対「闇」、「正」対「邪」――くり返し執拗に描かれる対立の図式は、すべての永井豪作品の根幹にかかわる普遍テーマでもあるのだ！

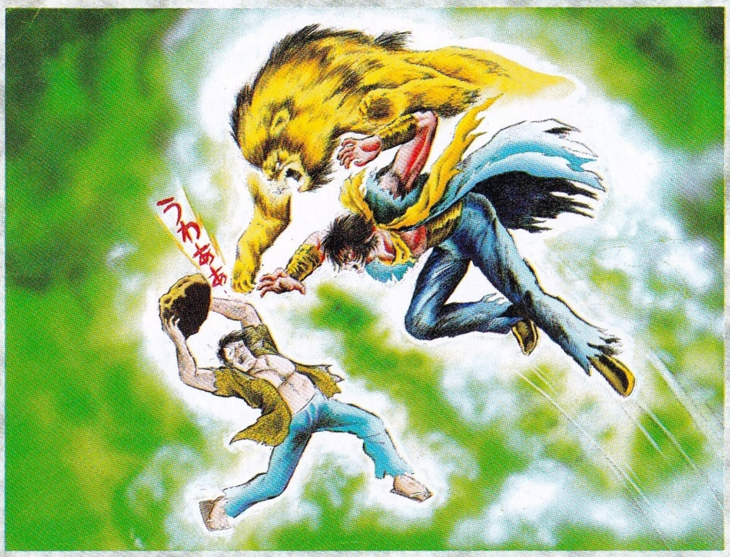

ズドドドドド
ドド

バイオレンスジャック
VIOLENCE JACK

関東地獄地震によって本土から切り離され、無法地帯と化した荒野に、野獣の肉体と強靱な精神力をもった巨人が現われた。その名もバイオレンスジャック。たくましく生きる孤児たちを助け、鬼畜のごとき人間どもを屠り、関東の覇王を目指すスラムキングと対決する…。少年誌から青年誌へ発表の場を移して一段とバイオレンス、エロティシズムは迫力を増し、他作品のキャラクターも次々と登場。永井豪ワールドの集大成！







うわあぁ、

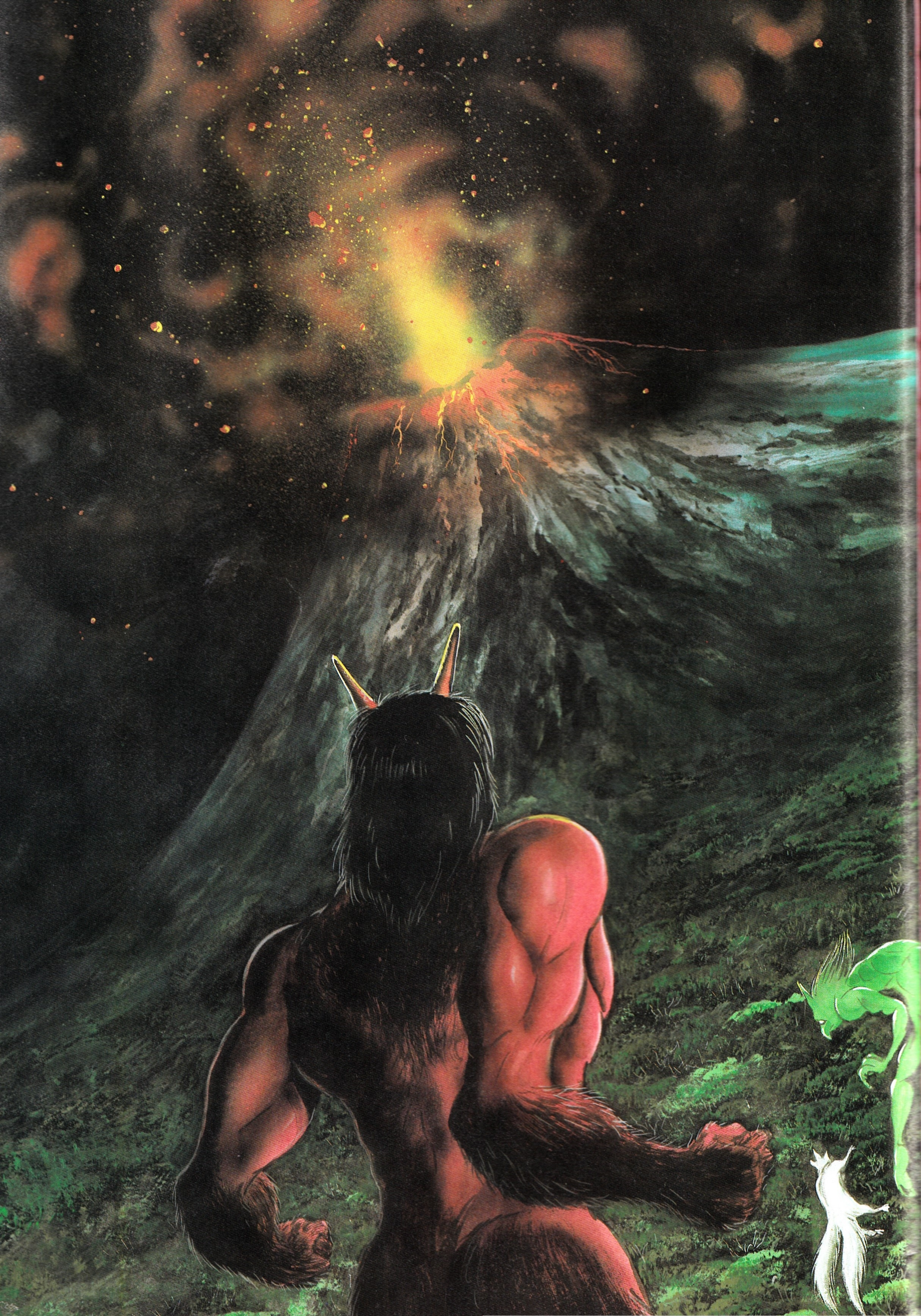


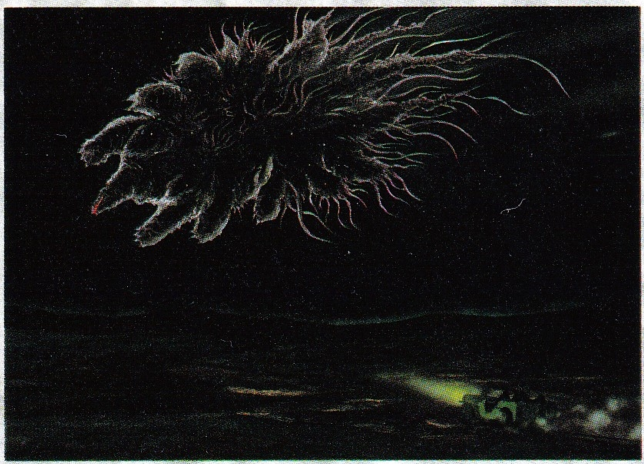


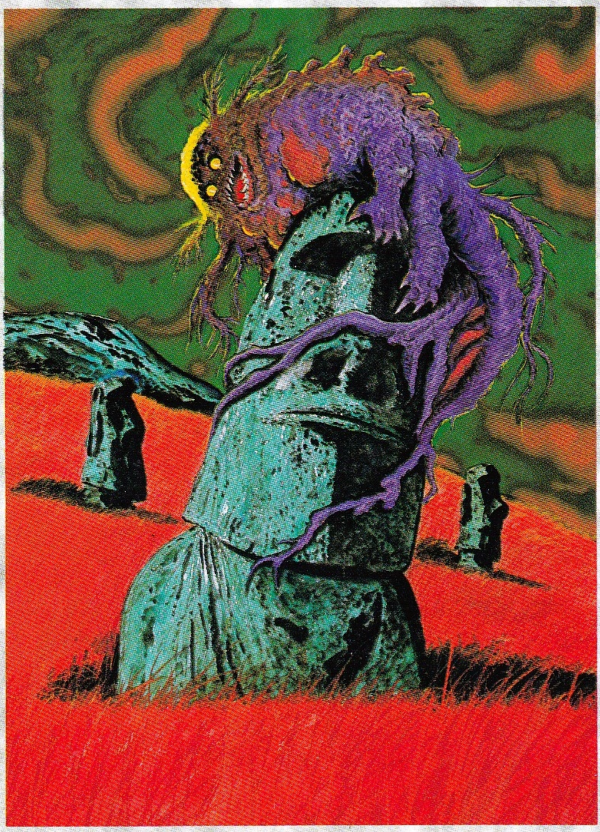
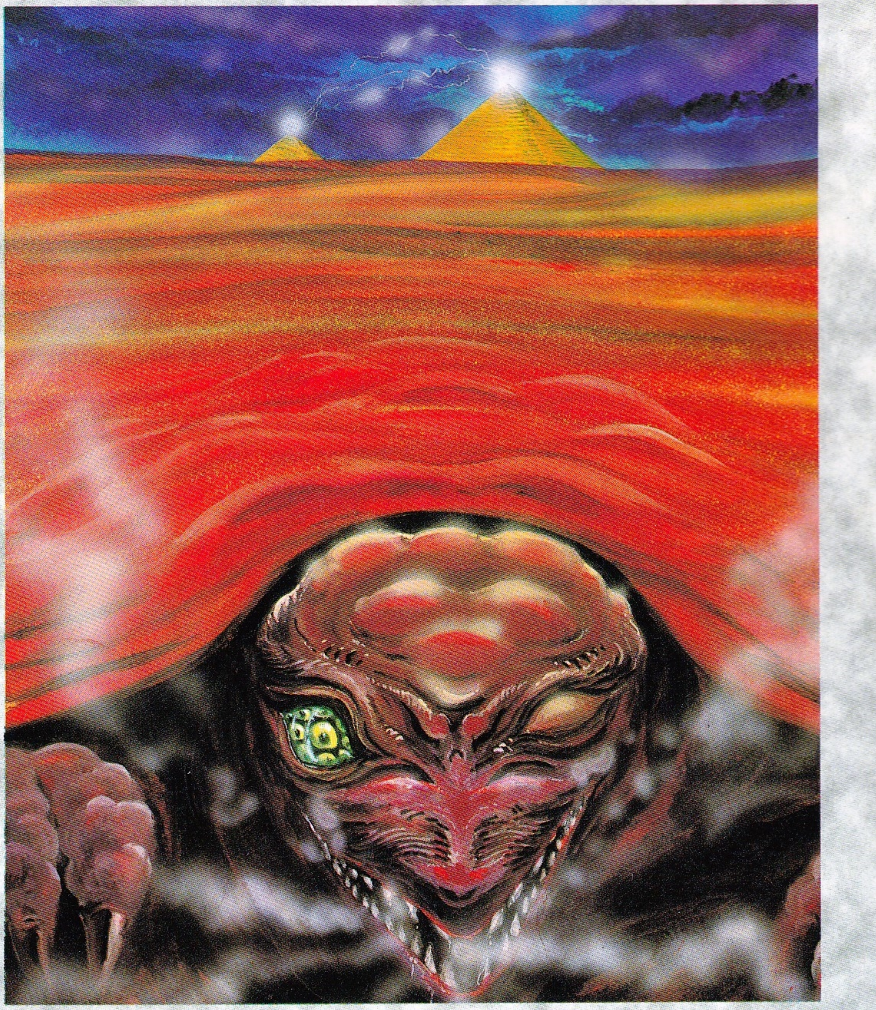




魔界水滸伝（栗本薫・原作）
クトゥルーの邪神と地球先住者（古き者たち）のハルマゲドンの闘いを壮大なスケールで描く





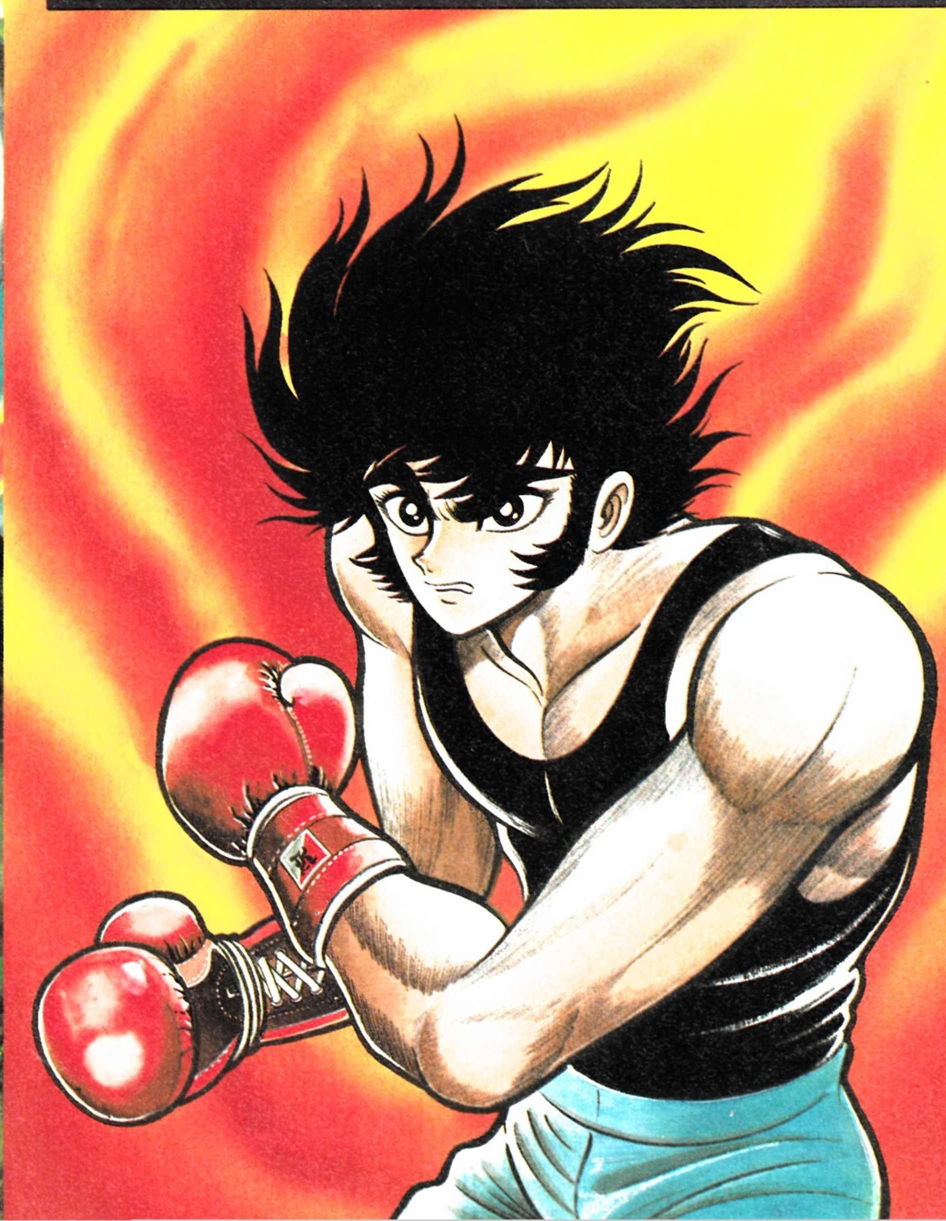





凄ノ王

平凡な少年朱紗真悟は、目の前で恋人雪代小百合を強姦され、怒りに燃えて超能力に目覚めた。真悟をめぐって、部団連合、暗黒組織不死団、ＣＩＡ超能力部隊、破壊王と名乗る超能力者瓜生麗、高天原人の転生美剣千草の攻防が続く。90
やがて、瓜生の策略で真悟の心は邪悪なものに満ち「魔」の通路となった。ついに恐るべき魔神、凄ノ王が出現！　…未完のまま終止符をうたれた物語は、小説版（永井豪原作、永井泰宇著）にひき継がれ、独自の展開をみせている














魔王ダンテ

悪魔の決起のときがきた。ヒマラヤの氷中に閉じ込められていた魔王ダンテはテレパシーで宇津木涼を呼び寄せ、その体を喰らった。地上ではサタニストが暗躍し、ついにダンテが甦ったが、その意識は涼のものだった。自分を人間だと信じる涼に魔将軍ゼノンが「お前はダンテだ。悪魔軍団を作って神を滅してくれ」と告げる。やがて涼は過去の記憶を取り戻す。悪魔は地球先住人類で、神こそが侵略者だったのだ。人間の魂の総体が神なのだ。涼=ダンテは立ち上がった








DEVILMAN 3D WORLD
モデル製作／圓久昭浩、撮影／井町等
XENON
ゼノン―大魔王



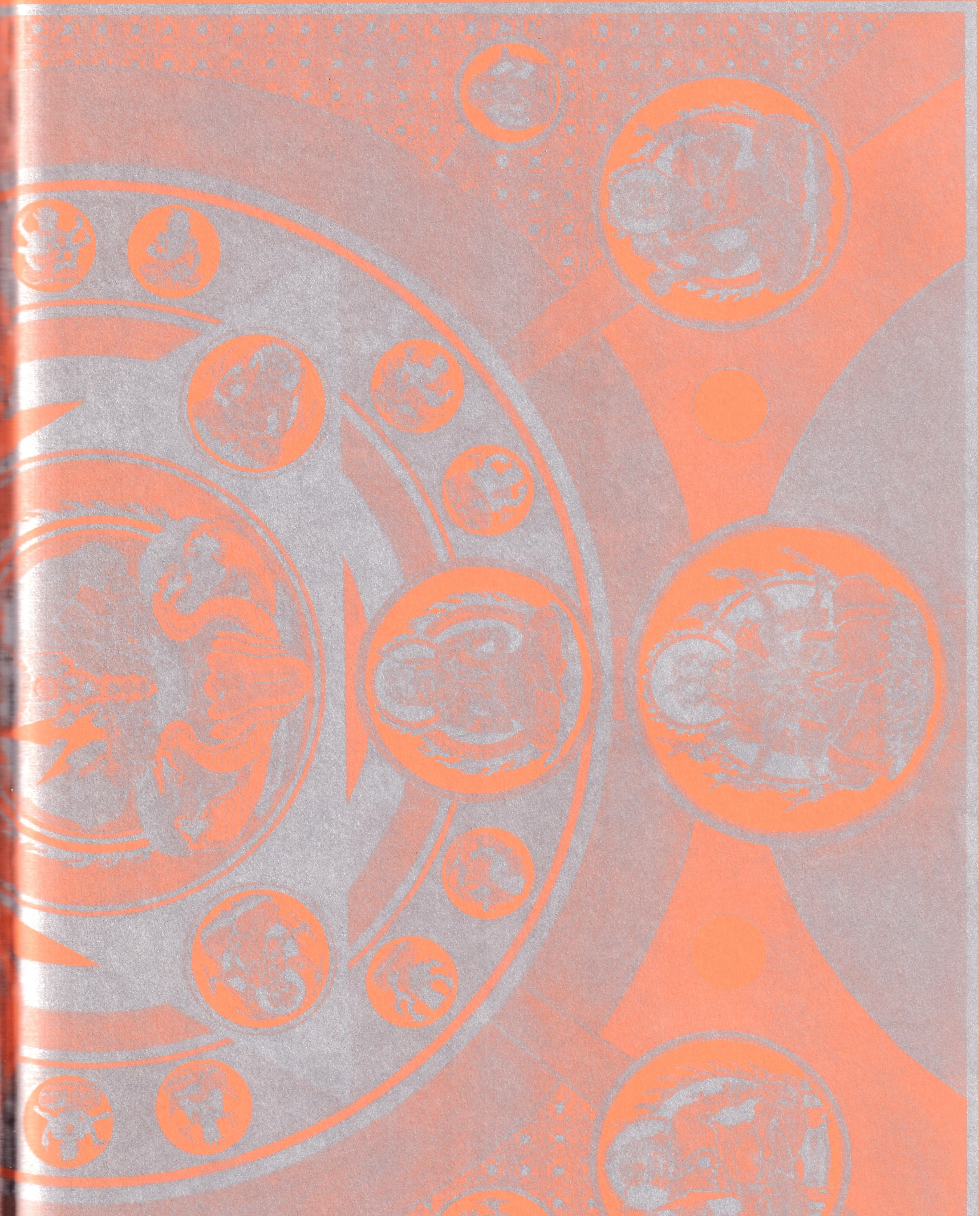
SIRENE VS. DEVILMAN
シレーヌVS.デビルマン―死闘



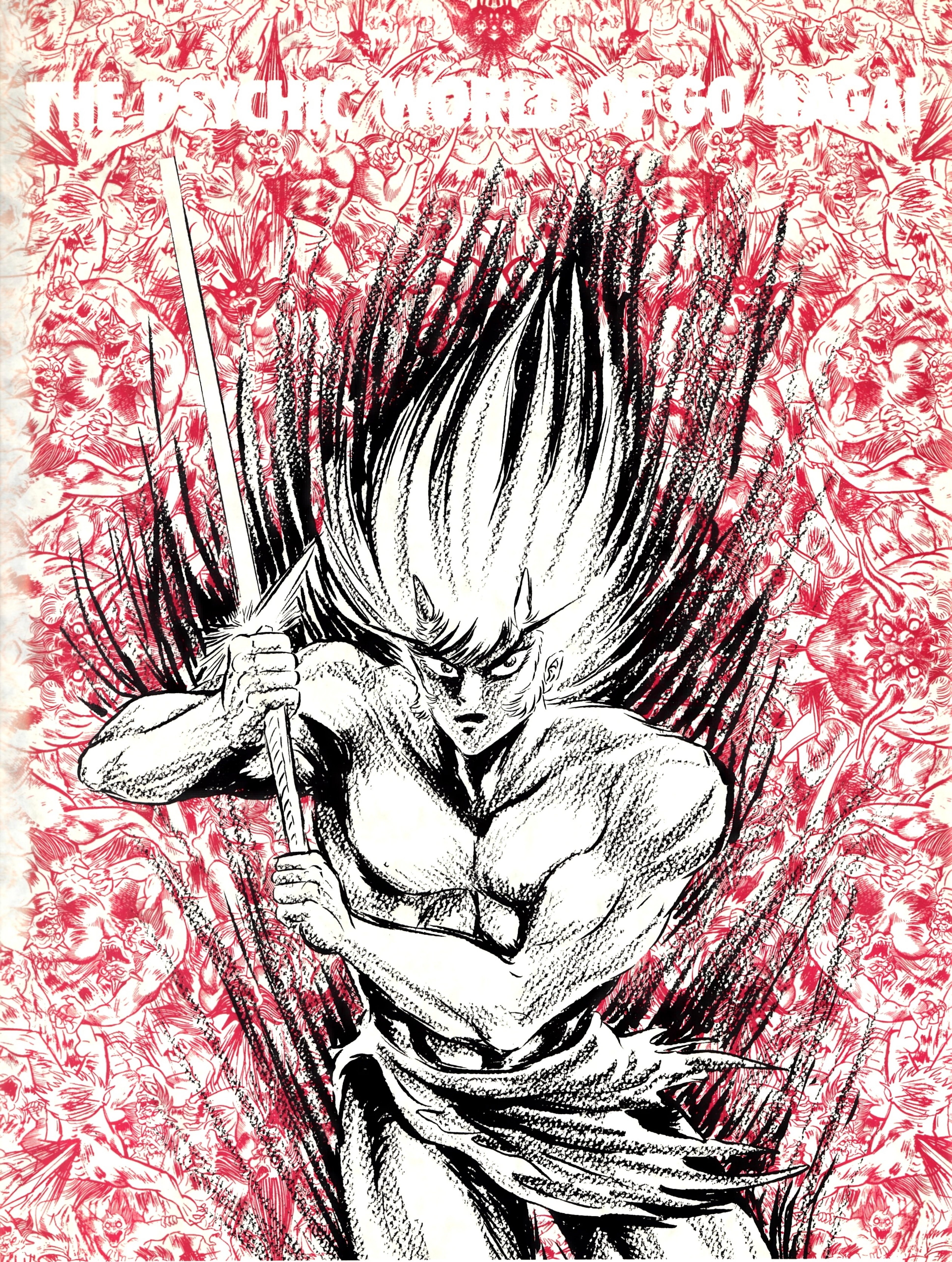
JINMEN

ジンメン―哀しみのデスマスク









ISBN4-06-176901-4 C0079 ¥1800E (0)

講談社・コミックス 定価／1800円